

---

# 彼女と陽だまりの中で

黒野晋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女と陽だまりの中で

### 【Zコード】

Z4931C

### 【作者名】

黒野晋

### 【あらすじ】

高校1年の霧宮秋人には悩みの種が・・・。学園のアイドル的ボジショントリック一つ年上の幼馴染。その素直じやない彼女によつて振り回されながらも、徐々に近づく二人を描いた学園ラブコメディ。

## 1日田『死たらすとも遠からず』

所詮人の一生なんてちっぽけで、大して他人と変わらない人生を送るもんだ。電気を発明した偉大なる発明家トーマス・エジソンも、果敢に敵国と戦い自國の為に己の全てを尽くした英雄ジャンヌ・ダルクも、20世紀以降で最も有名な画家であるパブロ・ピカソも、皆死亡率100パーセント。誕生すると同時に死へと闘歩している。歩んでゆく道のり自体は違えど、スタート地点と終着点は同じなのだ。行き着くところ皆同じだと思うと、俺は途端につまらないと感じてしまう。死んだとき、自分には何が残るのだろう。天国や地獄でもないかぎり、死は生まれたときと同じ「無」に還ると、俺は思う。

それでも、己の人生を全う出来た奴等は幸福なほつだ。若くして命をなくしたツタンカーメンや、日の出も見ること叶わずに流産された子供なんて報われないにもほどがある。前日はあんなに元気だったのに今日にはポツクリ、なんていうのはよくある話で、“死”に対する理解も覚悟も何もできないまま残された遺族も、また哀れで報われない。

そうした何時襲い掛かって来るか分からない死の恐怖に震え脅えながら、希望や夢に縋つてヒトは生きてる。

本当は怖いのに笑つて誤魔化す。

そんなことをしながら恐怖や苦痛を全部まとめてオブラーートに包み込んで、顔を背け無理やり希望や夢に眼を向ける。

それは皆一緒。

ヒビのつまみ、ヒト科である俺にも夢くらこはある。

5割の実力と4割の運、1割の恩恵さえあれば実現できるくだらない夢。

まあ今のところ、実現確率0パーセント、見込みなしだが。

長くてウザッたかった梅雨も明け、季節はいよいよ初夏を迎えていた。

7月に入ると太陽はますます日照り、アスファルトの上は暑さで歪む。日中は早朝から蝉が鳴き、夜は蛙と鈴虫の大合唱。身体を舐めまわすぬるい風を感じると、梅雨が狂おしいほど恋しくなり、温室効果ガスとそれに伴う地球温暖化を本気で恨みたくなる。

地球上の全人類が一日中息を止めていたら、どれだけの二酸化炭素が削減できるのだらう。

そんなとつとめのないことを真剣に考える、平日の朝。

「ふあああー」

自分の机にへばり付き、人目も気にせず大口を開けて欠伸をする。いやはや、学校といつものはめんじくさいことこの上ない。

「秋人、お前朝からへばつてゐるな」

倉本司くらもとつかさが呆れを大分に含んだ声で話しかけてきた。

「見えるか？俺の後ろにへばり付く亡靈むうれいが」

「ん？亡靈のよつな秋人がか？」

「何でもいい・・・」

会話のキヤツチボールが億劫になり、適当に返事をし、机とキス。だいたいなんで朝つぱらから「男の敵」としゃべらなければならぬのだ。

この男　倉本司は学年一の美形。いや、学校一といつても針小棒大ではない。

180センチの長身に、長めの前髪から覗かせる切れ長の眼。顔のパーツ一つ一つが整つていて、基本的に友達になりたくない奴ナンバー1。流し目なんてされた女子なんかは、即フオーリンラヴ。

しかし言い寄つて来る女子は星の数ほどいるのに本人には全くその気はないらしい。それがまた波紋を呼び、同学年だけでなく今や2・3年生のお嬢様方にもモテている。

容姿端麗、頭腦明晰、運動神經抜群。

才色兼備とはまさにこのことだ。

うぜえ。マジで思つていた。それは男なら誰でも抱く感情であり、自分より優れた人材に嫉妬するのは人間の性だ。

しかし、普段はクールで分かりにくいが意外と情に厚い。そのことを知つてからは一応親友的ポジションについてる。

窓の外を眺め、一人ごちる。

「夏だなあ」

いつもの場所へと向かうため、弁当片手に廊下を歩く。  
昼休み。

ここ、東雲高校は浦浜市のはぼ中心部に位置する。私立である東雲高校は生徒数一千人を超えるマンモス校で、創立十数年というその歴史の浅さとは裏腹に著名人を数多く輩出している。

「自由」が校風のこの高校の最大の特徴は学校行事の豊富さにあり、学校祭や修学旅行、スポーツ大会に加え、クリスマスパーティ

や歩行祭などもある。

更にもう一つの特徴、それは学費の安さであり、俺がこの学校に通う理由もある。

この校長兼理事長は某有名財閥の当主であり、私立東雲高校の創設者なのだ。有り余る金の使い道に困ったのだろうか、十数年前に開校し破格の学費で生徒を通わせている。大物と俺ら一般ピーポーとのスケールの違いをさまざまと見せつけられた思いだ。

俺  
霧宮秋人きりみやあきとはそんな高校の1年3組に所属している。

1年3組の教室は、4棟あるうちの4棟目。つまり校門から一番離れた場所に設置された校舎にある。各棟は3階構成の2階部分に通された渡り廊下で繋がっており、1棟は職員室と特別教室。2棟3棟4棟はそれぞれ順に、3年2年1年の教室である。1年生は移動教室の際にかなりの距離を歩かなければならぬので、この配置は1年生への嫌がらせではなかろうか。

俺の住居は浦浜市のやや東に位置する住宅街の一戸建て。浦浜駅から一駅ほど行ったところだ。通学時間は40分程。これが多少ネットである。学校が近場であつたならどんなに救われることか。

1年3組の連中は騒がしい奴らばかりだが、大半はいい奴で構成されている。入学して約3ヶ月が経ち、ようやく蟻わだかまりが解けてきた状態で、俺にも友達はできた。その一人が倉本司である。

俺は良き友人たちに囲まれ、学校生活をめい一杯満喫し、青春を謳歌おうかしている最中、だと思つが、果たして青春とは何なのかと疑問を感じるのもまたしかり。

廊下の突き当たりにある非常口を開け、その先にある非常階段を下りて裏庭に出る。

学校の裏庭は雑木林となつており、幾つかのベンチが置いてある。しかし普段この場所に訪れるのは俺くらいで、人気と人気のないスポットだ。俺がこの場所を知ったのは少し前のこと。

慣れた感じでいつもの木の下で幹に寄りかかり、弁当を開く。

遠くから運動部の掛け声と女子たちの嬌声が聞こえるくらいで、この場所は閑散としている。

蝉の鳴き声が聞こえない、不思議な場所。

弁当をかつ込み終わると、片膝を立てて眼を閉じる。

瞼の裏側に映る木漏れ日が心地よい。そよ風が前髪を弄び、小鳥たちが子守唄を囁く。

じわじわと押し寄せるまどろみに意識を預け、俺は暫しの浅い眠りに墮ちた。

ルルルルルル、ルルルルルル

アラームの音と、バイブレーシヨンの振動により眼が覚めた。

昼休み終了5分前。こつもの時間に携帯のアラームをセッテし

てこる。

「よつと」

老人のように腰を上げると、両手を挙げ伸びをした。関節がぽきぽきと音を立てる。

「さてと、あと3時間頑張りますか」

俺は弁当を提げ、教室へと引き返した。

「おい秋人」

教室に戻ると司が声を掛けってきた。

「ん?なんかあつた?」

「綾崎先輩が探してたぞ」

「あつやつ」

「あつやつって・・・」

司が俺を<sup>たじな</sup>瞪めるような表情をした。

「いいんだよ別に。ビツセヒを使われるだけだから」

俺はやれやれといつ風に首を振ると、窓際の席へと向かつ。

開け放たれた窓からグラウンドを疾走する女子生徒をぼんやりと眺めつつ、古文担当のハゲ教師の話を聞くともなしに聞いていた。

ここは2階。景色はいいのだが、夏の暑さが教室全体のやる気をなくさせる。身体にべったりとした汗が纏わりつき気持ち悪い。

ぼ 。  
。

女子生徒数人がグラウンドから離れたこの棟のすぐ近くで体操をしている。

東雲高は現代に屈強として残るブルマ適用校だ。今時時代錯誤もいいところだが、もちろん男子生徒からのブーリングはない。女子生徒の中にちらほらと抗議の声が上がるが、男子によつてうまく言いつぶめられてきた。

前後屈をしてちょいど前屈みになつてゐる女子生徒の後ろ姿に目が留まる。

ブルマから伸びる長い足がなんとも……ではなく、なかなかスタイルが……「じつほんじつほん」。

自然と顔の筋肉が弛緩する。たぶん情けない顔をしているのだろう。だけどどうしても弛んでしまうのだから仕方がない。

じつと彼女を見つめていると、何かが脳裏を掠めた。

「どこか見覚えがあるような……」

刹那、眺めていた女子生徒が後ろに反り返る。

これまで見えなかつた顔が目に飛び込んできたと同時に彼女と目が合つた。

途端に俺はパブロフの犬の如くほほ条件反射と言つていいほどの勢いで見るみると蒼くなつた。脂汗が頬を伝つ。1秒ほどして我に返ると、俺は急いで顔を逸らした。

やつてしまつた。

何故気がつかなかつたんだ俺は。

授業を受ける気など毛頭なくなつてしまつた俺は、へなへなと机に平伏すのだった。

「どうした秋人、いつもも増して生気が感じられないぞ」

放課後の教室で司が声を掛けてきた。

「わかるー？」

「ああ、アホ面してる」

「ううせえー！」

つたく、司は心配してるとかどうかいまいち分からん、と心の中で毒づく。司の本理解できる奴つて大物だ、きっと。

「その様子じゃ、どうせあの人絡みだろ」

「ちつ、分かってるなら傷口広げるよつなことするなよ」

「別にそんなつもりはないんだがな」

心底心外だと言つよつに肩を落としてみせる。

「どーだか」

仏頂面している俺を見て、司は目を細める。

「なんだよ」

俺が問いかけると、

「『愁傷様』

それだけ言い残して薄情な友人は颯爽と教室を去つていった。腹立つな本当に。

教室で一人時間をつぶして、空が茜色になりかけた頃に下駄箱へと向かった。別に居残りさせられていたわけじゃない。これも“彼女”に会わないため。

スクールバッグを担ぎ、校門へと向かう。

ヒグラシの悲しげな鳴き声がどこからともなく聞こえてくる。まるで俺の未来を暗示するかのように。

校門に近づくにつれて、誰かが門柱に寄りかかって立っていることがわかった。

姿確認。

げつ

極力顔を合わせぬよつに素通り決定、と脳内会議で瞬時に結論が下される。

俺は俯き、できるだけ他人の風を装つて門柱を通過した。

「ねえ」

例の彼女に呼ばれる。

無視。

「どうしたのかな、秋人君」

猫なで声で俺の名前が彼女の口からつむがれる。思わず寒気を催し、冷や汗が背中を伝つ。

「……」

ただならぬ殺氣を感じ、結局俺は壊れかけのブリキ人形のように振り向いた。

口調が妙に優しいとき、こいつはかなり怒っている。長年に亘る経験の基、培われた知識である。

「なんだよ、瑞穂。いたのか」

そう、こいつの名前は綾崎瑞穂。

一つ年上の、俺の天敵にして幼馴染。東雲高校2年6組所属。部活動は俺同様、帰宅部。成績優秀、容姿端麗の我が校のプリンセスで、その人気はファンクラブが立ち上げられるほど。言い寄る男は数知れず、フツた男も数知れず・・・。

身長160センチ強。スタイルはモデル顔負けであることは彼女のプロポーションから一目瞭然だ。子顔でパッチリ一重、すうつと通つた鼻筋、ほつそりとした顎。髪は少し茶色がかり、背中まで伸びるノングヘア。

「どこをとっても見劣るところなどない。まさに神の申し子と呼べ

る存在！－ ファンクラブ会員N.O.さん談

だがつ！俺は声を大にして叫びたい。外見に騙されるなど－

普段の奴は猫かぶりもいいとこだ。俺はそんな瑞穂の学校生活を垣間見て心底驚いたものだ。俺に対する態度との違いには、もはや閉口するしかない。

「白々しいわね。これだけ待たせといで、その言い草はないんじやないの？秋人」

なおも優しい口調。だが、目が笑っていないぞ、目が。

「別に待つてなんて言つた覚えはない」

瑞穂の眼光が鋭さを増す。

「こんな時間までいつたい何してたの」

「瑞穂に教える義理はない」

「お腹空いたな」

「あつそ」

「奢つて？」

やつぱりそういうやつ

「生憎と、今俺金欠なんだわ。悪いね」

「ふうーん……………それにしても暑いわね」

瑞穂は制服の首元をパタパタとさせて風を送つている。豊満な胸の谷間も見え隠れする。

「ビー見てんのよ」

「べ、別に」

「6限目。私に色目使つてたでしょ」

「何のことだ？」

声が僅かに上ずる。

「惚けないで。私視力いいの。ああ、秋人にそんな目で見られてたなんて、私心外だわ……」

明らかに演技と分かる落ち込み方。それでも、俺に対する効果は抜群だった。

当たらずとも遠からず、俺だって最初からお前だってわかつてりや、色目なんて使わなかつたのに……。

「誰がお前なんかに色目つか

「秋人」

「…………」

「奢つて？」

「・・・・・ハイ

俺はがつくりとうな垂れ、真っ白になるのだった。

「「ただいま」「

俺は憔悴しきつた顔で、瑞穂は満面の笑みで戸口を開ける。くそう、パフェ2つも食いやがって・・・。なにが、「私を待たせた分と、一緒に帰つてあげてる分」だ。どちらも頼んでねえよ。瑞穂のお腹は膨れたが、俺の財布と心は萎んじまつただろうが。

「おかれり~」

パタパタというスリッパの音と共にエプロン姿の明日香さんがこちらへやってきた。綾崎明日香は瑞穂の母である。とても綺麗な方で、どことなく瑞穂と似ている。気立てがよく世話好きで、まさに主婦の鑑といえるだろう。

ただいまと言つたが、ここは俺ん家ではない。ここは霧宮家のお隣、綾崎家である。二年前に両親をなくしてからは、夕飯など様々な面でお世話になつている。

瑞穂は、父親の篤史さん<sup>あつし</sup>が単身赴任しているので、明日香さんと二人暮らし。親子離れ離れでも、それなりに楽しくやつてこなつた。

「今日はばしいぶんと遅かったのね

「いや、まあ・・・」

靴を脱ぎながら曖昧<sup>あいまい</sup>に笑う。

「あら、秋ちゃん元気ないじゃなー。・・・・・・辛いことでもあつたの?」

俺の心情を的確に読んだ明日香さんは、俺の手をとり心配そうに覗き込んでくる。女性特有の甘い香りが俺の身体を包み込む。明日香さんは本当に瑞穂の母親なのだろうか?どう見ても年の離れた姉妹くらいにしか見えない。それに、瑞穂と違つて身体中から優しさが滲み出でている。この胸に飛び込んでゆけたら、どんなに楽だろうか。

「じゅつ

「ひー。こつこつしてえー。」

俺は悶えながら弁慶をねじぐる。  
もだ

「何すんだよッー。」

「あら、めとなさー。足が当たつたやつた」

瑞穂は棒読みで台詞をはき終えると、澄ました顔でリビングに消えた。

「何かしたか、俺

瑞穂の理不尽な攻撃に、怒りを通り越して半ば呆れていると、隣で明日香さんが子供のよつにくすつと微笑んでいた。

夕飯の支度が整つたので、三人で席に着く。

「くあああ、腹へつた」

「私も~」

パフュームも平らげといてまだ食つんかい、このお嬢様は。

「ところで、秋ちゃんは友達できたの?」

「明日番さんの手料理に舌鼓を打つつつ、呆れを含んだ声で答える。

「あ~、そうだけ?」

「そうです。しっかりしてくさー。それに、友達もひやんと作りましたから

「世話を好きなのはいいが、俺に対しても最近疲れてるみたいだから、うまくいってないんじゃないかと思つて」

「あお? ならないんだけど。でも、最近疲れてるみたいだから、うなことを口にした日は、俺の命日にならかねない。

それは瑞穂のせいです、と言いつこなつて口を慌てて噤む。こんなことを口にした日は、俺の命日にならかねない。

「大丈夫よママ。それに、ママは秋人のこと心配しますが」

「飯を口に運びながら、心底どうでもいいよつて瑞穂は言つ。

フンッ、お前のことなんて、ぜつてえ心配してやらねえ。

そう心に誓つていろと、明日香さんの目が悪戯に光るのが垣間見えた。

「そういう瑞穂ちゃんだつて、いつも心配してゐるじゃない」

「してないし」

「ホントに? 昨日だつて、秋ちゃん夕飯に顔出さなかつただけなのに、そわそわと落ち着きなかつたじやない。終いには「秋人呼んでくる」とか言って何度も行きかけてたのは何なのかな?」

「ママつ……」

瑞穂ががるがると明日香さんにくいかかる。

「あれは秋人にチエス負けたまんまだつたから気にくわなかつたのつ! それじゃなきや、どうして私が秋人なんかのこと心配しなくちやいけないのよ」

へいへいそーですか。まつたく、このお嬢さんはムカつく」とばつかり言つた。

「あらあら、素直じやないんだから」

明日香さんが微笑む。反対に瑞穂はしかめつ面になつて食器をダントン、と机に叩きつけると、

「うわーわまつー」

わう叫んで大股でダイニングから出て行つた。

はあ、と溜息を吐く。

当然の如く空になつた瑞穂の食器がどこか誇りしげに見えるのは、俺の氣のせいか？

コンコン

2度ノックする。

「・・・・・」

10秒待つたが応答がないので「入るぞ」と言つて瑞穂の部屋のドアを開けた。

いつ見ても瑞穂には似つかわしくない部屋である。見える範囲でもぬいぐるみは5個ほど。しかもブーさんやらスヌーピーやらつさぎやらで、まるで統一感なし。カーテンはピンクで、ベッドも淡い桜色をしている。

そのベッドの上で、パジャマに着替えた瑞穂が俺を睨んできた。

とにかくを隠したようだが、はて、何だったのだらうか。

「何よ

瑞穂が低い声で唸る。

「チエス、やるんじやないのか?」

そう言つて、瑞穂をまじまじと見る。いやだつて、ヒョウはないだろ? ヒョウは。着ているパジャマの柄はイチゴでも水玉でもなくて、ヒョウだった。そんな柄、どこに行けば売つてゐるんだ。それにお前は何歳だ。

「・・・いい、もつ飽きた

「あつそ

「・・・・・・

俺は嘆息する。

「わかつた。んじや、俺帰るわ」

踵を返し、部屋を出る。後ろで瑞穂の声が聞こえた気がしたが、振り向くと瑞穂は布団を頭から被つていたので、何も言わずに扉を閉めた。

階下に降りると、明日香さんが目を爛々と輝かせて待ち構えていた

た。

「どうだった？」

俺は頭の後ろで手を組む。

「どうもいつもあつませんよ。瑞穂ずっと仏頂面でした。チエスもやうなこつて」

「わう・・・。あの子も素直じゃないわね。・・・それに秋  
ちやんも」

?

「あの、それどういう意味ですか？」

「わあ？」

明日香さんは笑つて誤魔化す。

「わあって・・・それに、何で今更チエスなんか」

「わあ？」

俺は唇を尖らせる。

「分かりました、今日は帰ります。夕飯おいしかったです、」  
「走  
様でした」

一礼して玄関へと向かおうとして、明日香さんと呼び止められた。

「秋ちやん、あんまり瑞穂ちゃんをこじめひやダメよ。」

「…………それ逆です」

思ひ出さうの三には俺たちの主従関係が逆に見えたのだつか。  
やつ想いつと血を落とすかにはこりれなかつた。

## 2日目『天使と悪魔』（後書き）

感想・批評等待っています。  
とても励みになるので、投票もどーぞよろしくお願いします。

朝、やつとの思いで教室に辿り着くと、いま一つ風采が上がらない男子生徒3人に囲まれた。

「なあ、秋人つてさあ、なあ〜んか綾崎先輩と仲いいよなあ

「昨日だつて一緒に帰つてたの見た奴いるし」

「ぶつっちゃけどういうカンケーかなあつて」

笑いながら徐々に距離を詰めてくる。見事なチームワーク。

「・・・・・何?」

俺が顔を上げると、3人は明らかに顔を引き攣らせた。それもそのはず、俺は朝方までゲームに勤しみ、目の下に盛大な隈を作り、いかにも不機嫌そうなおんちゃんの如き眼光を放っていたのだから。まあ、俺は明日香さんの言葉が気になつて一睡もできなかつたのが本音だが・・・・・。

それにしても、おい、何だその引き様は?軽く傷ついたぞ。

バケモノでも見たような面下げて固まっている3人にむかって繰り返す。

「で、何?」

「「「なんでもいいません」」

見事なコンビネーションを發揮し、ミリのぶれもなく同時に一礼すると、そそくさとクラスに溶け込んでいった。本当になんなんだあいつらは。

俺は窓際の自分の席に着くと、大きな欠伸を一つした。

眠い。激しく眠い。

震度6強の地震が教室を襲つたつて、校庭に未確認飛行物体が降り立つて地球侵略の手始めにこの教室を占拠したつて、目の前でスカートがはためいたつて、それはどこ吹く風。顔を上げよつとも思わない。

・・・・・いや、さすがにスカートには反応するけど。だってねえ？男の性さがだもん。

ふむ、それにしても、だ。瑞穂の人気はやはり凄い。この学校の男子で瑞穂の名前を知らない奴はいないんじゃないかと思えるほど、男子同士で恋バナになつたり猥談をしたりすると必ず一度は瑞穂の名前が挙がる。さつきの3人組も田を輝かせていた。揃いも揃つて籠絡されているのを田の当たりにすると、同じ雄であることが悲しくもなつてくる。

俺はそんな哀れな奴等に教えてやりたい。女はお前らほど純粹で単純じやないんだつて。つか、すでに何度も教えてやつたが、俺の話に耳を傾けてくれる奴などいなかつた。それどころか「俺たちの瑞穂姉さまを穢すなあー！」とか言つて蹴りいれられた。

重症だな、こりや。

「よ」

「…………」

司が声をかけてきたが顔を上げる『反応』ない。

「寝てんのか？」

「…………」

寝よいとしたといふをお前に邪魔されました。

「お前宛にラブレター届いてるだ？」

「…………マジ？」

「まさか」

「止めー…………。

司は俺の机に腰掛ける。

「乗んじゃねーよ」

司は不機嫌オーラ丸出しの俺の顔を3秒ほどじっと見つめると、

「情けねえ顔」

「うぬせえー」

そんなのいつかはとうに気付いてんだよ。それにお前に言われると数倍ムカつくわ。

「隈凄いけど」

「知つてゐる」

「悩み事があつて眠れなかつたのか？」

— ● ● ● ● ●

「かき星」

喚きながら両耳を塞ぐ。

そんな俺を見て、口は溜息を吐く

「今日ケーセンでも行くか？」

「何て？」

司は視線を逸らし、何か躊躇う表情をする。

- . . 別に

?

やつぱりわからない。」」この考へることを察せぬよつになるにせ、三ヶ月といつ町田じや短すぎるのか？

「行きたいのは山々だけど、生憎とびつかの我仮野郎のせいでマジで金欠なのよ」

悪いなという意味を込めて苦笑いをする。

「そうか、ならいい」

司は少し残念そうな表情を残し、自分の席に戻つていつた。

昼休み。

授業中同じ体勢で寝通していたため、体の節々が痛む。軽く伸びをして骨を鳴らしていると、ズボンのポケットがメールの受信を示すように震えた。

携帯を取り出しへメールの受信ボックスを開く。

「・・・・・よし、寝るか」

何事もなかつたように携帯をしまつと、机に突つ伏した。

ヴ　、ヴ　、ヴ

机に突つ伏したままポケットを探る。

待ち受け画面には「メール受信1件」の文字。

「…………」

何も言わずにポケットにしまつ。

暫く逡巡し妙な不安を感じたので、安らかに眠れる場所を探そうと立ち上がったとき、

「ごふつ

右ストレートが俺の鳩尾みやざおちを抉えぐつた。暫く悶え、声にならない声を発する。

「…………よ、吉田っ！ いきなり何しやがるつ……」

「うるさいっ！ 世の男子の怒りだと睨のぞえつ……」

やう涙声で叫んで教室の入り口を指し示すと、辺りに神風を巻き起こしながら脱兎の如く去つていった。

殴られたことも忘れ、暫し呆然としながら吉田の出て行つた入り口を見るともなしに見ていくと、

瑞穂が満面の笑みを浮かべてこひらて手を振つていた。

そういうことですか・・・。

俺は廊下に出る。

「何だよ、4棟まで来て」

瑞穂は俺の言葉に少しそうとした表情を作った。

「放課後買出しに行くから

「何で?」

訳がわからず聞き返すと、瑞穂は「そんなことも分からないの」と言つよつこため息をつく。それだ、その態度がムカつくんだよ。

「今日金曜日よ」

「あ、そうか、明日香さんいないのか

毎週金・土・日は、明日香さんが夫の篤史さんの単身赴任先に向かうので料理を作ってくれる人がいなくなる。日曜日の夕方頃には明日香さんも帰つてくるので、その日の夕飯の心配はせずともよい。しかし金・土は自炊するか食べに行くかして乗り切らないといけないのだ。まあ、ほとんど自炊しているのが現状だけだ。

「わかつた、それじゃ放課後、校門で」

「うん」

瑞穂は「待たせたら承知しないからね」と一言付け足すと、踵を返して足早に去っていった。

3回目『野はつりこむ』（後書き）

どうぞも黒野晋です。

クロノススムつて変な名前ですよね？

・・・・自分で付けて後悔しました。

投票よろしくお願いします。

感想・批評等隨時受け付けてます。

## 4日目『湯煙殺人事件』

放課後。

校門に行くと、すでに瑞穂が待っていた。

「遅い」

瑞穂は腕を組み、足を肩幅に開いて俺を睨んでくる。

「はあ？ これでも授業終わってすぐに飛び出してきたんだぜ？」

絶対に俺のほうが早いと思つたのに。 じこつ「ビリードアもア」持つてるんじゃないのか？

「…………それって、私を待たせなによつて？」

「そうだけど……」

「ふう～ん…………まあいいわ。 行きましょ」

あれ？ 怒らないの？ 瑞穂の態度に違和感があるが、怒られなかつたので結果オーライ？ 瑞穂も自分の理不直さに少しでも気が付いてきたのか？

「なあ、」

加減を知らない太陽が照り返す中、俺は隣を歩く瑞穂に呼びかけた。

「何?」

さすがに瑞穂もこの暑さに参っている様で、言葉にいつもの覇気が籠っていない。

「わざわざ買出しするほど食材切らしているのか?」

瑞穂はあごに手を当てて考える素振りを見せる。

「そうね・・・、ないわけじゃないけど、ちゃんとしたものは作れないかな」

「別に簡単なものでも俺はいいんだけど・・・」

「秋人がよくても私は嫌」

「そーかい・・・」

近所のスーパーに立ち寄る。自動ドアが開くと共に中のひんやりとした空気に包まれ、遅れてスーパー特有の匂いが鼻を突く。瑞穂は買い物籠を手に取ると、生鮮食品売り場に足を進めた。

「瑞穂、荷物持ちくらい俺がするよ」

「そう言って買い物籠を分捕る。」

「あー? たまには気が利くのね」

「たまには余計だ」

瑞穂がくすつと笑う。

「で、今日は何作るんだ?」

「そうね・・・暑いから冷やし中華にでもしようかと思つたんだけ  
ど。それと、野菜炒めに『シソワーズスープ』いいかな?」

「夏らしくていいんじやね?」

聞きなれない単語があつたが、食いもんであることは違ひなさ  
うなのでスルー。正直なところ、俺も冷やし中華が食べたいと思  
つていた。

「じゃあ決まりね」

瑞穂は嬉しそうに微笑むと、胡瓜を籠の中に放り込んだ。

「瑞穂、これ買つて?」

「ダメ。必要ないでしょ」

瑞穂は俺が差し出したポテチを容赦なく棚に戻した。

「ケチ」

俺は唇を突き出す。

「秋人はいつまで経っても子供のままね

瑞穂は溜息をつき、やれやれと手を振る。

「ポテチくらいいいだろ」

瑞穂は俺の抗議の声を無視し、すたすたと歩いていく。俺の楽しみを奪いやがつて・・・。夏季限定の新作が出たから食つてみたかったのに。俺はカルビーを恨めしそうに睨むと、やがて諦めて瑞穂を追いかけた。

「おー」

俺が後ろから声をかけると、瑞穂が少しひくつとなつて固まる。

「なに?」

「さうげなくプリン入れてんじゃねーよ」

籠の中からプリンを取り出して、田の前で振る。

瑞穂はすばやく俺からプリンを奪取すると、

「ハ、これはいいの」

「どうして？必要ないだろ」

「必要なの？」

瑞穂をじーっと睨む。

「…………ったく」

けつ、自分だって子供じゃねーか。

理不尽だ。ポテチとプリンの必要性の違いが俺には理解できない。まったく、瑞穂は昔から甘いものに目がないよな。普通にケーキ3個もいっさに食つし、昨日だつてパフェ2つも・・・。うえ、考えただけで吐き気がする。口常にあれだけ食つてたら普通太るだろ、なんなんだよあのボディライン。

その後、プリンの入つた買い物籠はそのまま無事にレジに通されたのだった。

夕食も滞りなく終了し、今は夜の11時。綾崎家のリビングで、画面の中のベテランお笑い芸人を虚ろな目で眺めながらまどろむ。さすがに昨日の夜寝てないだけあって瞼が重く圧し掛かってくる。

夢の世界へダイブする5秒前、遠くから瑞穂の声が微かに聞こえてきた。

「秋人（）、私お風呂入るから（）」

「・・・ん（）」

眠い。今朝の数倍眠い。

あー宿題やらなきやなー、とか、数学担当の山崎ウザいんだよなー、とか思いながらもこつくりこつくり。

も、ダメ・・・秋人、逝きます・・・・・・。

前のめりになり、そして・・・

ごつん

おもいつきりテーブルに頭をぶつけた。

「・・・・・・・痛い」

おでこを抑えて辺りを見回す。

「（）、（）？」

眉間にしわを寄せて考えること数分・・・。

綾崎家で飯を食つてたことを思い出した。

「瑞穂（）？」

返事がない。すでに時計の針は11時を3分程過ぎている。

寝たのかな？

昼間かいだ汗がべつたりと肌を濡らす。ベタベタして気持ち悪い。自分の身体を見て風呂にも入っていないことを思い出し、頭をかきながら脱衣所へ向かう。

明日香さん曰く、水道代とガス代がもつたいないとの事で、時々は綾崎家の風呂を借りている。今更自宅の風呂を沸かすのも面倒なので、今日は借りさせてもらひことにしよう。

脱衣所のドアを開けると風呂場の電気が点きっぱなしになっていた。

本当はこのあたりで気付くべきだったのだろう。しかし、今の俺のろくにまわらない頭では、消し忘れ程度にしか発想できなかつた。

服を脱ぎ、戸を開けた。

もわつとした湯気が俺を包み込む。

湯煙の先でお湯に浸かっていた人物と台詞が重なる。

火照つた身体。僅かに上氣した頬。濡れた髪・・・。

「「あ「」

天国？

ありえない光景に半ば呆然としている俺。

口をパクパクと魚みたいに開閉していた瑞穂がやがて正気に返り、胸を押さえた。

「・・・あ、ああ、秋人の・・・すけべ つ・！」

若い雄に裸を見られた若い雌の悲痛な叫びが、狭い風呂場に反響した。

怒声が俺の眠気を吹き飛ばし、急いで扉を閉める。

正氣に戻った俺の顔を冷や汗が伝つ。

「のとき、本氣で思った。

「、殺される・・・！」

4日目『湯煙殺人事件』（後書き）

どもども、黒野です。

自己紹介にも書いてありますが、ワタクシ、シンクロ部に所属しています。

あ、どーでもいいですね。

## 5日目『仲直り大作戦』

教室。

ぶすうー

司が目を丸くする。

「何だ？朝からいきなり・・・」

ぶすうー

「喧嘩でもしたのか？」

ぶすうー

「・・・・・」

じすつ

司の肘が俺の脳天を直撃し、遅れて鈍痛が走る。

「いつ、いつてえーな！チクショウ！」

頭を押さえ、立ち上がる。

「ガキみたいにいつまでもふて腐れてるお前が悪い」

司は腕を組み、俺を睨め付ける。

だつてだつて！仕方ないだろ、俺のせいじやないんだから。

司の言うとおり、俺は朝から超がつくほど不機嫌だつた。そりやもつ、教室の雰囲気が沈むほどに。金曜日に寢ぼけて風呂を覗いてしまつたばかりに、俺は邪神の怒りに触れてしまつたのだ。これでもかといわんばかりの怒りの鉄槌をくらつた拳句の果てに足蹴にされ、それでも俺は必死に弁解した。

誤解だと。

しかし戯言ぎごんだ、などと軽くあしらわれ蔑む眼差しを向けられた。そんな捨て犬のように可哀相な俺だが、飼つてほしいとこびる眼差しを眼鏡の中年男性に向けるチワワの如く、めげずに心から謝罪した。

だがつ！あいつは一度たりとも俺の善意を受け取るつとはしなかつた。そればかりか、この一日間完全に無視され続け、今に至るといふわけだ。

その顔を司に力説すると、

「それは全面的にお前が悪い」

妙に納得された。ムカつくぞコノヤロー。

「どうして？俺は無罪だ。それでも善意で謝り続けたんだぞ？」

司は「わかつてないな」とでも言いたげに首を振った。

「事故でも故意的にしても、それはこの際どうでもいい。事実霧宮秋人は風呂場に侵入した。違うか？」

違わないけど・・・・・。

「お前は裸見られても平氣だらうが、女性はお前とは違う。ほら、よく言うだら、女心は複雑だつて」

「なんだよ、悟り開いたみたいに。じゃあ自分は女心が分かるのかよ」

「分かるかバカ」

即答しやがつた。しかも堂々と。

「男には一生かかっても分かり得ない事なんじやねーのか？」

俺は唇を突き出す。

「へーへーそうですか。わかりたくもないね」

「まったく・・・じゃあこれからどうすんだよ？」

「なにが？」

「仲直り」

「もういい。別に仲が悪かつたって死なねーし」

ふいっと顔を背ける。

「そつか・・・ま、いいけどな。お前が綾崎家に行きづらくなつて自炊するだけだし」

「うう・・・」

そういえばそうだ。今までのよつに夕食にのこのこと顔を出せなくなる。そしたら司の言つとおり自炊する羽田に・・・。週一日瑞穂と自炊するだけでも面倒なのに、それを毎日か。考えるだけでも眩暈めまいがする。それ以前に、行きづらくなる理由が不毛すぎる。「瑞穂の風呂覗きました」なんて明日香さんに言つて、もし蔑むような視線を向けられたら・・・。

「ダメだっ！ それはマズイ！」

机を思いつきり叩いて立ち上がる。

「じゃ、決定だな」

「何が？」

司にしてはテンション高めで叫びる。

「仲直り大作戦、開始だ」

司が不敵な笑みを浮かべた。

気付いたんですけど、俺、ハメられてません？

少々気付くのが遅かった秋人であった。

放課後。

司に言われたとおり、校門で瑞穂が来るのを待ち伏せする。

俺に『えられし任務。それは・・・

『一緒に下校』

・・・ちょっと待て。何で一緒に下校なんだ？つか、詳細聞かないでただ頷いてしまった俺はバカか？そもそも、一緒に帰ってくれるのか？あーいやこれには語弊があるな。この後に及んで、俺がなぜ一緒に帰らねばならないのだ！それに司、一緒に帰ったところで結果が出ないのは目に見えるだろうつ！司めー、嵌めやがったな。

仲直りせざるを得ない理由はあるんだ。あるが、いま一つ腑に落ち

ちない。すべて俺の責任か？違つだろ。たつた一度のミスで俺がこんなにも悩まされるのは瑞穂のせいだ。そう、瑞穂のせい瑞穂のせい……。

腕を組みながら悶々と悩んで、せわしなく行つたり来たりを繰り返していると、瑞穂が校門に近づいてくる。

「あ

これは俺の声。瑞穂と田が合つた。しかし、瑞穂はすぐ田を逸らし、何事もなかつたかのように校門から出て行く。

「ちよ、ちよっと待てよー。」

思わず呼び止めて後悔する。次になんて話せばいいんだ。「一緒に帰つづつ。」

「何？」「

瑞穂が立ち止まつ、振り向かれてまづいつ。

「あ、いや、その、えと……」

しどろもどろになりながら、言葉を模索する。その間も瑞穂は冷ややかな眼差しで睨んでくる。

俺は、意を決して言つた。

「一緒に帰つても……いい、か？」

瑞穂は口元に手を当て、暫く逡巡しているような表情を見せる。

そして何故か頬をほんのり赤く染めて、

二二

「……今までえええええい！！！」

瑞穂が口を開きかけたとき、遠くから爆走してくる人たちの叫び声が重なった。

数秒後、俺はムサイ取り巻きで圍まれる。

「なんだお前らー!?」

俺を取り巻いている男ども三名が口元を引き上げる

なんなど聞かれたらい  
答えてあけるか世の情け」

右の前髪の長い男がポーズを取りながらおっしゃる。どうかで聞  
ニワノガシタラ。

「瑞穂ちゃんの安全を守るために、瑞穂ちゃんの貞操を守るために、愛

と眞實で悪を讐ぐ」

左のオールバックにした男がポーズを取りながらおっしゃる。

「ラブリー・チャーミーな敵役、ムサ（以下略）」

「銀河を掛けの口 ツト・・・・・」はつ、じゆつ、じゆ、ファン

クラブには、白い明日が待ってるぜ「

ラストに真ん中のちょいデブ男が決めポーズ。

口を開けて啞然とする俺。対して瑞穂は頭に手を当てて、げんなりとした表情をしている。

うわあ～、ここから離れてえ～。

いや、瑞穂ファンクラブの方々だつてことは十分すぎるほどわかつた。だがイタイ。イタイぞこの口 ット団。「ピカ ュウ！ 10 まんボルトだ！」なんてノリで言つたら明日から学校来れねえよ。つか、こいつはいつた時点で俺もマニア？

「とにかく！抜け駆けは許さん！！」

「>?」

俺は四肢を抱えられ、そのまま校舎へ連行されてゆく。

「おこまでよひ、おまひ、じいわねひ……」

必死に抗いながら辺りを見渡すと、部活をしている生徒や、帰宅する先生方の好奇の視線がビシビシと伝わってきた。

「せ、せぬ、マジで……こせああああああああああ」

悲痛な叫びが辺りに響くが当然助けるなどといつ馬鹿げた行動をとるものはいる訳もない。

一人取り残された瑞穂は、ただただ呆然と立ち尽くしていた。

ああ、マジで死にたい。

## 5日目『仲直り大作戦』（後書き）

今回はもうグダグダです・・・・・。

感想・批評等お待ちしております。

あ、もちろん投票も。

6日目『天邪鬼』（前書き）

今回は瑞穂視点です。

## 6日目『天邪鬼』

私は教室に着くや否や、わき田も振らず自分の席に座る。そして机の上で腕を組み、顎を乗せて一人悶々としていた。

「みずほお～、何朝からふすつとしてるのよ。それじゃあ、せっかくの密姿も台無じじゃない」

前の席からそう声を掛けってきたのは倉本有紗くらもとありさ。私と同じ2年6組の生徒で、背が高く、髪はショートカット。元女子バスケ部で、いかにもスポーツマンらしいスレンダーな体躯をしている。なんでも成績が良好ではないらしく、親にバスケ部をやめさせられたんだとか。彼女とは1年のときも同じクラスで、私の良き相談相手であり、私の親友。少なくとも私はそう思っている。

「べつに

「おんやあ？ 彼と何かあつた？」

「あ、秋人とは何もないわよ」

「別に私は“秋人”なんて一言も言つてないけど？」

「・・・・・・」

有紗といふとどうしても有紗のペースに乗らされてしまつ。いつも誘導尋問に引っかかってばかりだ。

「で、なんかあつたんでしょう？隠してないで話しなさいよ」

にやけながら肘でつついてくる。

「はあ～・・・」

この3日間を思い出し、溜息が漏れた。

秋人が悪いんだから。

お風呂、覗くなんて。

一瞬何が起きたのか解らなかつた。いきなり扉が開いたかと思うと、そこには秋人が立つていて。

しかも裸で。

そう、ハダカで・・・。

それにして、・・・遅しかつた。湯気でぼやけていた秋人を思い出す。全体的に引き締まつた体躯、厚い胸板、割れた腹筋。幼少時のそれとは比べ物にならないくらい男らしくなつていた。

そういえば秋人も・・・私の、見たんだよね。どう思つたんだろう。

その後は怒りに任せて制裁を加えたけど、恥ずかしくて土日は顔を合わせることもできなかつた。それなのに秋人は私に必要以上に近づくし・・・。実に心臓に悪い休日だつた。

「顔赤いぞ～」

頬杖を突いて私を覗き込んでいた有紗が指摘する。

「へ？・・・・・ああ、えっと、熱もあるのかしら？」

「小学生染みたこと言つてないで早く話す」

「はい・・・」

私はしぶしぶ事の顛末てんまつを話して聞かせた。

「なるほどねえ～、それは秋人つちが悪い。でも、可哀相じやない？今頃秋人つち泣いてるかもよ～」

「そ、そんなことは・・・・・だつて、しょうがないじゃない」

頬を膨らませる私に有紗は助け舟を出す。

「まあ、瑞穂の気持ちもわからないでもないけど」

「でしょう？」

「こいどばかりに頷く私を見て、有紗はやれやれといった表情を見せる。

「あのねえ、そんな風にいつまでも天邪鬼でいると、秋人つち他の女子に盗られちゃうよ」

「えつ？」

「結構狙つてる女子いるの知つてた？」

「知つてるも何も、わ、私には関係ないじゃない」

有紗はあからさまにげんなりした表情をする。

「それが“天邪鬼”だつて言つてるのよ」

むー。

「睨むな睨むな。瑞穂は秋人っちのこと好きなんでしょ？」

「だ、だれが」

「だあめ。瑞穂はなにかと秋人っちのことばっか話すから、嫌でも  
解るつて」

私そんな自覚なかつたんだけど・・・。

有紗の表情が真剣みを帯びる。

「で、好きなの？」

有紗の問いに対して迷つた揚句、こくりと小さめに頷き、一言。

「好き、かな・・・」

「まつたく、もう少し早く話してほしかつたな」

「『じめん・・・』

本当は誰にも言つ気はなかつた。事実、この気持ちを吐露したのは今日が初めて。それでも有紗には薄々感づかれていたみたいだけだ。あと、ママも。果たしてこの一人に隠し事ができるのだろうか。

有紗は、うつむく私に「しおうがないわね」と言つような笑みを向ける。

「とにかく、一刻も早く仲直りすること。いいわね?」

有紗の言い聞かせるよつつな口調に、私は頷くしかなかつた。

放課後。

有紗に言われたことを頭の中で何度も反芻しながら昇降口を出る。

仲直り、か・・・。

正直言つて難しい。秋人の顔を直視することもままならないのに、会話し仲直りまで漕ぎ着けなくてはならないのだ。必ずしも対面して話す必要はないのだが、電話やメールでは相手に失礼だ。それにこんな精神状態で仲直りなどできるのだろうか。そもそもの原因はあちらにあるにせよ、一方的に暴力で訴え、その揚句無視し続けたのだ。秋人が快く思つているはずがない。

ふと思つ。自分はこんなに純情だつたつけ？

今日何度もわからぬ溜息をつき、うつむいていた顔を上げる。

秋人が門柱に寄りかかって立つていた。

心臓がドクンと音を立てる。風呂場の映像が脳裏にフリッシュュバツクされ、顔が火照るのがわかつた。

ダメ、これ以上耐えられない。

顔を逸らし、校門を通り過ぎる。

そのまま早足で逃げよつとしたとき、

「ちよ、ちよっと待てよー。」

彼に呼び止められた。

思わず立ち止まつてしまい、ネジがきれかけたブリキのおもちゃのよつこぎこちなく振り返る。

「何？

」心のままに話す秋人の心のうち、ついつい低い声を出してしまった。

「あ、いや、その、えと・・・」

彼の言ことよどむ姿を見ながらも、内心でビクビクしていた。

もし心の狭い女だと思われていたら？もしも嫌いだと言われたら？

そう思つと、この先にある言葉を聞きたくなかった。

彼の口が開きかけては閉じる。それが何度も繰り返されたのち、

「一緒に帰つても・・・いい、か？」

えつ？

秋人は今なんて言つたのだろう。「一緒に帰る」確かにそう聞こえた気がする。あれだけ私は秋人に辛くあたつてしまつたのに、それでも一緒にいてくれるのだろうか。

心の奥から嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。

「いい」

「「「までえええええい！――」」

口から紡ぎ出されるはずの言葉は誰かの怒声によつて搔き消された。

呆然としている私をよそに、次の瞬間秋人は変な集団に囲まれ、滑稽な子供染みたパフォーマンスが繰り広げられる。そして彼らは怒涛の如く秋人を連れ去つていった。

正気に返り、一人地団太を踏む。

「むう」

神様っていじわるだと思ひ。

## 6日目『天邪鬼』（後書き）

どうも、黒野晋です。

今回からちょくちょく瑞穂視点で物語を構成していくことに決めました。

それはいいとして、一日後に迫ったテスト。のりきれません。

夏休みの課題、終わりません。。。。。

今年の梅雨明けはやけに早かった気がする。今は7月の半ばだと  
いうのに、空に浮かぶは夏の雲。どんよりとした雲に覆われている  
空を眺めるのも憂鬱な気分になるが、容赦ない太陽と格闘するのも  
億劫なのだ。やはり季節の変わり目が一番過ごしやすい。そしてこ  
んな日はクーラーが備え付けてある教室で過ごしたい。

そう思うが、それでも習慣というものは侮れない。馬鹿の一つ覚  
えのように校舎裏に足を運んでいる自分がいる。

いつしか俺の特等席となつた少しだけノッポな広葉樹。その樹に  
腰掛ける。木陰は涼しくて心地よい。自前の弁当で腹を満たすと、  
目を閉じた。そして近況を整理し始める。

それは俺の日課。

「ひんにちほ

柔らかな女性の声によつて、浅い眠りは妨げられた。どうやら考  
え事をしているうちに眠つっていたようだ。次第に焦点が合つ。その  
人は屈んで膝に手を当てて、俺を上から覗き込んでいるようだ。短  
いスカートから伸びている長い足にどうしても目がいつてしまつ。  
いけないと思い、視線を上げるが、相手の顔には影が落ちていてよ  
く見えない。

横になつていた身体を起こし、相手の顔をまじまじと見た。

「うん、誰ですか？」

「あ、えーと、たしか・・・・・・・・」

眉間に手を当てて考えるが、答えは喉の奥でつっかえてなかなか出てこない。

そんな俺を見かねたのか、その人は腰に手を当てて、

「有紗だよ。有紗先輩」

「・・・ああ、瑞穂の友達のー。」

パチンと指を鳴らす俺を見て、有紗先輩は肩を落とし溜息を吐く。

「人の名前と顔は覚えておくもんだよ。これ、世界の常識」

「すみません・・・」

それにしても、先輩が俺のとこに来るって事は、やっぱ瑞穂がらみか？

「あの、俺になんか用ですか？」

「うん。とっても大切な用事」

有紗先輩はそう言いつと、俺の隣に腰掛けた。スカートの裾を押さえ、体育座りをする。

「瑞穂のことなんだけど

「

やつぱりか。

「最近ね、どことなく元気ないんだよ。普段生活しているぶんにはいつもの瑞穂なんだけど、ふとした瞬間表情が陰るつて言つか・・・。」この前なんかぼーっとして電柱に頭ぶつけちゃうしさ」

「はあ・・・」

「それで秋人っちは原因知ってるかな〜って」

あ、秋人っちは俺のこと?

元気がない、ねえ・・・。たぶん風呂場の件とか関係しているのかもしねれない。口ケット団介入以来俺はすっかり戦意喪失し、ここ何日か瑞穂とはしゃべっていない。校舎が別なので学校ですれ違うこともないし、結局綾崎家での夕飯も自粛しているからだ。といつても明日香さんが毎日夕飯を届けてくれているので自炊はしている。明日香さんは悪いことをしているとつくづく思うが、思うだけで行動に表せないでいるのが現状。仲直りを諦めたわけではないが、ほとぼりが冷めた頃合を見計らつてから改めて謝ろうというのが、今の俺の考え方である。

とにかくここは知らぬ存ぜぬを突き通すしかあるまい。

「さあ?俺はよくわからないです」

「ほんとかなあ?」

有紗は身を乗り出して俺に疑わしげな視線を投げかけてくる。女性特有の甘い香りに少しドキッとする。先輩顔近い。

「・・・はい」

有紗はわざとらしく大きな溜息を吐くと、再び木に寄りかかった。  
「まあいいや。それでね、秋人つちに瑞穂を元気付けてもらいたい  
のよ」

「俺が、ですか？」

「元気喪失させた張本人に元気付けられるのは、正直どうかと思う  
が・・・。」

「有紗先輩、俺に拒否権ありますか？」

「有紗でいいよ」

「はい？」

「だからあ・り・た。呼び捨てでいいよって言つてゐるの

なんて事を言つのだ、この人は。

「でも先輩ですし・・・」

「先輩命令。隔たり感じるから親しい人には先輩とか付けてほしく  
ないんだよね。私呼び捨てとか気にしないし」

「先輩が気にしなくとも俺が気にします」

なおも有紗は食い下がる。

「瑞穂のことは呼び捨てなの?」

「瑞穂は特別で」

「ふう〜ん、 “特別” なんだあ?」

結局これを言わせたかったのか。

「幼馴染だからって意味です」

多少むつとする。

「あははは、そんなこむきにならなくてもいいって。呼び捨てにしていいからその代わり、拒否権は無しってことだ」

ハメられた?

「この人、あなた侮れん。うまい具合に相手のペースに飲み込まれる。

「仲直りにもつながるし、悪い話じやないと思つんだけど?」

有紗先輩は俺が風呂覗いたこと知つてゐるのか。その辛い事実に肩を落とす。

「で、元気付けるつて言つても、俺は何をすればいいかわかりませんよ」

「大丈夫。すぐ簡単なことだから」

簡単なこといつて言つても、先輩と俺とで価値観の違いが激しそうです。

「これまでの生活に戻つて

「・・・と、言つますと、プレゼントをあげるとか遊園地に連れて行くとかして機嫌取りをしようとしてですか？」

「違う違う。なんでそななるかな・・・。つまりね、具体的に言つて、夕飯を綾崎家でとつて

先輩の存外な提言に暫し呆ける。

「そんな簡単なこといいんですか？」

綾崎家に赴く勇氣のない自分は棚に上げる。

「だから簡単だつて言つたじゃん

「でも、そんなことで元氣付けられるんですか？」

有紗は「分かつてないな」とでも言つたげに首を振つた。あ、なんかこの態度にデジヤヴを感じる。はて、誰かさんにも同じことをされたような・・・。

「そんなこと、だからだよ」

?

「秋人っちはまだわからないか」

先輩が優しい眼差しを残して去った後も、俺は首を傾げたままだつた。

壁に立てかけてある丸い時計を一瞥すると、ちょうど夜の7時を回ったところだった。

そろそろかな。

読んでいた雑誌を置んでテーブルの上に置く。

ピンポン

ピンポン。

ソファから立ち上がり、玄関へと赴いた。

「こんばんは」

戸口を開け、明日香さんを招き入れる。

「「」さばんは。秋ちゃんおなかすいたでしょ」

明日香さんが持っていたトレイを差し出すと同時に、食欲をそそる香りが鼻腔をくすぐる。

「ほこもひペペロです。お、、今日はカレーですか」

明日香さんの作るカレーは特別にうまい。いやむし二三ヶ星ショフもビッグコロの味で、一度食べたら病み付くになれる」と聞違になしだ。俺はトレイを受け取りながら、「こつもすみません」と付け足す。

「わの思ひだつた、ひひひで食べてほしごわね」

明日香さんがゆるく笑って踵を返そつとしたとき、俺は慌てて引寄せた。

「あの、そのことで話があるんですけど・・・」

呼び止められた明日香さんは向き直り、小首を傾げる。

「なにかしら?」

「明日か?、また、明日香さんの方に食べに行つてもいいですか?」

俺のおかねとした要求に明日香さんは笑顔になり、手を呴く。

「ほんとひへじやあ瑞穂との<sup>わだかま</sup>蟠つも解消したのね?」

直接原因を言つてないのに、明日香さんは俺と瑞穂の状態をなんとなく理解していた。瑞穂が愚痴つた可能性もあるが、俺への軽蔑の眼差しがないところを見ると杞憂にすぎなかつたらしい。まつたく、この人の洞察力には舌を巻くばかりだ。また、全てを黙つて受け入れてくれる寛大さにも。俺は一生明日香さんに頭が上がらない気がする。

「あ、いえ、それはまだなんですか……でも、解消するためにも一緒にメシ食べようかなって」

苦笑いしながらポリポリと顔を搔く。

「秋ちゃんもやつと女心が分かつってきたのかな?」

「まあ、そんなところです」

有紗先輩の提案なんだけど、と心中で小さく付けした。

「今日からじやダメなの?私たちも夕飯まだよ?」

「今日は、ちよつと……」

今からじや、何を話せばいいのかわからない。

「そり、秋ちゃんにも心の準備が必要だものね」

「まあ、そんなところです」

いたずらに微笑む明日香さんにははと笑い返す。

明日香さんが食器を取りにくる時間を確認して綾崎家に引き返した後も、俺は暫く玄関に立ち尽くしていた。そして真剣にタイムリミットを指を折つて計算し、その期限の短さに愕然とする。

小心者だなあ、俺。

7日目『心の準備』（後書き）

ども、黒野晋です。

課題と小説を天秤にかけ、小説を取つてしまつ私は愚か者でしょうか。

少なくとも親にはそう見えるでしょうね。

投票よろしくお願ひします。また、評価していただけると励みになります故。

見上げた空は夏の星座が黒を飾っていた。そして都会でもないこの地域では、夜になると幾億もの星が瞬く。耳を澄ませども聞こえてくるのは虫たちの囁きばかり。辺りに人の気配はないが、近隣の家々の窓から漏れ出す温かな光には、なぜか胸をほっとさせられる。

一陣の夏特有の熱気を含んだ生暖かい風が汗腺を刺激し、ぬるりとした汗が頬を伝う。

俺は今、綾崎家の前にいる。

携帯を開く。液晶画面には6時58分の文字。綾崎家の夕食はだいたいいつも7時頃。いいかげん顔を出さねばなるまい。しかし未だに敷居を跨げない俺がいる。

なんて話せばいい？

さつきからそのことばかり考えている。堂々巡りもいいとこだ。つぐづぐ俺の度胸のなさに嫌気が差す。時が経過したらほどぼりが冷める？馬鹿じゃないのか俺は。余計謝りにくくなつただろうが。こういづのはタイミングが大切なんだ。千載一遇の好機はたぶん、一緒に下校するときだつたのだろう。その好機を俺はみすみす逃してしまつた。くわう、あの忌々しい口 ット団め・・・。

しかしいくらお邪魔虫を呪つても現実は変わらない。俺は大きく深呼吸を一つすると、頬を叩き、喝を入れた。

よしつ！

扉を控えめに開く。

「お邪魔しまーす・・・」

前方に人を確認。

なんとも運が悪いことに、ひよこのパジャマを着た瑞穂がいた。

風呂上りなのか、バスタオルで頭を拭いている。が、俺の姿を確認すると固まり、俺もドアから半分身体を覗かせている状態で氷結する。

二人の間に気まずい雰囲気が立ち込め、嫌な沈黙が続いた。

なにも“風呂上り”じゃなくとも・・・・。

「よ、よひ、メシ食いにきた」

俺は気まずい空気を払拭するために、わざといつも通りに接してみる。

「あつそ」

しかし彼女の返事はあつけないもので、すたすたと奥に消えてしまった。

ンノヤロッ・・・！

落ち着け、落ち着け俺。今日は何しに来た？・・・・・謝りにきた。よし、それでいい。

自分に対して「どうどう」と落ち着かせている、傍田には危ない人に見える俺を、出迎えにきた明日香さんに見られた。

・・・なんとも間が悪い。

久しぶりに三人で食卓を囲む。しかし口を開く者はなく、黙々と食物を胃に押しやつている。  
はつきり言って美味しい。ない。

別に明日香さんの手料理に文句を付けているわけではないが、このようなピリピリとした空氣の中では、舌は味を全く感知しきれない。

「トランジistorもつかないか?」

明日香さんが苦笑いを浮かべながらコロッケを手にする。

テレビからは淡々としたニュースキャスターの声が聞こえてきた。

それでは次のコースです。

手を組んで原稿を読み上げている男性が声のトーンを落とす。

7月×日未明、浦浜市に住んでいる20代の女性が、通りを歩いていたところ、何者かに腹部を刺され、近くの病院に運ばれました。

(浦浜市・・・?)

よく知っている単語を耳にし、テレビに集中する。それは瑞穂も同じだったようで、箸を咥えたまま視線がテレビに釘付けになつている。

幸い、命に別状はなかつたようですが、腹部に全治六ヶ月の大怪我を負つたということです。犯人は未だに逃走している模様で、××県警は早急に連続通り魔事件の・・・

変わつて、やけに司会者が煩いバラエティ番組が画面に映し出された。

明日香さんがチャンネルをテーブルに置く。

「暗いコースはよしましょう」

「そ、そうですね」

場の空気が更に悪化する危険性を感じ、相槌を打つ。

「連續通り魔事件」は、最近学校でも話題になつてゐる。今回で

3人目。いずれも被害者は若い女性のようで、我が校の女子たちも何かと不安なようだ。学校側としても全校集会を緊急に開くなど、対応に追われていて忙しい日々を送っている。それに比べて男子生徒はお気楽なもんだ。

俺は息を大きく吸い込み、言葉と共に吐き出した。

「あのせ瑞穂、何度も言つようだけど

גְּדוֹלָה מִלְּמָדָה

瑞穂は俺の言葉を遮り、席を立つ。そのまま2階へと上がつてしまつた。

扉が閉まる音がすると、明日香さんが口を開いた。

「秋ちゃん、怒らないでね？あの子も戸惑ってるのよ」

瑞穂の行動に唖然としている俺に、明日香さんは申し訳なさそうに瑞穂のフォローをする。

「……………それが何ですか？ずっと避けられてるし」

「瑞穂ちゃんは恥ずかしがつてただけ。ホントはもう怒つてないんだから。秋ちゃん、あと一步だよ」

明日香さんが軽く背中を叩いて促す。

ビーチや、砂丘、海岸、山、川、湖、湖畔の自然風景。

ノックをする。当然の如く返事はない。予想していたことなので、一声かけて瑞穂の部屋に入ると、瑞穂はこいつのよつてベッドの上でぬいぐるみを抱えていた。

ベッドの近くまで寄る。

「何で逃げんだよ」

ついつい口調が荒くなつてこむことに気付く。

「逃げてない」

そう言つて瑞穂は上田遣いで睨んできた。

「俺には謝る権利もないのか？」

「そんなことは……」

俺は頭を搔き、今まで溜まつていた鬱積を口から吐き出した。

「風田、覗いちましたことは本当に悪かつたって思つてる。でも正直なところ、瑞穂になんでここまで避けられてるか分からない。何度も謝つたじやんか。そんなに俺に見られたのが嫌だつたのか？あん時に殴つただけじゃ気がすまないつてんなら、お前の気が晴れるまで殴つていい。それに俺は、瑞穂に会つ度気まずくなるのはもう

「めんど。それはお前もだらう。」

一息つく。

「だから、その…………もつ許してくれないかな？」

俺がこいつにまくし立てる、瑞穂は終始俯いていた顔を上げる。

「許すから」

その一言で胸を撫で下ろす。

しかしその言葉には続きがあった。

「私の言つこと一つ聞いて」

おこおこおいおい、展開がヤバイ方向に流れてるぞ。

それでも俺に残された選択肢は一つしかない。

「わかった。……なんでも聞く」

女子生徒の制服を着て一日登校だとか、全裸で校庭を全力疾走しろだとか、明日香さんに向かって「ブス」って言えだとか、そんな考えるだけで恐ろしいことを命令されるんじゃないけどビクビクしていると、瑞穂がぼそっと呟いた。

「私を守つて」

思わず身構えた俺にかけられた言葉は意外なもので、気が抜けて

しまつ。

守る？何から？つーかお前は守られなくても大丈夫のよつたな気が・  
・・・・とは口が裂けても言えない。

「通り魔、知ってるでしょ？そいつから私を守つて

「えつと、つまつ、俺に何をしろと？」

「登下校、毎日一緒にしなさい」

そう言つて明後日の方角を向く瑞穂の顔は、ほんのり赤みが差していよいよに見えた。

「わかつた。そんなこといいなりやつてやる。明日からでいいよな？」

「そうね、明日から。朝、寝坊したら承知しないからね

「肝に銘じておきます」

恭しくお辞儀をすると、自然と口元がほころんだ。瑞穂もつんけんしていよいよに見えるが、口元は明らかに笑つている。

一応は、成功したらしい。よつやく蟠りが取れると、今まで悩んでいたのが馬鹿馬鹿しく感じた。

事実、俺一人ではこいつもいかなかつただろ？ 司や有紗先輩や明日香さんがいたからこそ、やつと仲直りできた。しかし何故、周りの人達は瑞穂の気持ちが解るのに、俺には解らないのだろう。瑞穂

と過（）してきた時間は長いはずなんだけど、どうも瑞穂の心が読めない。最近は特に何考えてるか理解不能だ。

単に鈍感なのか？

「・・・・・」

途端に悲しくなったから思索をやめる。

才色兼備で何でもこなす東雲校の姫君。<sup>プリンセス</sup>

それでいて、わがままで暴虐無人な俺の天敵。

田の前で犬のぬいぐるみを抱えている、そいつを見て思つ。

明日から犯人が捕まるまで、自分が期限付きの騎士なのだと。<sup>ナイター</sup>

どーもです。クロノです。

この前この後書きについて感想をいただきました。驚きましたけど、嬉しかった。

なんだかこの欄、日記と化してきます。『ごめんなさい。ウザかったらスルーしてください。』

ああ、PCから離れられない自分はなんと愚かしいことか・・・。父さん、ごめん。

あ、投票よろしくお願いします。

微妙な仲直りから一夜明けた早朝。

俺は朝食を済ませ学校に行く準備をしたのち、綾崎家のインター  
ホンを押した。

「おはよう秋ちゃん」

爽やかな笑顔で顔を出したのは瑞穂ではなく明日香さん。いつも  
の黄色のHフロンをしている。

「明日香さん、おはようございます。・・・あの、といひで瑞穂は  
？」

「ふふっ、あの子はもう少ししかかるかな？」

口元に手を当てて上品に笑う。

「まさか寝坊してるとか？」

人に寝坊するなとか言つておいて、自分が寝坊するなんてことは  
・・・・・ありうるな。今もベッドの上で気持ちよさそうに寝てた  
ら、置いてく。確実に置いてつてやる。

「違うのよ。女の子は色々と大変なの」

「はあ・・・」

こま一つ理解できないので曖昧に言葉を濁す。

データ、データデータデータ・・・・

「おまたせつ」

瑞穂が息を切らしながら玄関から出てきた。朝から騒がしい奴。

すぐに落ち着を取り戻した瑞穂を、俺は品定めするように眺める。白を基調とした制服をきつちりと着こなし、ビームなく清楚な振る舞いをする様は、流石プリンセスと言つべきか。

無駄だと思いながらもどこかに欠点がないか探していると、彼女と視線が交錯した。瞬きをして呆けた表情を一瞬見せるが、百面相のようすぐさま表情を変え、睨んでくる。本当に器用だな、おい。

・・・でも、安心した。前の端徳こ笑つてゐる。

「なんでもいいからこぐれ。電車出でまつ」

「あ、うう。アヤ、こいつがやあ

「せー、二つめのやつ

手を振つて俺たちを見送る明日香さんは、いつにも増してしゃかに見えた。

蝉の求愛「ールが朝つぱらから鳴り響く通学路を歩きながら、澄み切つた空を見上げ伸びをする。見上げた空には輪郭のくつきりとした入道雲が浮いていた。中にラピュタがありそりでおもしり。

朝からこんなに清々しい気分なのは久しぶりだ。寝坊するといつ懸念もあつたが、どうやら俺は目的があると頑張れる性質らしい。田覚ましが鳴る2分前に起きた。自分を賞賛したいね、心から。

ちりと隣を歩く瑞穂を一瞥すると、心なしか浮き足立つているよう見える。

「瑞穂、今日何かあるのか？」

「何つて？」

「満点取れそうなテストが返されるとか」

「別にないけど? 何でそんなこと聞くのよ」

「……いや、なんでもない」

「?」

瑞穂が不思議そうな顔をして覗き込んでくるが、俺はこれ以上何も言わず、代わって瑞穂が嬉々として話しかけてきた。

「高校に入つてから、いつもやつて一人で登校するのは初めてよね？」

「ん？ 確かにそうだな」

いかにも今初めて気がついたというように答えたが、俺はいつも瑞穂と違う時間に登校するよう心がけていた。でないと俺たちが付き合っていると勘違いされかねない。そんな恐ろしいことは御免だからな。

「これから毎日1つなるのよね?」

「バカ、期間限定だ。・・・・・つて聞いてねえし」

瑞穂は一人呴いてはにやにやし、じつちの話になど微塵も気にかけてはいなかつた。思わず俺は嘆息し、晴れ渡つた空を仰ぎ見る。スズメが2羽、じゃれ合うように飛んでいた。

込み合つて息苦しい電車を浦浜駅で降り、通勤するサラリーマンに混じつて改札口を抜ける。芋洗い状態の駅から無事脱出し、しばらく歩くと、いつの間にか登校する生徒の数も増え、前方に校門が見えてきた。

何事もなく校門を抜け、校舎を目指す。

その間、瑞穂と他愛もない話をしているのだが、

?

何か感じる。」う、羨望といふかジエラシーといふか  
・・・・・  
あ、殺意？

「うそりと田だけで辺りを見回した。明らかに注目を浴びている。さりげなく覗き見る者や、立ち止まってヒソヒソ話をする女子、文庫本が手から落ちるメガネの坊ちゃん刈り等々。二者二様のアクションを起こす。

その中でも男子生徒の視線が身体中に痛いほど突き刺さり悪寒が走るが、あえて何も気付いてないかのように平然と振舞う。

想定の範囲内だ。なんせ我が校のプリンセスと登校しているのだ。怪訝な眼差しを向けられて当然だ。

（誰だよあいつ。なんで綾崎さんと登校してるんだ）

（知らぬーよ。それにしても羨まし、もといムカつくな）

（僕たちの瑞穂ちゃんを……）

（口ロスコロスコロスコロス……）

「どうしたの？ 秋人」

「…………いや、なんでもない」

明らかな身の危険を感じる。俺のシックスセンスが逃げろと叫ぶ。

俺は朝から汗だくなっていた。決して夏の暑さからくるものでないことをここに記そう。

やつと昇降口まで辿り着くと、瑞穂に声をかけた。

「じゃあ、俺こいつだから」

「うん。先に帰らないでよ」

「・・・わかつてゐる」

正直一緒に帰るのは「容赦願いたいが、そもそも言えない立場にあるので、俺は静かに祈つた。

犯人が早く捕まりますように。

大またで教室まで闊歩する。注意していないと今にも顔がにやけそうだ。秋人と仲直りできたことが嬉しくて昨日はよく眠れなかつたが、そんなのは気にしない。

友人にあいさつしながら席に着き、両腕で頬杖を突く。足は空中でブラブラとだらしなく振られている。

「おはよう瑞穂。それにしても・・・・あんた分かりやすすぎ」

振り向いた有紗が呆れた声で言つ。

「え、なにが?」

「秋人つちと仲直りできたのね？」

「・・・まあね」

そう答えると、有紗は尚も半眼で恨めしそうに見つめてくる。私は寝癖でも立ってる？

「そんなにやけた顔してると野共に怪しまれるぞ。もつちよい顔引き締めろっ」

有紗が急に私の頬を両手で引っ張った。

「やえへっへは、ほつへがおひひやうほへ」

必死に抗議するが、つむいで言葉はつまく具現化されなかつた。

有紗は手を離し、「あははは、瑞穂が元氣だから別にいいか」と満面の笑みを浮かべた。

涙目でほっぺを押さえる。

いいなら最初からうそう言つてしまよ。

そう思つが、友人の嬉しそうな顔を見ると、文句を言ひ気も失せてしまった。

昼休み。

秋人を呼びに1年の校舎へと向かう。もちろん昼食に誘うためだ。これまでも適当な理由をつけては一緒に弁当を食べていたので緊張はない。

1年3組の教室を覗く。上級生が1年の教室に来たために怪訝な視線が集まるが、その中に秋人の視線はなかつた。

どこ行つちゃつたんだろ？

これまで捕まえられないことがしばしばあつた。そんなとき秋人は何処で何をしているのだろう。それとなく探しを入れてみたが、その度にはぐらかされてきた。少々おもしろくない。

諦めて嘆息し、自分の教室に引き返そうとしたとき誰かに呼び止められた。

「綾崎先輩」

振り向くと、秋人の友達が目の前に立っていた。

「倉本司君よね？」

背が高く凛々しい顔つきをしている彼は女子生徒の注目の的なので、一目で誰かわかつた。まあそれだけが理由でもないんだけど。

「ええ。あの、どうしました？」

「秋人に用があつたんだけど、いないみたいだからいいわ」

司君は眉根を寄せる。

「おかしいですね・・・。秋人は綾崎先輩に伝言を頼まれたつてい  
う先輩に、校舎裏に来るよう言われたはずですけど」

「えつ？ 私そんなこと頼んでないわよ？」

胸がざわつく。

「嫌な予感がするんで俺は行きますけど、先輩はどうしますか？」

「行くに決まってるじゃない！」

私が返答する前に、司君は動き出していた。私の考えは予想済み  
つて訳ね。可愛くない。

司君に促され、一人で廊下を駆け出した。

9日㈰『予感』（後書き）

課題とシンクロと執筆とに追われなかなかのハードスケジュールをこなしている今日この頃。  
でも、クロノススムです。  
文化祭（シンクロ公演）を来月の頭に控え、練習もこよこよラスト  
スパート。俺も結構多忙なんです。  
といつわけで、執筆のスピード落としますね。どうかご理解のほど  
・・。

「お前さあ、なんなの？」

「綾崎にいつも纏わり付きやがって。ストーカー？」

「正直且障りなんだわ」

微かに話し声が聞こえてきた。声量がやけに大きく、声には剣呑な響きが込められている。たぶん秋人を呼び出した奴らだ。

ここは4棟の校舎裏。雑木林がありなんとなく寂しい感じのする所で、ベンチなどが置いてあるが、生徒はまず訪れない。私と司君は秋人を呼び出した奴らからちょうど死角になつた校舎の陰に息を潜めて立つている。

秋人の身の危険を感じ、咄嗟に陰から飛び出そうとして司君に腕を掴まれた。

「先輩、ダメです」

「どうして？秋人が何かされるかもしれないのよー」

腕を振り払おうとして更に強く掴まれた。

「今先輩が出て行つたらそれで収まるかもしれません。けど、後で秋人があつと酷い袋叩きにあうのは目に見えてるでしょう？」

一息ついて、「先輩ならわかるはずです」と司君が諭すよつと言

い、手を離した。

「わかるけど、でも・・・」

司君から目を放し、物陰から覗き見ると、秋人がいかにも品行の悪そうな三人に詰め寄られている。

司君の言いたいことはわかる。けど、秋人が殴られるのをここで黙つて見ていられない。

「大丈夫」

司君は視線を秋人に注いだまま呟いた。

「・・・そんなことなんと言えるのよ」

司君が根拠のないことを言つので頭にきて、彼の端整な顔を睨んだ。何が「大丈夫」なのだろう。いくら秋人でも男三人に襲われたらただではすまない。それに病院送りになる可能性も捨てきれないし、もしそんなことになつたら司君に責任が取れるのか。

私が軽蔑にも似た眼差しで睨んでいると、ふいに彼が振り向いた。

「・・・・・」じつうこと、初めてだと思いますか？」

目の前にある双方の瞳が、なぜか怒つているように見えた。

「先輩たち、どうしたんですか」

「落ち着きましょう」 と、手のひらを見せるようにして胸の位置で両手を擧げる。田の前には、髪を染め上げたりピアスを所構わずにつけたりしている、いわゆる不良の上級生が三人、俺を取り囲むようにして立っている。はつきり言つて愚痴じい。

「俺の言つてること、まだわかんねえの？」

妙にどすを効かせた声。

「別に俺、みず・・・綾崎先輩とは何もないですって」

「それじゃあ」と言つて早々に立ちはだかりと立ち去りとすむと、腕を捻り上げられた。

「いてて、先輩離してください。真面目に痛いです」

「どんな弱み握ったんだよ」

顔がほんの数センチの距離にある。息臭えぞコノヤロー。

「だから何度も言つてるじゃないですか」

「うるせえよ。んなこと言じられるか

短気なのか、声を荒げた。

「・・・・・

だんだんと苛立つてきた。かれこれ10分余。いいかげん開放してほしい。弁当もまだ食べてないのでハラへって死にそうなのに。このままじゃ午後の授業のりきれねーよ。

空腹だったことも手伝い、ついつい口が滑る。

「・・・・・あの、綾崎先輩に気があるのか何なのか知りませんが、自分でアタックする勇氣がないからって俺に突つかかってくるの、やめてもらえません?」

いよいよ鬱陶しくなつて三人を睨み返すと、

「んだと?生意氣な口きいてんじゃねーよ!」

自分の感情が抑えきれなくなつたが殴りかかってきた。

凶星突かれて動搖してんの丸見えだつーの。

鼻で笑つてひらりとかわす。

「先輩、力みすぎ。それに大振りになつていて動きが鈍重ですよ」

俺の安い挑発に力チンときたのか、今度は一人で前後から殴りかってきた。

拳が繰り出される瞬間、右にステップ。そしてそのまま、前から殴りかかってきた奴の後ろに、左足を軸にして回りこみ、背中をポンッと押してやる。バランスを崩した相手は体重を支えきれなくな

つて倒れこみ、俺の後ろから迫つてきつた奴と正面衝突。

同時に、頭がぶつかる子氣味よい音がして、不良A、不良Bはもつれ合づよつにして地面を転がつた。

はい、いつちよ上がり。

「テンメエ・・・」

残つてゐる不良Cが俺の背後から拳を振り上げる。

しかしそれよりも速く、相手の首筋に渾身の力を込めた踵がめり込んでいた。骨がミシッという音を立てる。

「ガハツ・・・」

脚を振りぬくと、最後の一人が地面に叩きつけられた。

俺は手をパンパンと払い、溜息をつく。

「“誰かさん”に殺されないよう毎日毎日鍛えてるんですよ。出直してください」

あんたらより、キレたときの瑞穂のほうがよっぽど危険だ。命が幾つあっても足りない。そういうばこの前なんかは三途の川渡りかけたな。

俺の頭の中にその光景がリフレインすると、凄まじい恐怖に打ち震え、鳥肌が立つた。

そんなことよつ、

「ハラへつた・・・」

お腹がピーヒヤラとガキの吹く下手なりコーダーのような音を立てるど、共鳴するように、無情にも授業開始を知らせるチャイムが遠くから聞こえてきた。

放課後。

日も傾き、世界が茜色に染め上げられる頃、私は校門に姿を現した。

校門の傍に今まで待たせていた秋人が立っている。

「遅い」

彼の声に思わず体が強張る。

「う、ごめん・・・」

「ん? 今朝のテンションはピリ行つたんだ?」

私の心境をなんとなく感じ取ったのか、秋人が心配した声音で窺う。

「別になんでもない」

言つて俯いた。これじゃあ何かあると言つているのと同じではないか。

「ふうーん・・・・・まあいいや。あのせ、ファミレスかどつか寄つてつていいか? ハラへつちやつて」

秋人は何か言いたげだったが深く追求せず、自分のお腹を抱えて、たははと笑う。

たぶんあの後、弁当を食べ損なつたのだろう。そして、食べ損なつたのは私のせい・・・・・。

司君の言葉がよみがえる。

「うういうこと、初めてだと思ひますか?

司君に言われるまで気づかなかつた自分が愚かだ。自分の容姿と人氣ついて自覚がなかつたわけじゃない。迷惑極まりないファンクラブまで創設されたのだから気付かないほうがおかしい。告白も何度もされた。しかしその度に断つていたので、男子と特別な関係をもつたことはない。

だけど、秋人は別だつた。秋人が同じ高校に入学してきてからは、なにかと執拗に秋人と生活を共にした。一緒にいたかつたのもあるし、秋人が違う女の子と話しているのが嫌だつたのもある。

しかしそれらは全て私のエゴだ。私は今まで自分のことしか考え

てなかつた。また、それがいけなかつた。

「…………今日、お昼食べなかつたの？」

「んな台詞を吐く自分が疎<sup>うと</sup>ましい。

「んー、まあ、色々あつて食えなかつた」

秋人は困つたような表情になり、言葉を濁した。

「色々つて？」

「え？・・・え？」と、先生に呼び出しきらつたりとか

「・・・・・・・・・」

やつと搾り出せた言葉はそれだけ。それ以上は胸が詰まつて言えなかつた。

秋人は嘘をついた。私を傷つけないために。

視界が歪み、慌てて下を向く。乾いたコンクリートに染みができた。

「お、おい、どうしたんだよ」

私がいきなり泣き出したので、秋人が狼狽して私の肩を掴む。

私は、やつぱり・・・・・・

「なんでもないから」

涙をぬぐい、秋人を見る。でもすぐに秋人の顔はゆがんでしまう。

秋人にとって、マイワク、なのかな……？

「なんでもないわけないだろ」

「ホントよ。」のまえ見た映画の結末を思い出したら悲しくなったの

それでも秋人は納得していない表情で、私の瞳をじっと見つめてくる。

「そ、それよりも、お腹減ってるんでしょ？」

真摯な彼の瞳から逃げるよに秋人の背中に回りこんだ。そのまま背中を押すと、しぶしぶながらも歩き出してくれたことに内心ほつとする。

「今日は私がおじつてあげようかな」

「…………」

「なによ、その沈黙」

「瑞穂…………やつぱり熱でもあんのか？」

「失礼ね！私だつておじつことだつてあるわよ」

他愛もない話をしながら夕暮れの道を一人で歩く。

笑顔の奥に不安を隠しながら。明るい言葉で弱い心を包み込みながら。

秋人にとって自分は迷惑なだけだとわかつていても、一緒にいたいと願ってしまう。

いつまでも通り魔が捕まらないでいてほしいと、こんな時間が続ければいいと願ってしまう。

そんな私は欲張りだらうか？

隣を歩く彼の無邪気な笑顔に心がきりりと痛む。

でも。今は、今だけは。

彼の優しい嘘に甘えていいよね？

踵から伸びる一人の影は、いよいよ色濃くなっていた。

## 10月『優しい嘘』（後書き）

更新遅くなりました。なかなかに充実した日々を送っていたもんで、こちらには手が回りませんでした。

悲しいことに、次は期末テスト（俺の学校2期制なんで）が近づいてます。

現実逃避してえ・・・。

それはさておき、今回の話微妙に長くなりました。しかもちょいシリアルな展開。正直こんなはずではなかつたのですが・・・。いや、書いた本人が言つことじやないんですけどね（笑）

投票よろしくお願ひします。評価もどーぞよろしくお願ひします。

朝。流れゆく景色を車窓からぼんやりと眺めながら、つり革につかまる。

空は生憎の曇天。腫れぼったいグレーの雲からは、今にも雨が漏れ出してきそうだ。見慣れた町並みも、どことなく寂しそうな、そんな錯覚に陥る。今日の降水確率は午前中50%午後40%と、ブラウン管の向こう側でお天気お姉さんが無駄に輝く笑顔で言っていた。なんとも言ひがたい微妙な数値である。おかげで傘持参だ。傘一つでも荷物が増えるのは鬱陶しい。

それはともかく。電車の程よい揺れがなんとも心地よく、寝起きでスッキリしない頭をさつきから再び夢の世界へとござなあうとしてくる。やめられー・・・・・。

必死に睡魔に抗いながら、同じくつり革につかまって眠そうにしている瑞穂を横目で見やると、こつもより幾分腑抜けた表情で欠伸を必死に噛み殺していた。その無防備な顔がおもしろくて、ついに頬が緩む。

昨日、瑞穂はどことなく変だった。登校時は二二二二タ顔で気持ち悪いくらいにハイだったが、下校時には泣き顔に変わっていた。本人は映画がどうとか言っていたが、それにしては不自然すぎるだろう。もうちょいマシな言い訳はできなかつたのだろうか。真意を追求する気はないが、なんとなく引っ掛かりを感じずにはいられない。俺の知らないところで何かあつたのかな？

そんなことをろくに回つもしない頭で考えてこると、電車がガタンと大きく揺れた。

「つむつー。」

「キャツー。」

短い悲鳴と共に、背中に人が当たる衝撃を感じた。俺はつり革につかまっていたため平気だったが、後ろの人は揺れに耐え切れなかつたらしい。ぶつかった拍子に落ちたものが俺の足元に滑り込む。

俺は落ちている文庫本を拾い上げ、後ろに向き直った。

「どうぞ」

文庫本を差し出し、相手が同じ高校の制服を着ていることに少し目を丸くする。

「すみません」

その子は、申し訳なさそうに小声で謝る。身長が小さく俯いていることもあって、相手の顔は確認できない。俺が一声かけて回れ右をしようとしたとき、

「・・・それと、」

ショートにした黒髪をさりげと揺らしながら顔を上げ、その子は「つむつ」と微笑んだ。

「ありがとうございます」

思わずギリとする。小柄で小首を傾げる姿が小動物を連想させる、なで肩で華奢な感じのする子で、小顔に大きな瞳がなんとも愛らしい。綺麗といつより可愛いといった形容詞がしつくりくる。

「わづ。瑞穂とは違つタイプの美少女が、目の前に立つていた。

数秒呆けて我に返る。

「あ、ああ、いや・・・どういたしまして」

「東雲高の方なんですね」

俺の服装からわづ推察したらしく。

「そうだけど。君もでしょ？」

「はい。正直、怒鳴られなくてホッとしました

「いや、ぶつかつたぐらいでそんなことしないって。つていうか、そんな風に見える？」

彼女は焦りながら両手と首を振る。

「そ、そんな風に見えません。私そういうつもりで言つたわけじゃなくて・・・」

蛇に睨まれた蛙みたいに必死に弁解する姿が愛らしい。

「大丈夫だから。別に怒つてないし」

そう答えたところで電車が止まる。「浦浜～、浦浜～、お降りの際は足元に」車掌の終着を知らせるアナウンスが車内に流れ、ドアが開いた。

「あの・・・」

アナウンスに耳を傾けていた彼女が口を開く。

「ん？」

「えっと、名前」

ぐいっ

左腕を誰かにつかまれ、ドアへと引きずられる。伸びている腕を辿ると瑞穂だった。

「わわっ、おい瑞穂っ！ひっばんなっ」

そんな抗議の声など無視して彼女は俺をホームへと連れ出す。その間、出会ったばかりの美少女は呆気に取られて固まっていた。

俺はそのまま人の波に揉まれながら早歩きで改札口まで連れてこられ、有無を言わさず通過。一息ついていると、瑞穂は無言でとつと歩き出してしまっていた。

「瑞穂、いきなりなんだよ」

先に公道に出た瑞穂を追いかけ、歩調を合わせて隣に並びながら尋ねる。

「私今日日直だったの。すっかり忘れてた」

結構、ギリギリで学校に着く電車に乗っているため、今から急ぎ足で学校に向かっても始業まで15分程度だ。

「おーおー、日直がこんな時間に登校するなよ。そもそも前はマイペース過ぎただ」

何事かと思つたらただの凡ミスかよと肩を落とし、瑞穂に付き合わされる俺の身を哀れむ。

そんな俺を瑞穂は般若の形相で睨み、

「つぬせこー私だつてミスする」とベリコあるわよ

逆ギレした。

なんだつてこんなにトゲトゲしいんだ。ついでしかもあんなに眠そうにしてたのに。どこかにスイッチでも付いてるんじゃないかな?感情&表情切り替えボタンとか。

わざと相手に聞こえるように溜息をつく。

「へーへー・・・。わかったから怒鳴るな

「うそをつしながらもつていい俺って、従順だなあ・・・。

つべづべやんな」とを想ひてしまつ。

「・・・・・・・・

いやいや、従順なだけで“下僕”じゃないぞ?下僕ではない。  
決してない。下僕・・・・・・。

将来瑞穂の専属奴隸にされないことを切に祈りながらも、長い一日は始まるのだった。

やつ、長い長い一日が、ね。

いやあ、あつはつはつはつ、はあ・・・・・・・。俺つて勉強しないなあ。

ども、黒野です。

「更新楽しみにしてました」的なコメントもちらりと、ついつい調子乗って執筆に勤しむ俺は単純ですね。このままだとPC没収されちゃいます。そろそろ親の機嫌とらなくては・・・。何かいい方法教えてください。

さて、今回はちょっと短めでした。すみません。  
また、新キャラ登場しました。前々からこのキャラ出す予定だった  
ので、気に入つていただけると光栄です。

投票とか、評価とか、感想とかいただけだと“モノ凄く”嬉しいです。テストなのに続き書きたくなります。  
注・無理強いはしてません。はい。

## 12日『噛み合わぬ一人』

秋人と昇降口で別れてから、朝の活気と雑踏で混みあつた校内を一人歩いて教室を目指す。すれ違う生徒に挨拶を返しながらも、その愛想笑いを浮かべたプリンセスの表情とは裏腹に、腹の中はどうしようもない怒りで煮えたぎっていた。

秋人のバカ！

ばかばかばかばか。てゆうか何見とれてるのよ！

先ほどの電車での出来事を思い出して、無性に蹴りたい衝動に駆られる。もちろん秋人をだ。

日直などとはもちろん嘘だ。とりあえずあの場からすぐに立ち去りたかった。だって当然じゃない。電車が揺れても私のことなんて気にも留めてくれなかつたし、ぶつかってきた子に『テレッテレだつたし、一人が話している間私は蚊帳の外だつたし……。

朝からテンション下がるわ、ほんと。

肩を落としながら3棟の廊下をとぼとぼ歩いていると、

「おはよっ」

と後ろから親友に奇襲をかけられた。バチンと痛々しい音が廊下に木魂する。私は叩かれた背中をさすつて涙目で声の主を睨み、

「有紗！思いつきり叩かないでよ！」

眉を吊り上げて怒鳴ると、彼女は能天気にあははと笑い手を合わせる。

「「めん」「めん……痛かった？」

もう言ひて上田遣いで舌を出す確信犯に腹が立つて、また怒鳴る。

「痛いに決まってるでしょ！まったく、物事には加減といつものがあつてね、有紗はいつもそれができて」

「わかつたつてば。以後、気をつけます」

にへへとおどけて笑いながら敬礼する有紗を見て、私は更に深く肩を落とした。

この子は絶対に学習していない。さつきみたいな挨拶は何度目だかわかつたもんじやないのだ。今日という今日こそ、その捻じ曲がった愛情表現を絶対に矯正してやるんだから。

「有紗、あなたホントにわかつ

「わ、私先生に呼ばれてるんだつた。それじやつ！」

それだけ言い残すと、有紗は廊下を駆けていった。もとい、脱兎の如く逃げていった。

「……」

握った拳をわなわなと震わせ、やがて落ち着き深い深い溜息をつ

く。窓の外を仰ぎ見ると、私の心中をそのまま切り取ったかのように、うなどんよりとした曇り空から、ぽつぽつと雨が滴り落ちていていた。

「あ、雨……」

「あ、雨……」  
ん？ そういえば傘持つてたっけ？ 朝出るときは確實に持つていたのを記憶しているが、今手元にあるのは鞄だけ。私はおでこに手を当てて記憶の糸を辿る。駅まで秋人と歩つて、秋人と電車に乗つて、秋人にあの子がぶつかつて、秋人をホームに引つ張り出して……あ。

「……電車の中だ」

手すりに引っ掛けたのをすっかり忘れていた。お気に入りの傘を置き忘れたことに落胆し、本日2度目の溜息をつく。

たぶん今日は厄日だらう。

そう思わずにはいられなかつた。

『ありがとうございます』

名前も知らない彼女の言葉を反芻する。あのとき俺に見せてくれた笑顔は、優げに揺れる一輪花のようだつた。なんて詩人じみたことを考えてみたりもする。

今朝出合つた美少女は確かにこの学校の生徒だと言つていた。ならば近いうちに会えるかもしない。もしかして彼女の方から俺を探してくれてたり？・・・まさかなあ。ただ文庫本拾つて渡しただけの男を探すわけないか。

それにしてもいい子だつたなあ。世の男性全てがあの子のことを守つてあげたくなるような、なんとも形容しがたいオーラを放つていた。優しい、おしとやか、清楚。・・・どつかの誰かさんに見習わせたいぐらうだ。

「 ちやん、秋ちやんつ」

。 つたく、瑞穂の奴、名前尋ねる時間くらうくれてもいいだろ・・・

「はあ～・・・・・霧宮つーー」

「は、はいっ！」

突然俺の名前が呼ばれたので動搖してしまい、ガタッと音を立て起立する。

「 今は授業中、わかつてゐるの？」

男性教師が呆れたように注意する。「こいつはいい年したオヤジのくせに女口調のため、生徒中でオカマだと噂されている一歩置いたい教師だ。つか、「秋ちやん」はやめる。キモチ悪い。俺を「秋ちやん」って呼んでいいのは明日香さんだけだつての。

「もうバツチリわかっています！」

「もうおへじや、問題4の答えは？」

「ああ、えと、問4ですね・・・・・」

慌てて教科書を開き、ページをめくる。問4問4問4・・・・。文字の羅列に視線を這わすが、いかんせん、どのページかもわからないので見つかる気配もない。

嫌な沈黙が教室を包み込む。

• • • • • • • •

その長い沈黙の後、俺は息苦しい空気に耐え切れず、おずおずと口を開いた。

・・・あの、

「なに?」

「問4つて、どこですか？」

しばらくして、クラスのあちこちからくすくすと笑う声が聞こえてくる。司に至っては腹抱えて必死に笑いを噛み殺していた。口、口ロス……。

「秋ちゃんは放課後、職員室にいらっしゃい」と

呆れ声でできの悪い教え子を諭すよつに命令する。

「はい・・・・・・」

俺は恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、周りの視線から逃れる  
よつこ着席するのだった。

せつぱんはつもんじやないな。これ、教訓。

昼休み。

俺たちは飲み物を買うため、3棟と4棟との間にある自販機へと  
向かっていた。廊下の窓から屋外に隣接してあるプールを見やる。  
水面は幾つもの波紋が重なり合つて大きく揺れ、風雨の激しさを物  
語ついていた。ほんとに傘持つてきて良かったわ。

視線を窓の外から隣に移すと、司が俺を見ては含み笑いをしてい  
た。

「何だよ」

司を睨みつける。

「いや、別に」

そう言つてまた口の端を上げる仕草が妙にイラつとくる。たぶん

化学の授業のアレを思い出しても、俺を見て嫌がらせの呟きに嘲笑しているのだが。あー、腹立つ。

「答えられなかつたくらいで笑うこたないだろ?」

司を半眼で睨み、口を尖らせる。すると意に反して友人はまた笑い出した。

「へへへ、お前、まだ気付いてないのか」

「何が

俺は答えを催促する。

「“問4”なんてどこのもないぞ

どこのも、ない・・・?

「・・・・・は?」

言葉の意味がうまく飲み込めないのですが・・・?

「お前教科書見てなかつただろ? 嵌められたんだよ、あいつに。つかお前、まだ気付いてなかつたのか」

「バ、バカ、そんなのとくに気付いてるつーの。だからムカついてるんだよ」

俺は腕を組みそっぽを向く。そんな俺を見て司が笑つてゐるが、無視することにした。

はあー、どうつでいくら探ししても見つからなかつたわけだ。つか、俺つて嵌められてたのね。相手の思惑通りにしてやられたんだと思うと、なんだかもの凄い敗北感。

「あ、あのさ」

俺はこれ以上墓穴を掘つて同じ弄られなによつにするために、話題を変えることにした。

「んー？」

司もこれ以上いたぶるつもつはないいらしく、軽く聞き返す。

「ここ」の女子生徒で、思わず守つてあげたくなるよつな可愛い女の子の名前知りないか？」

司は特に考えようとせず口を開く。

「お前の幼馴染」

俺は手を振り司の言葉をすくねて否定する。

「いや、あいつは守つてやりたいと思わない

瑞穂が可愛い女の子？俺が知りたいのはナイトの助けを待つているお姫様で、荊の城に住んでいる陰険魔女などではない。つーか司に聞いた俺がバカだつたよ。ここつ色恋沙汰に興味ないこと頭から抜けてた。司は俺の考えを肯定するかのよつこ

「知らん。興味ない」

「うん。聞いてから思った」

司は俺にそう言われて、少しむつとする。

「……つか、何でそんなこと聞くんだよ」

「な、なんとなく……」

言葉を濁し、視線を外す。ふと、自販機の前に人だかりができるのが目に留まった。それも男ばかりで、見ているだけで暑苦しい。時々、「今日もお綺麗ですねえ～」とか「お前らーお触り禁止だぞ」などといった会話が喧騒に混じつて聞こえてくる。

まるで天啓のように、それだけで全てを悟った俺は、

「司ストップ」

司のワイヤーシャツの裾を掴み、引き止める。

「なんだよ」

司は怪訝な顔つきで振り向いた。俺は人差し指を立てて上を指す。

「今日お天氣お姉さんが言っていた。人ごみに注意しましょ、特に男の群れには警戒しましょ、と。だから俺たちは違う自販機で飲み物を買おうじゃないか」

うんうんと頷きながら親友の肩を叩く。司よ、理解してくれ。あ

の集団の真ん中には絶対魔女がいる。男をかどわかす恐ろしい魔女が。見つかって俺が酷い目にあわされないうちに引き返そうじゃないか。

「面倒だ

司はそう言つて暴風域に向かつて歩き出した。俺は慌てて腕を掴み引き止める。

「このアホつー…巻き込まれる俺の身にもなれ…」

司は上を向いて少し考える素振りを見せる。そしてしづらぐの後、「問題ない

「大ありだつ…」

叫んだ後で、その声がやけに渡り廊下に響いたことにほつとある。冷や汗を搔きながら前方の集団に目をやると、

魔女と田が合つてしまつた。

彼女の顔が獲物を見つけた喜びで嬉しそうに歪んでいる。こ、怖い。きっと次の瞬間には俺の名前を呼ぶに違いない。そうなればたちまち四面楚歌だ。

「つ、司つ、ほらつ引き返すぞ」

やつ言つて司の首根っこを掴んだ。

「は？ ちよ、 おい秋人 」

俺は司の声には耳を傾けず、嫌がる友人をずるずると引き摺つてこの場を慌てて去った。

喧騒と歎息に混じつて、後ろから司の溜息が聞こえたよつた・・・  
・・・あ、 気にしないでおこひ。

12月『噛み合わぬ一人』（後書き）

や、やっとテストが終わりました・・・。解答はボロボロ。涙もボロボロ。でもこれでしばらくは小説のほうにも力を入れることができます。

投票よろしくお願いします。評価・感想等もどーぞよろしくお願いします。

「あなたの一票が世界を変える」・・・なんて宣伝文句あつたなあ。あ、独り言です（笑）

「やべへ、もうこんな時間が」

携帯を開いて時刻を確認すると、すでに5時半を回っていた。サインントにしていたため携帯を開くまでわからなかつたが、待ち受け画面の上部にはメール受信を知らせるアイコンが表示されていた。

受信箱を開くと、瑞穂からのメールだつた。しかも5件。俺はその場でがっくりとつな垂れる。

今日授業が終了したのが4時なので、かれこれ1時間半の遅刻となる。俺は4時から言いつけ通り職員室へと赴き、こつてりと絞らっていた。それも至近距離でネチネチと永遠しやべるから、堪つたもんじやない。しかもだ！ それだけでは終わらず、書類の整理まで手伝わされた。これはいわゆる職権濫用ではないか。絶対後で抗議してやる。

そんな不満を頭の中で叫び散らしながら、誰もいない教室で鞄に急いで荷物を詰め、帰り支度をする。そして支度が整つと鞄を肩に担ぎ、廊下に飛び出した。

瑞穂、怒つてんだろうなあ・・・。

本当は逃げ出したい。が、逃げ出したが後の祭り、まだ二途の川の船頭さんにお会いしたくないので、非常に不本意ながらも昇降口へ向かつて廊下を駆けてゆくのだった。

下駄箱で靴に履き替え昇降口から出ると、途端にむわっとした外気に包まれ、日本の夏の湿度の高さを改めて実感する。しかも今日は雨。今はだいぶ小降りになつたが、おかげで気持ち悪さに拍車がかかっている。

辺りを見回し、軒下に瑞穂を発見。鞄を後ろ手に持ち、つまらなれやうに突つ立つて立っている。

俺は生睡を躊躇<sup>ちゆうちょ</sup>下し、覚悟を決めて話しかけた。

「み、瑞穂さん？ 今日遅くなつたのには深い深い、そりや日本海よりも深い事情がありまして。えと、その、なんと言つか……すまんつ」

顔の前で手を合わせる。薄田を開けて上田遣いで覗き見ると、瑞穂がこいつと笑っていた。それも満天の笑顔で。

「秋人？」

「は、はい！」

思わず背筋を伸ばす。

「私別に怒つてないわよ？ 遅くなるんだつたらメールの一つくらい返してくれてもいいよねとか、1時間半も待たされて足が痛いとか、帰りに何かおじつてもらわないとか、気が済まないとか、そんなことぜんぜん思つてないから」

そう言つてこいつ微笑む。

妙に優しい口調、そしてこの薄気味悪い猫なで声・・・。

完璧怒つてる。

数週間ぶりに現れた泣く子も黙る裏モードの瑞穂さんは、やつぱり怖かつた。この状態の瑞穂久しぶりだなあ、おい・・・。

「はははは、死んだかも」

船頭さん、いま会いに逝きます。

乾いた笑いを口から漏らしていくと、

「秋人？」

瑞穂が微笑んで小首を傾げる。

「は、はい！」

垂れ下がった肩を引き締め、再び背筋を伸ばす。

「早く帰りましょー。」

「イエッサー大佐！」

瑞穂の威圧に押され、思わず変なことを口走ってしまった。大佐つて誰だよ・・・と、自分で自分にツツ「ノリを入れる。

君たちには解るまい。優しい口調の下に隠れた轟々とした怒気が。

君たちには解るまい。」の身の毛も竦立つよつなおぞましが。

俺は先ほどの発言を繕つよつといそと傘を広げる。ん？ 隣から威圧感が。

「私、傘忘れたの。もちろん入れてくれるよね？」

右隣を見ると、肩が接するほど近くに瑞穂がいた。いわゆる相合傘だ。俺はもちろん断れる訳もなく、

「仰せのままに！」

半泣き状態で快諾する。

「ありがと」

俺はなるべく隣を見ないようにして歩き出した。

今日の瑞穂怖い。いつもより数割増しで怖い。隣からビシビシと伝わってくるどす黒いオーラを肌で感じながら、自分の将来の危険性を危ぶむ。もしかしたら本当に下僕というおぞましい職に就くやも知れない。

・・・いや、それだけは絶対に阻止せねば！人類の存亡と尊厳、俺の幸福と人並みの生活を賭けてでも！

「あー、ゴホン。み、瑞穂？」

校門を出でしばらく歩いた頃、俺は咳払いをし、隣を歩く彼女に呼びかけた。

「何？」

その彼女は振り向くことなく、前だけを見据えて答える。

「その……が、今日も一段とお美しいよつで……。あは、あは  
はは・・・」

瑞穂は一瞬こちらを睨み、また前を見て口を開く。

「そうね。そのおかげで昼休みは大変だつたわ。まったく、ファンクラブなんて鬱陶しいもの誰が作ったのかしら？」

「まつたくです」

俺はうんうんと頷く。

「どつかの誰かさんにも見捨てられたし、最悪」

うつ、言葉に棘が。

「ま、まつたぐです・・・・・」

「私を守るっていつ約束はどこに行つたのかしい。ほんと役立たずよね」

「あ、またく、です・・・・・」

瑞穂を守るのは通り魔からだけじゃないが、なんてことは口が裂けても言えない。

「」のままだと状況は悪化する一方だと悟った俺は、「」の不利な戦況を開けるために一手打つことにした。

「で、でも、これだけモテるんだから、男なんて選り取り見取りだろ？ その代償だと思えばなんてこと」

瑞穂が急に立ち止まつたので、言葉を切る。訝しく思い、俺は声をかけた。

「みず」

「雨、止んだ」

言葉を遮り、瑞穂が唐突に切り出す。

「あ、ああ、そうだな」

空を仰ぎ見ると、雲と雲との隙間から光が漏れ出している。天使の梯子と呼ばれるそれは、なんとも形容し難い美しさを放っていた。

俺は傘を置む。

「瑞穂、行くぞ？」

俺がずっと立ち止まつて動かない彼女を促すと、

「・・・こつぺん死んでみたら？」

怖いことを笑顔で言われた。

「・・・・・は？」

なんかしたか俺？

何か瑞穂の癪に障ること言つたのだろうか。しかし、俺は精一杯褒めていたつもりなのだが・・・。

困り果てている俺をよそに、瑞穂は再び歩き出す。

すれ違いざまに、「・・・バカ」と小さく聞こえた。

13日『助けてください』（後書き）

ども、くろのすすむです。  
主人公がだんだんと可哀想になつてきました。設定上仕方のないこ  
とですが・・・。  
でも、羨ましくもあります。

浦浜駅から一駅目で下車。勉学に勤しみ疲れきった学生や、上司に散々振り回されたのだろうか同じく疲れきった表情をしている〇しに混じって改札口を抜ける。

駅を出ると、軒下でカツプルがイチャついていた。見るからに遊びで付き合っているような感じだ。俺は軽薄そうな男女に怪訝な、しかしやや羨望の混じった視線を投げかけ、何事もなかつたように横を通り過ぎる。

空を仰ぎ見ると、西方が少し茜色に染まっているのが窺い知れるほど、雲も薄く少なくなっていた。

そして、やや前方を憤然たる面持ちで歩く彼女に目を向け、嘆息。遡ること數十分前。我が身愛おしさに姫君のご機嫌取りを敢行したが、何を間違ったかそれが仇となり、今や取り付く島もない。浦浜駅に着くまで無視。電車に乗っているときも無視。

そして今もなお ・・・。

これが溜息をつかずにやつてられるかつてんだ。だいたいなんで俺がバカ呼ばわりされなくちゃいけないんだ。確かに成績は思わないが・・・いや、それは兎も角として、これだけ尽くしてやつているのに謝辞の一つもなしかよ。揚句の果て「いつへん死んでみたら」なんて言われたら、寛容たるこの俺でさえも堪忍袋の尾が切れる。はいもう、ブツチンと子氣味好い音を立てて！

そもそも、瑞穂は我が強すぎる。世界が自分中心に回っていると思つてゐるなら、それは大きな勘違いだ。俺にだつて所用があるし、やりたいことだつてある。決して瑞穂専属の執事などではないのだ。そのくらいお前の頭でも理解できるだろ。

などと、頭の中で瑞穂を非難し、黙つて帰路につく。

長い沈黙を保つたままどのくらい歩いただろうか。やがて落葉樹と生垣に囲まれた公園へと差し掛かつた。

通学路の途中にあるこの「日向公園」には、小さい頃からずいぶんとお世話になつてゐる。とにかくバカでかいこの公園は、その名前に反して日向は少ない。なぜなら、遊歩道の脇にイチョウの木が数百と植えられてゐるからである。中心部には噴水があり、そのスケールのデカさを除けば普通の公園だ。遊具も大抵のものはそろつてゐるので、普段から学校帰りの子供たちや買い物帰りの世間話を主とする奥様方に親しまれているのだが、今日は雨上がりで遊具が濡れついて、かつ時間が時間なためか、辺りに人の気配はなかつた。

ふいに瑞穂が立ち止まる。そして、「こつち」と言つなり日向公園へと足を進めた。

俺は瑞穂の突然の行動を訝しがりながらも、黙つて従うことにしてた。

瑞穂は屋根付きの休憩スペースにあるベンチに腰を落ち着ける。俺もつられて座ろうとすると、

「座つたら？」

「あ、ああ・・・」

つか、もうすでに座つたとしてるじゃん。

微妙に不可解な瑞穂の隣に腰を下ろす。

一息ついて瑞穂が話し出すのを待つ・・・・・・のだが。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

十秒経過。手持ち無沙汰になり頬をかく。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

三十秒経過。なおも沈黙が続いている。アレか? 最初にしゃべつた方が負けとかいうゲームか?

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

俺の忍耐力もそろそろ限界に達しそうかといつその時、

「・・・・」めん

瑞穂の唇が小さく動いた。そして、その唇から紡がれた言葉に内心驚きながらも、しかし表情には出さずその先にある言葉を促す。

「何が？」

「だから、「めん」と言つたの」

「いや、そうじゃなくて。なんで謝つたのかつて聞いてるんだよ」

瑞穂は結構いっぽいいっぽいらしい。言語理解能力が著しくえぐくなっている。瑞穂は俺の指摘に虚を衝かれた感じで、

「え、あ、うん。えっと、その・・・」

なんとまあ。完璧人間である我が校のプリンセス、同時に俺の不<sub>ふ</sub>俱戴天<sup>ぐたいてん</sup>の敵である、“あの”瑞穂が動搖を隠せないでいる。

いつもの瑞穂らしからぬ拳動不審ぶりに啞然としつつも、なんとなく瑞穂の言いたい事が解ってきた。たぶん瑞穂は、さつきの俺への悪態を謝りたいんだ。でも俺に対して謝りなれてないから、何の前触れもなしに「「めん」の一言しか出てこなかつたんだろ。」

「その・・・・・・」

瑞穂がもじもじと言つよどむ姿を見てくくくと笑う。瑞穂が謝つただけでももの凄い進歩だし、今の瑞穂をいじめるのは酷か。

「わかつたから」

「これ以上言わせまいと口を止める。

「えっ？」

「瑞穂が言いたい事わかつたから言わなくていい。こっちも悪いんだし、今度から遅くなるときは絶対メールするから。その、だから俺も、ごめん」

少しつつけんどんな口調になつてしまつたが、照れるのだから仕方がない。隣のやつに「そ、そう、わかればいいのよ」なんて明後日の方向を向いて照れ隠しを口にしているのだから、同じようなものだらう。

瑞穂もいつもこのぐらいの素直なら可愛いのに。

瑞穂を眺め、頬を緩めている自分にはつとして首を振る。何を考えているんだ俺は。どうも今日の俺は少しばかり狂っているらしい。この傍若無人女が可愛いなんて、頭のネジが飛んだのかな。これで瑞穂のことをどうこう言つてられないじゃないか。

「どうしたの？」

不意に、瑞穂が覗き込んできた。

「えっ？ ああ、いや、別に、なんでも・・・。あ、そうだ！ 喉渴いてないか？ 確か近くに自販機があつたはずだから何か買つてくる。

瑞穂は何がいい？」

不覚。めちゃくちゃ動搖してしまつた。その動搖を悟られまいとして余計に奇天烈な言動を・・・。

瑞穂は首を傾げながらも言及はせず、

「秋人と同じものでいい

「や、そ、う、じゃあ「コーラでも・・・」

立ち上がりながら呟き、こぞ貰いに行こうとしてストップをかけられる。

「炭酸はイヤ」

「え? でもお前同じものでいいって・・・」

「体に悪いじゃない。私にそんなもの飲ませないでよ。秋人も秋人よ。コーラなんて止めなさい」

「わかつたわかつた。じゃあお茶買つてくる」

適当にあしらって手をひらひらと振り、こぞ貰いに行こうとしてまたもやストップ。

「お茶もイヤ」

「なんでだよ・・・」

「今はそんな気分じゃないの。ミルクティーにして」

我がまま娘を前にして眉間につまんだ。

「最初からそう言え

「つたぐ、瑞穂の奴は俺がミルクティーを絶対に選ぶとも思つたのかよ」

「と、一人ぼやきながら自販機からミルクティーが入つていて缶を2本取り出す。

踵を返し、我まま娘の待つベンチへ帰るべく来た道を戻つていると、どこからか女性のものと思しき甲高い声が聞こえてきた。何かと思い、立ち止まり耳を澄ませる。

「・・・いや・・・・ないで・・・・・キヤーーー！」

「つてこれ悲鳴じやねーか！」

周囲をさつと見渡した。

「いない。

しかしそんなに遠くではなかつたはずだ。俺は悲鳴の上がつた方へ注意を傾ける。

と、道から外れた林の方に僅かに蠢く人影が見えた。

気付かれなによつに慎重に近づいていくと、追い詰められた女性と手に包丁を持った男が。

おいおいおこおいっ！これって例の通り魔！？

男のほうはサングラスやマスクで顔を隠していて誰だか特定できない。

女性は・・・・・ん？あれってウチの制服じゃねーか。

田を凝らして女子生徒の顔をよく見る。

っ！

今にも殺されそうなその子は、今朝の電車の中でぶつかってきた  
美少女だった。

常々、もつと早く更新しようと毎日のですが、この手が急げるんです。それに瞼が重くて・・・。  
はい、言い訳終了。

今後はもつと頑張ります。

俺は物陰に隠れて、バクバクと慌ただしく波打つ心臓を押さえつけながら状況把握に努める。

よし、じつにう時こそ落ち着け。落ち着け秋人・・・。

ここから10メートルばかり離れた場所で起きている、極めて悪質な非常事態。

未だ信じ難い光景であるが、通り魔がか弱い女の子を今までに手にかけようとしているのは紛れもない事実。

そしてその女の子とは、今朝出会ったばかりの名も知らぬ美少女。

俺は今現在の状況を整理、冷静な判断を下すべく、脳細胞を総動員させて自分の執るべき最善の行動を模索する。

と、とりあえず警察だ! こういう場合「警察に通報しなさい」「と、あれほど口を酸っぱくして小学校の先生が教えていたではないか。そうだよ、警察に通報するんだ。大丈夫、信じろ。小学校の先生を・・・。

しかしその考えをすぐに否定する。

馬鹿か俺は! 通報してから警察が現場に到着するまで何分かかるんだよ。その前にあの子は天に召されちまつだろ。

まったくもって正論である。俺は急ぎ次の手段を模索。

じゃ、じゃあ瑞穂に連絡を。そうだ、あいつなら絶対何とかしてくれるはずだ。少々気に食わないが、すべべ言ひてる暇は無い。そうだよ、瑞穂に連絡するんだ。大丈夫、信じる。瑞穂を・・・。

「・・・・・」

いや、ダメだ。そもそもこんな近くで電話していたら会話が漏れて気付かれてしまう。それに瑞穂がこの危機的状況を開けてくれるとは思えない。

ここまで考えるのに数秒。しかしながらカウントダウンは一刻と刻まれているわけで、凶悪な通り魔が脅え腰を抜かして動けない少女にジリジリと近づいていく。

俺は頭を振った。

秋人、冷静になれ。冷静になればわかることじやないか。今彼女を助けられるのは俺しかいない。俺が、俺自身が彼女を助ける他に道はない。

だが、心では分かつていても、臆病風に吹かれて手が震える。

臆するな、恐れるな。得物がなんだ。そんなの切られる前に奪つてしまえ。ここで黙つて見ていて後悔するより、一生罪悪感に苛まれながら生きる人生を選ぶより、今自分にしかできないことをしろー。

目を閉じ、深い深呼吸を二度繰り返す。

よしつー！

「いやつ……こなーいでつ……」

少女が恐怖に打ち震え、なす術も無く首を振る。黒服に身を包みサングラスとマスクで顔を覆っている男は、マスクだけを外し、あたかも殺戮さつりくを愉しんでいるかのような笑みを口元に浮かべた。

「ヒツ、ヒヒツ……」

僅かに漏れた笑い声には正氣の沙汰とは思えない響きが込められている。

男が得物を逆手に持ち、大きく振りかざす。

少女が目を閉じる。そして鋭利な刃が彼女めがけて振り下ろされる刹那

ヒツ

「 つつー！」

通り魔が小さな悲鳴を上げた後、手を押さえ数歩よろける。

地面にまき散らされた男が手にしていた包丁と、中身が入ったスチール缶。

その缶が飛んできた方向には、

「あつぶねえーー」

投擲とうてきを終え、手を振り下ろした体勢のまま安堵の溜息をつく秋人。

もしも相手に向かつて走つて行き止めようとしていたら、完全に間に合わなかつただろう。俺は一か八か持つていたスチール缶を投げた。“相手の顔めがけて”だが・・・しかし汗で僅かに手元が狂つた。一瞬ヒヤッとしたが、運よく相手の手に当たつてくれたようである。

ヒビのつまみ神様が手助けしてくれたのだ。

俺は自分の強運にしばし感嘆し、やがて我に返ると、眉間にしわを寄せ通り魔を睨んだ。

通り魔は身の危険を察知したのか、公園の奥へと逃げだした。

「あつ、待てっ！！」

このとき、慌てて追つたのがいけなかつたのだろう。足元への注意を怠つたために、足元に転がつてゐる“物”に気付かなかつた。

自分の投げたミルクティ - を運悪く踏んづけてしまつ。

「えつ・・・？」

クルッと回転し、俺の身体は空中へ。

一瞬の浮遊感。

」のままでは尻餅を搗いてしまう。咄嗟の判断で地面に向けて右手を伸ばし、そして・・・

「キッ

耳障りな音が辺りに虚しく響いた。

「遅い」

いくらなんでも遅すぎる。飲み物一つにどんなだけ時間をかければ気が済むのだ。

秋人が自販機に飲み物を買いに行つてからずいぶんと時間が経っている。まさか私を置いて先に帰つてしまつたのではなかろうか。

嫌な予感がして携帯を取り出す。

「何やつてんのかしら。あのバカ」

秋人に電話をかけると、何度も田かの呼び出し音ののち「もしもし瑞穂か」と秋人の声が聞こえてきた。

「秋人！今まで待たせる気よ！」

『悪いつ、ちょっとこいつちも色々あつて。お前先に帰つていいから。それじゃつ プツツ』

「あつ、ちよつと待ちなさいつ……もつつー。」

一方的に電話を切られてしまった。憤りを禁じ得ず、ベンチを叩く。

「つー。」

案外な痛さに涙目になつて手を押される。

しばらく悶えた後、私は居ても立つても居られなくなり、秋人を探しに歩き出した。

眩しい夕日に照らされているのは柳眉を逆立て公園内を歩く瑞穂。

「どにいつたのよ秋人のやつ……。」

不安げに辺りを見回す。先ほどの憤慨はどこかに消え失せ、瞳に浮かぶのは不安ばかり。

せつかくイイ感じだったのに・・・。

私は溜息を吐く。

あれほど苦労して絞り出した謝罪の言葉だったのに。少しは進展があつてもいいはずなのに。

しかし現実は厳しい。天はいつだつて私を見放す。

何気なくイチョウの林を見遣つた時だつた。林の中で何かが動いた。

「秋人？」

何と無くそんな気がして、遊歩道から外れ薄暗い芝生の上を歩く。近づくにつれ、それが確かに秋人であることがわかつた。

だが、様子がおかしい。一本の木に向かつて何かやつている。

逸る気持ちを抑えてゆっくりと近づくと、そこには一人の少女が目を瞑つた状態で木に寄りかかっていた。

その少女の肩には秋人の手。

一瞬にして頭に血が上る。両手を震わせ、顔が引き攣る。

「ああそこが……」

「げつ！瑞穂！お前なんでここにいるんだよー？」「

振り向いた秋人の顔が私よりも引き攣っていた。

私はゆらゆらと秋人に近づく。

は？ ！お前の考へてゐるやうな」「じきない！」

「じゃあその手は向かう！」

私は少女の肩に置かれた秋人の手を指差す。

「え？・・・あつーああつーいや、ち、違つーこれは・・・ヒ、  
とにかく俺の話を聞けつーーー！」

動搖し慌てて手を離すところがまた怪しい。

# 「問答無用つ！！」

逢う魔が時。 真の悪魔、 ここに降臨。

眠いです・・・しかし今は読書の秋！

そして、読み始めると止まらない今日この頃。

まあ、今に始まつたことじやないんですけど。

「ふう〜ん、それで秋人がこの子を助けたと・・・

「おおっ、やつとわかつてくれたか瑞穂よー。」

思わず詠嘆の声を上げる。彼女にこの状況に陥った訳をやつと理解してもらえたようだ。その理解を得るために、実に3度の説明を要したが・・・。

「でへ〜びつするのよ、この子」

俺はその問に対しても即答できなかつた。

俺の眼前には規則正しい寝息を立てている美少女。たぶん、刺されそうになつたときに氣絶したのだろう。あれだけの恐怖の中に身を置けばそれも当然かもしれない。ましてや女の子だ。トライアにならなければいいが・・・。

未だ目覚める兆候が見られない眠り姫から自身に目を移し、溜息をつく。

今日の天気を思い出してほしい。つい先ほどまで雨が降り続いていた。当然、辺り一面はぬかるみ、所々水溜りができる箇所も見受けられる。この芝生の上もそれに同じであり、踏みこめばピチヤピチヤと音を立てるほどだ。

どじのつまつ句を言いたいのかといつと、

俺と木にもたれかかって眠っている彼女は泥だらけになつてゐるのだ。俺は尻餅を搗いただけなので被害状況は比較的小規模であるが、彼女の場合はスカートから制服の上着までたっぷりと湿り気を帯び、白い生地についた汚れも仰々しく自己主張している。これは憶測にすぎないが、仄暗い公園で逃げ惑う中、ちょうど雨のせいで滑りやすくなつている草の上で転んでしまうこともあつたのだと思つ。それは彼女の制服に付いた緑色の染みからも窺い知れる。

彼女を横目で一瞥し、あごに手を当てて思考を巡らす。

彼女をこのまま置いて帰ることなどできないし、かと云つて彼女の家がわかるわけでもないし・・・。

俺はしばらく逡巡した後、口火を切つた。

「瑞穂、この子を綾崎家に連れて行つてもいいか？泥だらけだし、あれだけの怖い経験の後だ。一人にはさせられない。頼む」

「それは、別に構わないけど・・・」

いまひとつ煮え切らない口調で瑞穂は答える。

「けど？」

瑞穂はこつちをチラッとだけ覗き見てから、

「秋人、ずいぶんとこの子に肩入れするのね？」

どこか不満交じりの声音で、俺の真意を推し量りつとするよつこ尋ねてきた。

「はあ？お前この状況見てから言えよ。普通の人間だつたらほつと  
けるわけねーだろ。・・・まあ、鬼畜はどうだか知らねーけど」

瑞穂の言いたい事は何と無くわかつたが、あえてそれには触れないことにする。

「だつ、誰が鬼畜よつ！私だつてほつとけないわよ！」

「そーですか。どうかご無礼お許しを」

恭しく頭を下げる、瑞穂はもの凄い形相で俺をキツと睨み、「  
ふんつ」と顔を背けた。

「おーい、つこさつときまでの素直な瑞穂さんほどここに行つたん  
ですか～？」

この場に来てからずっと不機嫌オーラを放出し続けている瑞穂に  
向かつてそう言つた。もちろん心の中で、だが。

辺りにはもう闇が落ち、この鬱蒼うつそうと茂るイチョウの葉が風に呑  
せてさらさらと揺れる。

瑞穂に付き合つていたらいつまでも無限ループに嵌つたままで、  
永遠に綾崎家に着けないような気さえしてきた。それに、いくら夏  
とはい濡れた服のままでは風邪をひいてしまつ。

「瑞穂、お前の話なら後でいくらでも聞くから、とりあえず帰ろつ。  
もうだいぶ暗くなつてきてる。ほら、この子抱ぐから手伝つて」

「はこはこやーですね。任せのままひつ」

瑞穂はわざとひつへ皿つと、しぶしぶとこつた感じで作業に取り掛かった。

「・・・・・」

瑞穂がショートヘアの美少女を俺に見せようとして、ピクリと動きを止める。

「じつした? 早く乗せりよ」

「・・・・・」

反応なし。再度呼びかける。

「おー、みず」

「少しでもへんなとこ触つたら、ブツ叩くからね?」

そう言つてじつにり微笑む。笑顔の下で見え隠れする殺氣。それが彼女の口から紡がれた言葉に剣呑な響きをもえていた。

「お、おつ・・・・

氣迫に押されながらも答えると、ぽんくして背中に重みを感じる。同時に、やわらかい感触が制服越しに背中に伝わってきた。

「わあ、やわらげ・・・

煩惱に支配されかけた俺に追い討ちをかけるよつて、女性特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「痛つ

そんな不謹慎な俺に天誅が下つたのか、彼女の身体を支えようと力を入れたとき右手に鋭い痛みが走つた。背中の甘い感覚はいつきに熱を下げる。

「どうしたの?」

異変に感づいた瑞穂が、俺の顔色を伺つよつて尋ねてきた。

「なんでもない・・・

やつべ、家までもつかな・・・

俺は顔を背け、できるだけ平常を装つ。唇を噛み締めて情けない自分に喝を入れると、少女を背負い直して歩き出した。

綾崎家の玄関では明日香さんが出迎えてくれた。

「お帰りなさい。ずいぶんと遅かつたのね。・・・あひへ・せひの子は?」

俺の背負つてこる少女に気付くと、明日香さんは少し驚いたような表情をした。

「あ、話すと長くなるんで、とつあえずその前にこの子の服を取り替えてもらいたいんですけど。彼女、泥だらけなんですね」

「わかったわ。じゃあいつの部屋に運んでもらえ?」

明日香さんは嫌な顔一つせず、快く了承してくれた。さすが娘とは違つ。

少女の着替えは瑞穂に一任し、俺はリビングで明日香さんについての経緯を説明することにした。俺のズボンも汚れていたので、篤史さんのジーンズを貸してもらつていい。

「…………と、いわけなんですよ」

瑞穂とのやりとりは抜かして一通り説明し終わると、何故だかドッと疲れが圧し掛かってきた。それなりに緊張しつぱなしだったから、我が家とも呼べる綾崎家に無事帰還して無意識に安心したかもしれない。

「そう……でも本当に無事でよかったです。秋ちゃん大活躍じゃない。さすが私の子ね」

終始真剣に話を聞いていた明日香さんが、重苦しい空気を払拭するかのよつとおどけてみせる。

「あははは、俺はいつから明日香さんの子供になつたんですか?」

「うふふ、冗談よ。それより、秋ちゃんケガはない？」

「あ、ああ、大丈夫です。犯人とも接觸してないし……」

そう言つて、さりげなく右手を後ろに回す。

しかし明日香さんの千里眼とも言つべき観察力からは逃れられなかつた。

「秋ちゃん、お手」

笑顔の奥に般若の形相を隠した明日香さんがそう言つて手を差し出す。

「うう……」

俺は瑞穂顔負けの恐ろしさに戦々恐々として、しかたなく隠した右手を明日香さんのそれに重ねた。

「凄く腫れてるじゃないー? うして何も言わなかつたのー!」

俺の手を見るなり、明日香さんは声を荒げた。

「別に大したことじやないかな、って思つて……」

たははと笑う俺をひと睨みして、明日香さんが真剣な表情で俺の右手を調べる。

「こつ……」

明日香さんが手首に触れたとき、ビクンと身体が震えた。存外な痛さに顔が歪む。よく見ると、俺の右手は先ほどよりも腫れ上がっているようだ。血液の流動に合わせてジンジンと痛む。

「今日はもう病院閉まっているだろうから、明日学校休んで病院に行きましょう。・・・まったく、秋ちゃんも変なところで我慢強いんだから。男の子だからって無理しちゃダメよ？痛いときは痛いつて言つこと。いいわね？」

明日香さんはわが子を慈しむように優しく微笑むと、救急箱を取りにリビングを離れた。

俺はそんな明日香さんの背中に久しぶりに母親の愛情を感じて、ふつと微笑んだ。

一日がもの凄く長くなってしまったので、次回で明田になる予定です。

「・・・ん

身じろぎをし、少女が薄つすらと目を開く。

「気がついた?」

私は、眩しそうに目を細めながらも焦点の合わない目でこちらを見つめる少女に呼びかけた。

「うやくお姫様のお目覚めか・・・。

數十日前。意識のない人間を着替えさせるという意外に過酷な至上命題を仰せつかつた私は、四苦八苦しながらも彼女を泥だらけの制服から解放し、私のワンピースに着替えさせることに成功した。その後暫くの間、彼女が横たわっているベッドに腰掛け一息つきながら、不運な、しかしちょっと羨ましくもある少女の寝顔をぼんやりと眺めていたのだ。

「あの、ここは・・・?」

身体を起こした少女は辺りをキヨロキヨロと見回し、戸惑い気味に尋ねてきた。

私はそんな彼女の不安を和らげるようになんか微笑みかける。

「私の家よ。あなたを助けた秋人が、ここまであなたを運んだの」

「あきと・・・?」

いま一つ状況が飲み込めないとこりみづこ、困惑の表情を浮かべる少女。

「別に怪しいところじゃないから心配しないで。ちなみにその服は私のね。あなたの服泥だらけだったから、勝手に取り替えさせてもらつたわよ」

「すみません・・・」

彼女は自分の身を包んでいる白のワンピースを見て、申し訳なさそうな表情をする。

「いいのいいの、気にしないで。それより、名前を教えてくれない?」

「は、はい。片瀬紺那かたせひなです」

そう言つてぺこりとお辞儀した。

「そう、紺那ちゃんね。よろしく。私は」

「あ、綾崎先輩、ですよね?」

控えめに彼女が口をはさんだ。

「あら、知つてたの?」

「はい。先輩は有名人ですから・・・」

はにかむ少女に私は苦笑いしか返すことができない。

有名人、ねえ・・・。

なんとも複雑な心境だ。意図してそうなったわけではないし、囁ささはし立てられるのはどうも好きになれない。それに、全く知らない人が私のことを知っているというのも少し嫌な感じがする。芸能人もこういう心境になつたりするのだろうか。

何と無く返す言葉が見つからずあやふやな笑みを浮かべていると、控えめにドアがノックされた。

「ンン」

「瑞穂、俺だ。開けてもいいか」

ぐぐもつた小さな声がドア越しに聞こえてきた。

「どうぞ」

私が了承の言葉を口にすると、静かに扉が開き、秋人が足音を忍ばせて部屋に入ってきた。

「あつ・・・」

緋那ちゃんが秋人の姿を確認すると、小さく声を漏らし、大きい目を更に大きくさせる。

「なんだ、起きてたのか」

声量を抑えていた秋人の声音が普段の大きさに戻る。

「ついさつきね」

「そう。じゃあちょうどよかつた。明日香さんが夕飯の支度出来てから呼んできつて。えっと・・・あー、君。夕飯食べてくでしょ？」

「ふふつ、君つて何？片瀬紺那ちゃんよ」

秋人がまだ彼女の名前を知らないことを思い出し、私は自分もついさつき知つたばかりの彼女の名前を教えてあげた。秋人が「君」つて一人称使うのは全く似合つてなかつたし。

「え？ああ、片瀬さんね。霧宮秋人です。よろしく」

紺那ちゃんに笑いかけ自己紹介する秋人。

そんな秋人を見て、紺那ちゃんは慌ててベッドから降りて秋人と向かい合つた。

「片瀬紺那です。」

そして私にしたときと同じように律儀にもお辞儀をする。

む・・・。

ぎこちない一人を傍観していると、まるでお見合いみたいだ、と思う。秋人の笑顔が無性に癪に障るのはなぜだろう。

半眼でじとーっとした視線を一人に投げかけている私を他所に、一人の会話は続く。

「えっと、私……き、霧富くんに助けてもらつたんですね？…  
・あの、ごめんなさい。助けてもらつたのによく覚えて無くて…  
・・・。霧富くんが私を助けてくれたつて綾崎先輩に教えてもらいました」

本当に申し訳なさそうに顔を俯かせる。

「いや、気にしないで。それより、怪我は？」

「あ、私はほんとなんともないです。・・・・・霧富くんこそ、  
その包帯・・・」

緋那ちゃんが指摘して私は秋人が怪我をしていることに初めて気がついた。秋人の右手には包帯が巻かれている。しっかりと巻いてあるところを見ると、ママにしてもらつたのだとわかった。

秋人の怪我に気付いてやれなかつた自分に嫌悪する。さきほど誤解して秋人をドツいたことも思い出し、更に落胆。

なんで私はこいつもいつも・・・・・。

気付かれなじように溜息をついた。

秋人は罰の悪そうな苦笑いを浮かべて手をぱりぱりと振る。

「これは、その、別に通り魔がどうとかじゃなくて、単にドジつた

「とこ、なんといふか……とにかく、大したことじやないから気にしないで。まあ、大事をとつて明日は病院に行つてみるけど」

秋人は緋那ちゃんを励ますよつに明るく笑つた。

「ほんとにすみません……」

それでも緋那ちゃんはまるで血分が元凶とでも書つように謝る。

「片瀬さんが謝る」とじやないから、マジで。悪いのは片瀬さんを襲つた男だし。それに」

そこまで言つて一拍置き、

「片瀬さんが無事ならそれでいいって」

そう言つてから秋人は恥ずかしそうに頬を搔く。

「あ、はい……」

それが伝染したのか、向かい合つている緋那ちゃんの頬もほんのり朱に染まる。

そして一人押し黙つた。

「ん? 何なのよ、」の空氣。

甘酸っぱい空氣が部屋に充満している……気がする。

なによ、秋人のやつ。私にそんな優しい言葉かけてくれないくせ

に。

さつきよりも秋人のはにかんだ笑顔が心の奥をささくれ立たせた。

そもそも一人は私のことなど忘れているのではないだろうか。そんな錯覚に陥り、倉皇として言葉を紡いだ。

「秋人、ゴハンは？」

「ん・・・？あ、ああ、そうだった」

私には秋人の様子がいつもと違うように思えて、胸の中が微かにざわつくのを感じた。

「でも、送つてもらうなんてやつぱり悪いです」

「何言つてんの。危ない目にあつたばかりなのに。それに、途中まで道わからんないだろ？」

優しい月明かりに照らされた仄かに明るい夜道を、俺たちは肩を並べて歩く。

生暖かい夏の夜風に乗つて、虫たちの心地よい羽音が聴こえてくる。ここは住宅街のため車の通りも少なく、虫たちの囁きの他には俺たち一人の足音が聞こえるだけで、辺りはひつそりと静まり返つ

ていた。

昼間は“閑静な”という表現もしつくりくるが、夜間はただ不気味なだけである。こんな夜道を女の子一人で歩かせるのはやはり忍びない。

といふことで、

夕食を済ませた後はさすがに時間帯も遅くなつたため、片瀬を俺が送ることになったのだ。

「霧宮くんつて、あの綾崎先輩と幼馴染だつたんですね」

「言つとくけど、全然これっぽっちもいいことなんてないぞ？片瀬さんが抱いている綾崎瑞穂先輩像は虚像だ。その実体はもつと凶悪で残忍な」

「そんなことないんじゃないですか？」

「むー・・・。どうして？」

片瀬は少し考えるよつとして夜空を見上げる。

「うーん、どうしてでしょう？・・・でも、優しい人だと思います。ほら、この服だつて貸してくれたし」

「うーん・・・」

優しい人、ねえ・・・。服貸したぐらいでか？

肯定できない。思い出されるのは辛かつたあの日々と、口では言えないような拷問の日々。そして悪魔のような冷笑・・・・・といつのはこをさか針小棒大に語り過ぎだが、俺に対して優しかったことなど一度もないのだから、頷けるわけがない。

俺は瑞穂に対する自他の見解の違いについて考へ、押し黙る。

俺に呴わせるように片瀬も口を噤み、そしてそのまま一人とも黙つて歩き続けた。

しばり歩いてふと思つ。

「あれ？ さつこいや片瀬さんの家つてどー? 」

眼前には、数時間前に肝が潰れるほどの思いをした日向公園が迫つてきてくる。そもそも片瀬がこの公園に説もなく来るはずがない。それに、夕食のときに帰り道だと言つていたから、片瀬宅はここからそろそろ遠くないはずだ。

「 もうすぐです」

片瀬はあやふやに答えて、夜の公園に何の躊躇もなく足を踏み入れる。

片瀬つて、意外と度胸あるんだな。

妙に感心してしまう。しかし、襲われたばかりの公園に簡単に足を踏み入れることなどできるのだろうか。いや、普通無理だ。

もしかしてこの公園に住んでたりして。だから怖くないとか？

思わず片瀬が公園のベンチで寝起きしている姿を想像してしまつた。

はつとなつて頭を左右に振り、その妄想を搔き消す。

俺の阿呆……。普通に考えてありえねーつつの。片瀬、すまん……。

俺の少し前を歩く片瀬の後姿にむかつて手を合わせた。

ふむ、それにしても……。

結構おかしな話だと思つ。近所に住居を構えているのなら、俺は片瀬のことを何らかしら知つてゐるはずだ。小学校の学区だつて一緒だつたろうし。けれども、俺は今朝電車でぶつかるまで彼女の存在を知らなかつた。

最近引っ越してきたのか？それなら辻襷が合つ。

俺はゆつたりとしたペースで歩く片瀬に疑問を投じてみた。

「片瀬さんは最近引っ越してきたのか？」

彼女は振り向く、

「え？私は一度も引っ越したことはありませんよ？」

どうしてそんなことを尋ねられるのか分からぬといふ風に首を

傾げる。

「あ、そうなんだ・・・」

ますます謎だ。

俺が一人思案に耽つていると、いつの間にか公園の反対側まで来ていた。そのまま片瀬に付いて歩道を歩く。

中学に入つてからといつもの、日向公園の反対側の地域を訪れる機会はめっきり減つてしまつた。まあ、これと黙つて用も無かつたしな。それでも、幼少の頃はこいら辺にある友達の家によく遊びに行つたものだ。だからこの地区もよく知つてゐるはずなんだが・・・。

やつぱり、単に今まで出会わなかつただけなのか？

数年前に見た景色と何ら変わりない今の夜景を見て、そんな結論に辿り着いた。

時々、俺たちの横を車が追い抜き遠ざかる。それと同時に、ライトに照らし出されてできた一いつの影も、伸びては消え、そんなことを繰り返していた。

俺は懐かしくなつて辺りを見回す。古びた文具店、看板、垣根、その向こう側にある民家・・・。見える範囲でも郷愁を覚えるものばかりだ。

本当に変わつてねえよなあ・・・。あ、もしかしてアレもまだあるのかな？

昔よく、悪友2、3人と一緒に忍び込んで遊んでいた秘密基地を思い浮かべる。とつておきの場所で、かなり気に入っていた。

あれはマジでスリルあつて楽しかつたなあ。あ、そういうや一回だけ見つかることもあつたつて。ちえつ、俺一人だけ置いて皆そそくさと逃げやがつて。ショックだつたんだぞコノヤロー。

その場面を思い出し、思わず笑みが零れた。今となつてはいい思い出だ。まあ、実際悪いことばかりじゃなかつたしな。

俺が一人でくつくつと笑つていると、片瀬が歩くスピードを落とし俺の隣に並んだ。

「あの、今日は本当にありがとうございました。おかげで命拾いました」

片瀬が何の脈絡もなしにいきなりそつ切り出し、微笑む。

「あ、うん。どういたしまして。ほんと大事に至らなくてよかつた

「そつ・・・ですね」

一瞬だが、片瀬が思案顔になつた。

「どうかした?」

「いえ、なんでもないです」

そう言つて笑う片瀬は、少し様子がおかしいように思えた。自分

が襲われている場面を思い出したのだろうか？トラウマになつてないか少し心配だ。

隣を歩いていた片瀬がある門の前で立ち止まる。

「あの、私の家」このなので・・・」

「へい、片瀬さん家つて結構近いんだ……な」

前景を見て、思わず目が点になる。信じられず瞬きを数回繰り返

「どうかしました？」

片瀬が開いた口が塞がらないでいる俺を覗き込んでいた。しかし俺の視線は目の前の景観に釘付けで、片瀬を視界に入れる余裕などなかつた。

ゴクリと音を立てて生唾を嚥下する。

家、  
そう、家  
・  
・  
・  
・  
・  
・

今日一日で一番驚いた瞬間だった。

一七四三『ヒナドコ』（後書き）

更新遅くなつてすみません・・・。

諸事情によりP.C.が使えず、更新できませんでした。

“諸事情”については、えー、じ想像にお任せします。はい。また、テストが近いので更新が今までよりも遅れがちになるやもしれません。学生の身分ゆえ、ご了承ください。

多くの評価・感想等いつもありがとうございます。

「どう？驚いた？」

「別に」

頬杖を付いたまま、司はまるで興味がないとでも言つたかのようにそう応える。友人の素つ氣無い返事がなんだかおもしろくなく、俺はふんっ、とそっぽを向いた。

出会い、動搖、非常事態、そして驚愕と、色々ありすぎて凄まじく疲れた一日から一日経過した今日。騒がしい教室の一角にある司の席の脇で、俺は司に大まかにその日の出来事を話していた。

俺は司の驚き懼ぐ様が挾める」ことを期待していたが・・・なんだよ司め、少しほは反應しろよ。あまりにも淡白な司の態度に少々苛立つ。

鼻を鳴らし、司を見下ろした。司の表情は相変わらず読めない。

「で？お前の怪我は？」

「んー・・・アハツ、アハハハハ

「誤魔化すな。キモい

テンメエ・・・

握った拳を下ろし、溜息を一つつく。

「レントゲン撮つたけど、ヒビは入つてなかつた。しかしな、結構“酷い”捻挫だつて言つてたぞ？」

それを聞いて司は押し黙つた。ん? ちよつとは心配になつたのか?

俺がニヤニヤしていふと、

「・・・“ただの”捻挫かよ」

「う、つるせえ!!」

司は「大仰だ」とでも言つたげに露骨な表情をする。腹立つなマジで。もしかして、わつきの間はわざとか!?

「医者は一週間もあれば治るだろ!つづいて」

「ふーん・・・」

「けつ、お前はほんと人に人をムカつかせることに長けてるよな」

俺は司をひと睨みした後、自分の右手に恨めしい視線を送り、肩を落とした。

副木によつて固定された人差し指には包帯が何十にも巻かれており、それは異様な太さになつてゐる。それにしても、人差し指は勘弁してほしい。右手の人差し指が使えない状況は生活にかなり支障をきたすだろ?。もうこれには溜息しか出ない。

俺がこれからどうやって日常を過ごすか思案していると、司が急

に手を差し出してきた。

「何この手。飴玉ならないぞ?」ゴメンねえ坊や」

「いらん。チツ・・・人がせつかくノートお前の分も取つてやうつ  
かと・・・・・・」

司はブツブツ咳いて、手を引っ込める。俺はすかさずその手にし  
がみ付き、

「スマセんしたお釈迦様!! 不肖霧宮秋人、ありがとうございます」恩恵を授  
かる次第であります」

「離せつ! テメエでどれ!」

「いーやーだー」

俺はそう言いながら司によよよ泣きつく真似をする。

司は俺の押しに観念したのか、それとも餓鬼っぽい俺がウザくな  
つたのか知らないが、

「わかつたから早くノート持つて来い」

そう言つて俺を手で追い払つた。

ふふん。なんだかんだ言つてあいつ友達思いなんだよな。

かわゆい司の優しさに機嫌を良くした俺は、嬉々としてノートを  
取りに戻つた。

昼休み。

パンと「パー ハー牛乳の入ったコンビニ袋を左手に、今日も今日とて校舎裏へと向かうべく教室を出る。

「あ、霧宮頼ひ」

呼ばれて振り返ると、廊下の先に見知れる人物を発見。その少女はショートの黒髪を揺らしながらこちらに小走りで向かって来た。

「や、片瀬さん。一日ぶり」

「うちが微笑むと、片瀬もあどけない笑顔を返してくる。

「ん、元気うでなにより。

片瀬の笑顔を見てほっとする。実は、あの事件がきっかけで不登校になつていやいないかと朝から心配だつたりした。まあでも、今 の笑顔を見ている限りそれもどうやら杞憂に過ぎないようだ。

「ひんにちは。えつと、先日はすみませんでした」

「片瀬さんが謝る」とじやないつて言つたよね?」

「 もうすげえ、でもせっぱつ・・・・・・・・

片瀬としてはどうしても納得がいかないよつだ。だけど、それは筋違いも甚だしきだらう。これでは俺のほうが納得いかない。

「 謝るより、ありがとひつて言つてくれたほうが、俺は嬉しいんだけど?」

「 すみませ・・・・じやなくて、えつと、せうですね。ありがとひつて言つました」

「 ま、一日前にお礼言われたから、わざわざ言つてもひつともなかつたんだけどね」

ふふんと嘲笑つかのよつに振舞つと、片瀬は少し唇を尖らせた。

「 もうやつてからかう人、嫌いです」

「 悪い悪い」

右手を上げて謝ると、片瀬の視線が包帯の巻かれた指に注がれた。

「 ・・・あの、お怪我のほうは?..」

そう言つて上田遣いで覗き込んでくる。

「 ん、かる~い捻挫だつて。やつぱりそんな大した怪我じゃなかつたよ。全然痛くないし、医者も今日明日中には治るつて言つてたから、片瀬さんは気にする」となにが?」

俺が言い終わらないうちに、片瀬は俺との距離を縮めて来る。

そして徐に俺の手をとり、小さこいつの手で包み込んだ。

え、ちょ、なに？

いきなりの大胆な行動に心拍数が上昇する。包まれた右手は熱を帯び、じつとりと汗ばんできた。

俺は訳が分からず、片瀬の顔と包まれた右手とを視線が行つたり来たり。片瀬は何も言わずに、じつと俺の指に視線を送つている。

「あの～、片瀬さん、つづ……」

ぎゅううう

「いだだだだだだ

人差し指を握られた。俺は咄嗟に右手を引つ込め、涙目で片瀬を睨む。

「何すんだよ？」

「そうやってウソつくな、嫌いです」

片瀬はふんつとそつぽを向いた。

「・・・は？」

「やっぱり痛いんですね？綾崎先輩のお母さんに電話したので、治

るには一週間くらいかかることも知っています。腫れが治まらないことも。そもそも添え木がある時点で酷い捻挫だつてわかります。私が原因のようなものなのに・・・。それなのにビジットして、霧宮君は本当のことを言つてくれないんですかー。」

片瀬は一気にまくし立てたあと、俺の答えを待つよつじつと睨んだまま。

俺は一瞬にして嘘がばれたのと片瀬が怪我の詳細を知つてこゐることに驚き、暫し呆然と立ち尽くす。

焦点の合わない瞳を片瀬の瞳から放せないまま考える。

片瀬はなんでこんなに詳しく知つてるんだ？

あー、明日香さんに聞いたんだつけ。

片瀬はなんでこんなに怒つてるんだ？

知らん。

そもそもなんでいきなりこんなこと云う・・・。

解る奴がいたら俺に教えてくれ・・・。

しつかり間を取つて、押し悩んだ末に出た答えは、

「あ、あー、えーと・・・・・・・・。廊下。とつあんず、落ち着こひつ」

片瀬に注意を促すものだつた。實に情けない。

「あう・・・」

片瀬は自分たちが注田を浴びてこむことに気が付くと、案の定、顔を真つ赤にして俯いた。

「つ、つこてきてください。こいだと、人が・・・」

片瀬はぼそぼそとちろくと廊下を歩き出た。

「片瀬さん、今の話・・・」

「な、なんでもないですっー！」

俺は背後で安堵の溜息を漏らした。

薄暗い階段を上ると、小さな踊り場に出た。目の前にある鉄の扉の小窓から差し込む光が眩しい。

「なあ、こいつて屋上に通じる扉だろ？」

「はー、そうですねばー。」

「へー、鍵閉まつてゐるよ」

瑞穂に邪魔されずに安息できる憩いの場所を求めて、俺も試しにここへ来た。しかしあの時は鍵がかかっていて開かなかつたはずだ。たぶん今も鍵がかかつたままだ。じゃあ片瀬は何でこんな所に・・・？

「ふふっ」

片瀬はいたずらっ子のような笑みを浮かべて、なにやらガチャガチャと・・・

ガチャ・・・・・・・・キイー

「行きましょうか」

片瀬に促され、屋上に出る。

開け放たれたドアの先にはコンクリートのタイルと、それと対照的で突き抜けるような青天。鬱陶しい夏の日差しがさえもが清々しく感じる。

テニスコート5面分は優に取れるであろうこの場所は、四方を3メートル位のフェンスで囲まれているので、安全もあるようだ。

「うつわあ、すげえ・・・・」

思わず感嘆の声を漏らす。

やはり「屋上」にはなんとも言い難い魅力を感じる。初めてこの場所に立つたのなら感慨も一入だ。

片瀬が数歩前に躍り出て、ぐるっと振り返った。

「ああ、ネタばらしの始まりです」

18日『余計な気遣い』（後書き）

更新遅くなつて申し訳ありません。

テストも終わつていざ書き始めるそつて意気込んだら、逆に書けなくなつてました。orz

といいますか、片瀬紺那のキャラ設定が曖昧なままで……。はい、完璧自爆です。

なかなか甘い展開に持ち込めません……。

ジ

斜め上からじゅうじゅうを見つめて放さない真つ黒なレンズを負けじと見つめ返す。

防犯カメラ・・・

「これぐら」の豪邸であれば備え付けてあるのは至極当然のことだ。しかし、監視されるというのはいい氣がしないのも至極当然。現代の日本では、至る所に監視カメラが設置してあるが、これではプライバシーも自由もあつたもんじやない。まあ、カメラはガミガミ文句を言つてこないし、ましてや命令などしてこないので、誰かさんより数倍マシなのが・・・。

じゅうじゅう様でしょつか

ふいに、近くから女性らしき抑揚の感じられない声が聞こえてきた。俺は真っ黒なレンズとの睨めっこを止め、そちらに顔を向ける。

壇に設置されたインター ホンを通して聞こえてきた声のようだ。

俺はそれに近づき、「片瀬紺那さんの友達の霧宮ですが」とインター ホンに向かつて応える。

少々お待ちください

やはり抑揚のない声が返ってきた。

俺は額から伝う汗を肩で拭つた。容赦なく照りつけた太陽が鬱陶しい。

今日は休日。普段の俺なら今頃ベッドの中で惰眠を貪つてゐるが、今日は片瀬に呼び出されてしまったので、こうして再び片瀬邸へと赴いているのである。

くいくこと、Tシャツの袖が引っ張られる。

「ねえ、まさかドッキリじゃないわよね？」

瑞穂が田の前の浮世離れした光景に疊然としつつも、驚愕と不安の入り混じった声音でおずおずと尋ねてくる。

「ドッキリでも夢でもないぞ？」

俺が含み笑いをしながらそう答えた瞬間、鉄柵でできた門がゆっくりと開き始めた。ギイイと軋む門は陽光に照らされ黒光りしている。いかにも頑丈そうだ。

「ほり、行くぞ」

「うん・・・」

俺はびとなく緊張した面持ちの瑞穂を促して、遙か遠くに見える洋館に向かつて歩みを進めた。

玄関では私服姿の片瀬と、執事服を身に纏つた初老の男性が出迎えてくれていた。

「Jさんには。綾崎先輩に霧宮くん」

「や、片瀬さん」

片手を上げて挨拶すると、片瀬はにっこりと微笑んだ。

「え、やつぱりお嬢様なんだな。

膝まである白のシフォンワンピースの上に、淡いピンクのカーディガンを羽織つている。そんな片瀬の私服姿はどことなく気品が感じられる。Jの豪邸とも呼べる洋館を前にしても違和感がない。

それに比べてTシャツにジーパンと完全に場違いな格好の自分・・・。もう少し余所行きの服装にすればよかつた。

「緋那ちゃん久しぶり。元気してた?」

「はい、最近はすく元気です。あ、紹介しますね。Jからは執事の狩谷さん」

紹介された男性が深々と頭を下げる。

「狩谷と申します。本日はわざわざ足労いただきありがとうございます。お暑いでしょうか、どうぞ中へ」

狩谷と云つ繪に描いたような執事は、俺たちを邸の中へと促した。

「いつが、ねえ・・・。

白髪に白髪、顔に刻み込まれた皺は柔和な表情を形作つてゐる。背筋は常に正してあり、端正な身のこなしであるのだが・・・。

どう見てもジイさんだ。

片瀬の言つていたことが本当なら、この老人はいつたい何者なのだろう。

俺はオールバックにして整えられた白髪を凝視しながら、邸へと足を踏み入れた。

「うわあ、すごーい・・・」

瑞穂が感嘆したように辺りを見渡す。

俺たちの正面にはヨーロッパの宮殿を彷彿させる大理石でできた階段。壁には著名な画家のものと思われる絵画や、いかにも高級感が漂う壺、磨き抜かれた銀色の甲冑などが洋館に溶け込むように存在している。俺たちの足元は思わず寝そべりたくなるような絨毯で覆われていた。

「確かにこれはす」「……」

外観も威風堂々たる風貌をしているが、内装もやはり引けをとらないほどに情趣がある。

「ふふつ、一人とも口が開いたままですよ」

片瀬が口元に手を当てて微笑んだ。そんな些細な仕草もお嬢様っぽい。一度意識してしまつと、なんでも気品に溢れて見えるのだから不思議だ。

思わず瑞穂と顔を見合わせた。たぶん瑞穂も同じことを思つているだろ？

すこい娘と知り合つてしまつた。

「ン」

扉がノックされる。

「どうぞ」

「失礼します」

片瀬が応えると執事の狩谷さんがティーセットを持つて部屋に入ってきた。

俺たちは1階の応接室に通されたのだが、どうも落ち着かない。瑞穂も隣で所在無げにそわそわしている。

片瀬は俺たちと机を挟んで対面にあるソファに腰掛けている。しかし、片瀬も片瀬で先ほどとは違い、どこか浮かない顔をしているのが見て取れる。

紅茶が狩谷さんを含めた4人全員に行渡ると、片瀬が口火を切った。

「あの、霧宮くんにはこの前話したんですけど……」

片瀬が少し言ひよどむ。

「……私を襲ったのは、連續通り魔事件の犯人ではないんですけど……」

「……え？……ええっと、話が見えないんだけど」

瑞穂が困惑した表情を浮かべる。当然だ。俺だって最初は耳を疑つた。

俺は腕を組んでそのまま静観する。

「私を襲ったのは、その、狩谷さんだったんですね……」

片瀬はやつひて自分の斜め後ろに屹立する狩谷さんを見上げる。

執事は「主人様からのご依頼を受け取ったのか、片瀬に代わって話し始めた。

「（瑞穂）から私はから（瑞穂）説明いたします。先日、緋那お嬢様を襲ったのは私目で（瑞穂）います。しかし、本当に襲おうと思つていたわけでは断じて（瑞穂）ません」

「じゃあどうして緋那ちゃんにわざわざ怖い思いをさせたんですか」

瑞穂が堪え切れずといつぶつと口走る。狩谷さんは瑞穂を落ち着かせるように目じりを下げる微笑んだ。

「私は（瑞穂）から、緋那お嬢様お一人で登下校なさるのが心苦しく（瑞穂）やいました。緋那お嬢様は生まれつきお身体が弱く、入退院を繰り返しておいででしたので」

片瀬が自分の太ももの上に置かれた手をぎゅっと握る。

「だから（瑞穂）そんなんの

「瑞穂、最後まで話を聞（瑞穂）

立ち上がりそつになつた瑞穂をソファへ落ち着ける。

今まで片瀬の存在に気付かなかつたのは、深窓の令嬢つて理由だけじやなかつたんだな。

屋上で片瀬に説明してもらつたときは、身体が弱いなんて一言も

しゃべらなかつた。たぶん片瀬のことだ、氣を使わせると思つたの  
だう。

狩谷さんは続けた。

「緋那お嬢様は中学まで一年の大半を病院とこのお屋敷とで過ごす生活をお送りでした。しかし、去年の冬にお医者様からの許可も下りて、今春から普通の高校生として学校に通えることになつたのです。高校は予てからの決定で、御当主様の経営なさる東雲高校に入学なされました。そちらのほうが万一に備えて素早く対処できると、御当主様はお考えになられまして。また、あの高校は緋那お嬢様のために開校されたものですから」

ほう、うちの校長は片瀬のじいさんだつたのか。どうりで片瀬が屋上の鍵を持つているわけだ。

それにしても狩谷さんの話には逐一驚かされる。常識的に考えてまずありえないようなことばかりだ。少女一人のために高校一つ建てるなんて馬鹿げたこと、並大抵の金持ちじゃできないだろうに。瑞穂もこれには驚いたのか、目を見開いている。

「当然、登下校の送迎をさせていただくはずだつたのですが、緋那お嬢様は頑なにこれを断りまして」

「だつて私、普通の女子高生のように過ごしたかつたんだもの・・・

」

片瀬がぽつりと呟く。

「はい。緋那お嬢様のお氣持ちは痛いほどよくわかります。しかし、

緋那お嬢様を襲っていたのがもし本物の通り魔だつたなら、殺されていたのかもしませんよ。もしそうなりましたら、旦那様や奥様、たくさん的人が悲しまれます」

狩谷さんは片瀬に微笑む。

「私は、そのことを緋那お嬢様に身をもつて知つてほしかつたので「ございます」

自分の主人としてではなく、自分の孫の身の上を心から案じるような、そんな慈しみが込められた瞳がそこにあつた。

片瀬は狩谷さんの瞳を何秒か見つめた後、ふいと顔を逸らした。

「爺はするい・・・。そんなふうに言われたら私、私のわがまま通せなくなる・・・・・・」

「ほほほ、爺はするいので「ございますよ、緋那お嬢様」

「主人様を襲うなんてどんな気違イジジイかと思つていたが、どうやらそうでもないらしいな。ちゃんと片瀬のこと大切に思つてるのが伝わつてくる。

まあ、だからと云つてトラウマ級の迫真の演技をする爺さんの行動全てが解せるわけではないが・・・。通り魔事件に便乗するなんて、なかなかにズル賢いことしやがる。

俺が一人で狩谷さんの忠誠ぶりと策士ぶりに感心していると、その策士によつて、事態は思わぬ方向に転がりだした。

「しかし、爺とて緋那お嬢様には普通の高校生としてお過ごしした  
だきたい」

狩谷さんが一拍置き、俺を見る。

「ヤーで一つ、私目から霧宮様にお願いがござります

嫌な予感がする。

片瀬は頭の上にクエスチョンマークを浮かべながらも、少し期待の籠つた眼差しで狩谷さんを見つめた。瑞穂は明らかに怪訝な眼差しを狩谷さんに向け、彼が何を言い出すのかじっと持っている。

「な、なんですか・・・?」

俺は恐る恐る尋ねる。たつままで仏のよつて見えた彼の微笑が、今は怖い。

狩谷さんの唇がゆつくりと動いた。

「霧宮様、緋那お嬢様と、一緒に登下校なさっていただけませんか?  
?」

ほつり、俺の感は当たるんだ。

一九四三『巧妙の眼』（後書き）

本格的に勉強がマズくなつてしまつたおもしたの  
最近、瑞穂活躍しませんね。  
狩谷さんは何と無く好きです、

頭を抱えたい気持ちを抑えて狩谷さんの目を直視する。

「あの、聞き間違いかもしれませんのでもう一度お願ひします」

「はい、霧宮様。緋那お嬢様と登下校なさいていただけませんか、と申しました」

ふむ。実質、狩谷さんは俺に片瀬のボディーガードをしろと言っているのか。瑞穂からも頼まれたばかりなのに、なんでこいつも面倒なことが次々と……。

ふと、本当に何と無く隣が気になつた。そつと瑞穂を覗き見る。

思わず寒気がした。

微笑んではいるが、時々口元がピクピクと痙攣している。何故か分からぬがたぶんキレる寸前じゃないのか、これ。なんとしてでも断らなければ。

「狩谷さん、質問してもいいですか？」

俺はこじやかに微笑む執事に向かつて尋ねる。

「どうぞ。それと、私のことは狩谷で結構です

頭の中だけで呼び捨てにされたらひどいとして、ずっと気になつていたことを尋ねた。

「なぜ俺なんでしょう？」

「先日の一件で霧宮様は緋那お嬢様をお助けになりました。私の鬼気迫る演技にも動じることなく、です。私の演技は中々に迫力がありましたと自負していました故、少々驚きました」

ほほほと何だか嬉しそうに笑う。

「また、霧宮様は緋那お嬢様のご友人であられますし、果敢な行動力も然ることながら頭も切れる。これほどの適任者は他には存じ上げません」

狩谷は俺のことなど調査済みなのだろう。

「ははは、過大評価しそぎですよ。俺は・・・正直言つて自分で助けるという判断を下すまで、凄く悩みました。そんな男に大事なご主人様を任せてもいいんですか？それに、俺の方が通り魔なんかより先に片瀬さんをおそつ！！」

瑞穂が無言で脇腹を抓つてきた。

「・・・うことはないと思いますが・・・。片瀬さんのボディーガードを兼ねて頼まれているのであれば、万が一の事態に俺には守りきる自信はありません」

抓られてジンジンと痛むところをさり気なくさすりながら、精一杯の反論を試みる。

白髪の執事は一層笑みを深めた。

「霧宮様、あなたはその時緋那お嬢様を見捨てて、といつ選択肢はお浮かびになられましたか？」

「いや、それは……浮かばなかつたんですけど……」

そんなの当然だろ。田の前でか弱い少女が襲われているのを田撃しどいて逃げるなんて、腰抜けのすることだ。

「最初から“お助けになる”といつ前提でお悩みでしたのなら、私には何も問題が見当たりません」

「・・・・・」

まずい。この老人は初めから「了承」以外の言葉を俺に言わせない氣だ。さつき片瀬が病氣がちである」と俺たちに告白したのも、もし俺が断れば片瀬の自由が少なからず失われるであろうことを仄めかしたのも、俺が断れない状況を作るためだつたのか。

「片瀬さんはどうなんだ？」

話を片瀬に振る。

「私は、その……霧宮君の迷惑になるだらうし……」

片瀬は口もつ、俯いてもじもじと指を絡めている。

「えつと、あの、やつぱり……迷惑、ですか？」

ああ、お願いだからそんな田で見つめないでくれ。

俺だけと一緒に登下校するのが嫌なわけじゃない。もちろん迷惑なんかじゃない。できる限りなら力になりたい。

ただ、ここで断つていないと後悔するような気がするのだ。

右手の人差し指がズキリと痛んだ。

しばらく田をどじて思い悩んだ後、

「全然迷惑じゃないよ。わかった。俺なんかでいいなら、謹んで片瀬さんのお供をさせてもらひ」

言い終わって、隣から息を呑む音が聞こえた気がした。

俺の耳には、片瀬の嬉しそうな笑顔と狩谷の憎たらしい微笑が対照的に映つて見えたのだった。

あの談議の後、片瀬の計らいで俺たちは昼食を頂き、洋館を見学し、さらには夕食までご馳走になつた。わざわざ俺たちを呼びつけたのもお礼と俺の指の怪我のお詫びを兼ねてもてなしたいがためだつたらしい。所々で本物のメイドさんを目視したときは少し感動してしまつた。片瀬も終始楽しそうであつたし、瑞穂も普段と変わらない様子だつた。

そう、「だつた」のだ。

「なあ、瑞穂」

いつかの日のように、満天の星空の下、虫の演奏をBGMに一人で歩く。あの日俺の前を歩いていたのは片瀬だつたが。

「何」

1メートル前を歩く瑞穂がこちらに振り向かずに応える。表情は読み取れないが、雰囲気で瑞穂が不機嫌なのが分かる。だてに長年苦労しているわけではない。

「お前やつぱり怒つてるだろ」

「怒つてない」

「怒つてる」

「怒つてない」

イライラしていることが言葉に乗つて伝わってくる。

「なんで怒つてるんだ?」

「怒つてないって言つてるでしょーーー。」

静かな夜道にその怒声は嫌なほじ響いた。突然の剣幕に少し気圧される。

一陣の生暖かい風が頬を掠めた。

「…………すまん」

「なんで謝るのよ」

「片瀬さんとも登下校することになった」

「そんなの知ってるわよ」

「瑞穂との約束もあつたけど、断れなくて。週明けからは二人で登校することになるんだよな」

急に瑞穂が立ち止まり、一いち方に振り返る。

「俺の物言いはやはりふてぶてしかったのだろうか？もう少し言葉を選ぶべきだつたな。」

「そのことだけど、私もういいから。明日からは一人で仲良く登校して」

“仲良く”にアクセントが置かれたことに嫌味を感じる。

「は？何言つてんだよ。瑞穂も一緒になんだろう？さつきだってそういうふうに話が進んだんじゃないのか？」

「秋人だけよ。私は関係ない」

「もしかして、お前片瀬さん嫌いなのか？」

「・・・違つわよ。緋那ちゃんが嫌いなわけないじゃない。秋人も  
私がいないほうがいいでしょ」

いなほうが良いに決まっているが、これでは俺が片瀬を狙つて  
いて瑞穂を邪険にしていると、そう聞こえる。一いち方にそんなつも  
りはないのだから、いい加減癪に障つた。

言い返そうと口を開く。が、「それに」とこつ言葉で出鼻を挫か  
れた。

「秋人といふと、疲れるの」

「なんだよそれ・・・」

瑞穂の声も小さかつたが俺もしゃがれた老婆のよつな声しか出なかつた。

疲れる？ それはこつちの台詞だ。お前といふだけで俺がどんだけ  
神経すり減らしていると思つてんだよ。

こともなげに侮辱していく瑞穂にキレそうになるのを必死に抑え  
る。ここでキレてしまつと後々面倒なことこの上ない。明日香さん  
の手料理がしばらく味わえなくなるのは避けたいからな。それに、  
よくよく考えてみると瑞穂の言つていることはこちらにとつて願つ  
てもないことではないか。それを棒に振るほど、俺も落ちぶれてい  
ない。

俺は老獴な政治家のよつにたつぱりと間を置いてから確認を取つ  
た。

「じゃあ、明日からは朝迎えに行かないし、放課後も待たない。俺は片瀬さんと登校して彼女と帰る。それでいいんだな？」

相手に決定権を譲渡しているように見えて、実際にはYessとしか相手は答えられない。そもそもNoと返つてくるはずもないが、あえて言わせることで自分は決定に従つただけの立場になる。これは弁解の際に有利だ。どこかの執事ではないが、俺も相當に狡猾らしい。

瑞穂はそれを聞いて苦虫を噛み潰したような顔をするが、すぐにきつと睨み返してきて、「ええ」とだけ答えた。両手は白くなるほどに固く握られている。

相当頭にきてるようだが、こいつはだって意地がある。下手に出る気は毛頭ない。

ハブとマングースのように数秒睨み合つた後、瑞穂はさつと身を翻し、足早に歩き去ってしまった。

俺はどうも帰る気にはなれず、その場に立ち廻くした。はた傍から見れば彼女に振られて茫然自失としている憐れな男のようであつたが、なぜか動く気にはなれなかつた。

瑞穂の背中が完全に見えなくなつて考える。

自分は何か間違つたことをしたのだろうか。何が彼女の気に障つたのだろうか。

自問を繰り返すが、答えは決まって闇の中だつた。

何かあるとすぐにこうだ。あいつは普通に過ごす俺に喧嘩を吹ふかけてくる。喧嘩を買う俺も子供だが、彼女は俺にとつて不俱戴天の敵も同じなのだ。決して共存できない敵同士。ハブとマングースのようにいがみ合い、牙を向ける。不毛なことと笑われるかもしれないが、それでも俺にもちっぽけなプライドがある。俺が悪くもないのに謝るなんて不条理すぎるじゃないか。

ああああーつ！ケソツ！－

乱暴に頭を搔き鳴る。それでも、別れ際に一瞬だけ見えた瑞穂の哀しげな瞳の色が、頭にこびり付いて離れなかつた。

ここ数年、誰にも見送られることのなくなった玄関で靴に足を通す。いつてきますと一人咳き、ドアノブを握つた。

翌日。

朝のまだひんやりとした空気をめい一杯肺に押し込む。ちよつとばかり一酸化炭素の量が増えたそれをいつきに吐き出し、空を見上げた。梅雨明けの夏の晴天が広がっていたが、それが俺の心をますます陰鬱にさせた。スカイブルーとは似ても似つかないブルーな気持ちが充満する。

玄関の鍵を閉めて歩き出す。と、学校とは反対方向に自然と向きかけた足を慌てて踏みど始めた。つま先が向いた先は綾崎家の玄関。

朝、綾崎家のインターホンを押す。そんなことここ最近になつて、しかも片手で数えられる程度でしかないのに、知らず知らずのうちには習慣づいていたのか。そのことに内心驚く。

瑞穂の部屋の窓を見上げると、カーテンがかけられていて、残念ながら中の様子を窺うことは叶わなかつた。たぶんまだ夢の中なのだろう。

ケータイを開き、今から向こうと/or瀬にメールで告げる。

「行くか」

誰に言つてもなく、ただ独り言をポツリと呟くと、踵を返して待ち合せ場所の田向公園に急いだ。

本つづりに遅れてすみませんでした。約一月ぶりの更新です。はつきり言って行き詰つていました、はい。プロットは当然白紙。そもそもこの「陽だまり」自体、勢いだけで書いていた作品なんですね！・・・最悪ですね。

勢いを失った今、グダグダ長引かせるか佳境に入るか、それが問題です。

また、申し訳なくて頭が上げられないのですが、2月中の更新はできないやもしれません。

最後に、いつもいつも読んでくださつてありがとうございます。今後も感想頂けると嬉しいです。

鬱だ。

自分の腕の中に顔を埋める。<sup>ハマ</sup>しかし、<sup>まぶた</sup>瞼を閉じても頭の中でリフレインされる映像は消えることはなかった。

秋人といふと、疲れるの

何故あんなことを言つてしまつたのだらう。

心とは裏腹に口をついて出た言葉は酷いものだつた。高鳴る心音を抑え付けるのに必死だし、服装や髪形に気をつけるもの一苦労なので、"疲れる"というのはあながち間違いでもないが、それは幸福感の端っこにある心地よい疲労感だ。そのような気苦労は、決して秋人と一緒にいたくないために生じるものではない。

でも、秋人は少なからず不愉快な思いをしただらう。

あのときの彼の顔が鮮明に浮かび上がる。雷を浴びたような衝撃を受けて驚愕した表情。

そして、その中にはほんの少しだけ垣間見た淋しそうな顔。

瞼の裏側に刻み込まれたそれを反芻するたび、後悔と自責の念とが一緒にになつて押し寄せる。

いまさら後悔しても仕方のことなのだが、嘆かずにはいられない。後の祭りとはよく言つたものだ。

「ぐはあ～…………」

堪え性もなく、声とも溜息ともつかない音がだらしなく漏れた。

「…………すほ…………瑞穂つてばー！」

突然、ペチッとおでこを指で弾かれた。

「あいたつ…………なによ」

自分がへばり付いている机の前に立つノッポの友人は、腰に手を当てて私を見下ろしている。

額を押されて批難がましい視線を送るが、それは相手の睨みによつて相殺された。

「なによう、じゃないわよつーあんた今何時だと思つてんのよ

教室の時計をひらりと覗く。

「…………時計ひとつ前」

今度はおでこを押されてくる手の甲を指で弾かれた。

「痛つー。」

手の甲をさする。

「私はそんなこと聞いてるんじゃないのーな、ん、で、お皿過ぎて

からあんたが登校してきたか聞いてるの」

親友はまるで自分が担任だというように般若の形相で私をねめつけてくる。胸中で思わず震え上がるが、そんなことは臆面にも出さず身体を起こして椅子に座りなおした。

「体調が悪かつたんだもの」

さも歯牙にも掛けていないというフリをして切り返したが、親友はなおも疑わしげに顔を覗き込んでくる。

「ふうん・・・ああそう。瑞穂は体調が悪くてそれで遅刻したのね」

私は「ぐぐぐ」と何度もうなづく。

「どうが悪いの？ 頭？」

「おなかよ」

友人の軽口が癪に障つたが、それが有紗なのだと割り切つてさらりと受け流す。

有紗はそんな私をじっと見つめていたが不意に視線を教室の入り口に移し、一言。

「あ、秋人っち

ガタツ！」

跳ね上がった膝が机に勢いよくぶつかった。痛みに顔が歪む。

どうして秋人がここに？謝りに来たのだろうか。いや、そんなことは絶対にあるはずがない。理不尽な振る舞いをしたのは私だ。では何故ここに？

急激に上昇を始めた心拍数は跳ね上がったままだ。ドクドクと忙せわしく音を立てている。

恐る恐る有紗の視線の先を辿る。

いない

ほつとしたような、少し残念のような何とも言いがたい気持ちになる。そこでこれが嘘だとようやく気付き、上目遣いに有紗を睨んだ。

「・・・と、思つたら別の人だった」

人の心を弄ぶ友人は、嫌いな友達の悪戯現場を偶然目撃した子供ののような嗜虐的な笑みを口元に浮かべている。

やられた

私は思わず苦虫を噛み潰したような顔になってしまった。

「瑞穂は嘘がつけないんだから、最初から無駄な努力はしないほうがいいよ。あんたの心は古今東西、 Bieber 秋人っちに専有されてるんだから」

「そんなことないわよ」

明らかに不機嫌な声音で答えると、有紗は口元をこやつと舌を上げる。

「あ～～、じゃあ今向こお歯みになつていいの?」

「それは・・・」

言葉が出てこない。どうやら防戦一方だつたこのやり取りは、有紗の完全勝利に終わつたようだ。

「わかつたわよーわかつたからこの話は後にし

有紗は言質を取ると、満足したようにうとうと頷いた。

どの道私はこの友人に相談していただろうし、結局は今認めるのも後になつて打ち明けるのも同じことなのだが、なぜか今認めるのは悔しい氣がした。

いつか覚えてろ。

私は胸中で静かに鬪志を燃やすのだった。

「霧宮君」

正面には肩を落とし不安そうな顔をした同級生。

「ん?」

どうしたんだといふ気遣いを込めて聞き返す。

「あの、さつきからぼーっとしてこるよりですけど・・・その、つまりませんか」

指摘されて、初めて自分が呆けていたことに気付く。慌ててそんなことないと手を振り取り繕うと、気弱そうな少女はほつとしたような笑顔を浮かべた。

今は昼休み。俺と片瀬は屋上で弁当を広げている。片瀬と一緒に弁当を食べる約束をしていたのだ。

それが何故屋上なのかといふと、今まで接点がなかつた二人が教室や食堂で弁当を広げた場合、好奇の視線を浴びる恰好の的になるだろうからだ。そうなつてみると、次の瞬間わんさかと群がつてきた無遠慮なクラスメイトの質問攻めに合つ。俺の受け答えいかんによつては、我が校のプリンセスとのあらぬ噂が立つていて俺の立場はあつという間に消え失せ、俺は行き場を失う。それだけは絶対に避けたかったのだ。

だからこそ必然的に、人気のない、それも片瀬しか入ることのできない屋上を選んだわけだ。

田代の行いが良いのか、本日の天候は晴れ。入道雲がゆつたりと真っ青で広大なプールを泳いでいる。

俺たちは夏の日差しを避け日陰に腰を下ろして居るが、日本の夏はそれでも少し暑すぎる。

額を伝つ汗をワイヤーシャツの裾で拭う。

「やつぱり、少し暑いな

まいつたと笑みを浮かべ、傍らに置いたペットボトルをあおる。

「そうですね。ちょっと暑いですね」

幾分か気のない返事が返つてきた。視線もやや下がり気味だ。気にはかかつたが、あえて尋ねるようなことはしなかった。

くだら件の事故により右手が使えないの、左手にフォークを持ち卵焼きを刺す。それを口元に運び口に入れようとつとつところで、ぴたりと行動を止めた。

「ビ、ビッた？」

「気にしないでください」

「そう言われても……。

気になるのだから仕様がない。片瀬の瞳は弁当箱から俺の口に運ばれる卵焼きを一心に追つていた。おまけに彼女の表情は鬼気迫るものがあるのだ。これで気にするなどいふほつが無理な注文だ。

「まあ早く食べてください」

ま、まづく俺に痺れをきたしたよつた片瀬が催促する。

俺は片瀬から皿を逸らし、口に入れた。

もぐもぐと頸<sup>あ</sup>を動かす。効き過ぎた塩つけが口に広がる。それに少し焦げているようだ。食べれなくもないが、美味しいといつわけでもない。

つまり、まあ、あれだ。微妙、ってやつだ。

「・・・お味はどうですか？」

片瀬は俺の表情を窺いながら恐々と尋ねてくる。じじで片瀬の気にしていることがやつと分かった。

今日は一緒に昼飯を食べると言つたが、二つの弁当を用意したのは片瀬だ。普段なら俺も気分次第で弁当を持参するが、生憎と利き腕が使えないで料理は無理だ。コンビニに寄つてパンでも買おうと思っていたが、片瀬はそのことを予想し弁当を作ってくれたのだ。このような、いかにも女の子らしいことをしてくれる娘は今まで一人たりともいなかつたため、正直嬉しかつた、のだが・・・。

しかし、困つた。

真剣に味を聞いてくるのは片瀬お手製の証拠。そして指に巻いてある無数の絆創膏・・・。深窓の令嬢である片瀬のことだ。きっと料理など数えるほどしかしてないのだろう。それでもしたたかにキツチンに立つ片瀬の後ろ姿を想像すると、その健気さに涙したくなる。

さあ、なんて答えるべきなのだろうか。しかし、弁当箱に詰めてあるのは片瀬も同じもの。嘘をつけばたちどころにばれてしまう。かといって正直に感想を言つていいのだろうか。それはそれで自分が丹精込めて作った料理が否定されたみたいで傷つくものだ。

「霧宮君・・・ショージきに答えてください」

一種の緊張感が包み込む。迷う。迷うが、俺は意を決して口を開いた。

「ん」・・・・・

片瀬の期待と不安が入り混じった瞳が俺を見つめる。

「50点」

途端、片瀬ががっくりとうな垂れた。

これでもかなり避けたほうだ。明日香さんの手料理を毎日食べる俺の舌が肥えているのかもしれないが、一人暮らし歴2年になる俺のほうが一流シェフ付きのお嬢様より料理慣れしているのは、火を見るより明らかだ。

「でも」

俺の言葉に、片瀬は俯いた顔から少しだけ瞳を覗かせる。俺は目の前でしょぼくれている片瀬に向かって励ましの言葉をかけた。

「俺のためにわざわざ頑張つてくれたんだろ？その気持ちだけでも嬉しいよ。料理はこれからうまくなつていけばいいって」

そう言つてからアスパラ巻きを口に放り込んで、にいと微笑む。片瀬の顔がぱあつと明るくなつた。

「そつですね。私、頑張つてお料理上手になります」

小さくガツッポーズをする片瀬の顔はとても晴れやかだ。

それを見て、憂鬱だつた気持ちが少しだけ晴れたよつな気がした。

考え方事は後に回そつ。

今は、滅多にすることができない楽しい昼食に専念しようつと思えた。

フォークに刺した、足が黒いタコをとウインナーをしげしげと見つめる。

料理だけなら瑞穂のほうが上か。

なんだかそれがおかしくて、声を上げずに笑つた。

今日のよき日、旅立つ者は数知れず。でも、自分は果たして卒業であるのか。そんなことを思つてします。  
さて、書き方がだんだんと「口」で「口」でしくなつてゐる今日この頃。 1  
田畠とのスタイルの違いに愕然としました。

## 22日『バッティング』

「あの、のど渇きませんか？」

事の発端はそんな些細な台詞だった。

燐々（さんさん）とこうよじりじりとこつた表現のほうが正しい日差しが容赦なく降り注ぐ中、俺と片瀬は肩を並べて帰路についている。

世界に名を轟かせているコンツェルンの御令嬢の身の安全は、俺のひ弱な双肩にかかるのだが、やはり役不足は否めない。あの老獴な執事が何を考えているのか疑わずにいられない俺の心境も、白すと察することができるというものだ。

しかし、狩谷は狡猾であり怜憫であることを忘れてはいけない。やはり年端もいかない一介の学生などに主人の命を預けはしないだろ？。

もしかすると、黒服に身を包んだいかにも強そうな本物のB.Gが辺りに潜んでいるのかもしれない。

本当にあり得そつで、夏だというのに瞬寒氣を催した。

小さく首を振り、気持ちを切り替えて会話に集中する。

「俺もどこかで涼みたいな」

ワイシャツの胸元をパタパタとさせ風を送る。

「じゃあ、あそこによつて行きましょい」

夏の日差しにも劣らぬ眩しい笑顔だ。少々誇張のし過ぎかもしないが、それでも普段の彼女よりも意気揚々とした様が見受けられる。

片瀬が指差した先は某全国チーンのファミリーレストラン。

狩谷の言つていたことを思い出し、笑顔でそれに頷いた。

俺の大義名分は、片瀬に学生らしげ青春を謳歌してもいいことなのだ。

「いらっしゃいませー」

景気の良い声が明るい店内に響く。

俺は冷たい空気を胸いっぱいに吸い込んだ。灼熱地獄から解放された気分だ。片瀬もほうと溜息をついている。

何組かの客はいるようだが、中はガランとしていて空席が目立つていた。毎時を過ぎた時間帯なのでちょうど一息ついた頃なのだろう。

「一ノ瀬様でよろしくですか」

「はい」と俺。

「では」ひりへじ「あ」

商売用の笑顔を貼り付けたウエイトレスに案内されたのは、道路に面したテーブル席。ガラス越しに見慣れた街並みが見渡せた。

俺たちは向かい合って席に着いた。

「ここに入らうと提案した当の彼女は、なんだか先ほどから落ち着きがない。きょろきょろと店内を見回し、まるで子供のよつた振る舞いだ。

「片瀬さんはやつぱりファミレスとかは来ない？」

「そうですね。あまり来たことはありません」

話しかけられたことで自分の行動に気がついたらしく、恥ずかしそうに笑った。

「へえ、じゃあ外食はいつもどいで？」

「外食にはあまり行かないんですけど……ええっと、ホテルのレストランとか料亭とかで食事会をすることはあります」

「へー……」

聞かなければ良かつたと後悔した。

明日香さんの料理が一番だ、と虚勢は張つても、たまには自分もそつこつ豪華絢爛な食事を楽しみたい。田の前で小首をかしげる少女を素直に羨ましいと思つた。

先ほどウエイトレスがお冷を持って來た。ひと息に飲み干し、外で失つた水分を補給する。

「はいこれ」

「あ、ありがとうございます」

テーブルの隅に立て掛けたメニューボードの一つを丘瀬に渡した。

「さて、なんこすつかなーと……」

もつひとつを広げ、もつひとつを通す。

ハラハラでいいか。

早々に注文する品を決め終える。丘瀬はもつひとつしかかりそつたで、暇つぶしにパラパラと捲つた。

フロート、チラ「サン」ター、あんみつ、三三白玉パフェ……。

見るだけでげっぷが出そつたが、どれもこれもあいつなら喜びやうなスイーツばかりだ。

あいつが口元にアイスをつけて、それでも至福の笑みでスプーン

を握る。絶対に俺にはくれない。横取りしようものなら大惨事だ。見る見るつむにスイーツは減つてゆき、あつという間に完食。そして俺は、空になつた器を見て盛大に溜息をつくのだろう。

そんな光景を思い浮かべて、くつくつと笑つた。

笑つてしまつてから気持ち悪がられないかと思い、片瀬を盗み見る。

しかしそれも杞憂に過ぎず、彼女の顔は肉汁滴るハンバーグの写真の奥に隠れていた。思わずほつと胸を撫で下ろす。

時折唸り声がするので、注文する品がまだ決まらないのだろう。

俺は頬杖を突く。

はたと“あいつ”とは誰のことかと思つた。

言つまでもない、むしろ口に出すのも憚られる暴君のことだ。

そのエゴイストとはつい最近、また喧嘩をした。なんのこととはい。いつもの低レベルな喧嘩だ。

しかし、今回はいつも増して腑に落ちない点があつたのも確かだ。

それに・・・・・。

「君。霧宮君！」

「へ？・・・ああ、」めん。決まりた？

せりなる思考の渦中かがむに引きずり込まれよいつとしたそのとき、片瀬の声で我に返った。

「はい。あの、どうしたんですか？」ぼーっとしてたみたいですが、

「いや、なんでもない。考え方」

なんで俺、瑞穂の事なんか考えていたんだ。今更になつて思った。

「心配事でもあるんですか？」

「別にたいしたことじやないこよ」

神妙な顔つきになる片瀬に笑いかけ、妙な空気を払拭するために店員を呼びつけた。

「俺、マーク」

「はい、マークがおーつ」

「えつと、マークスチョウ「ジャンボパフェお願いします」

なんだその凶悪な名前は。

「はい、マークスチョウ「ジャンボパフェがおーつ」

だからなんだその凶悪な名前は。

「以上でよいじこですか？」

「はい」

店員は一礼しあつて行く。俺は不安に駆られ、メニュー表に目を通した。

あつた。デカい。なんだこれは。

こよいよ不安も危惧の念へと移りこ始め、片瀬に尋ねた。

「なあ、さつき頼んだの全部食えるの？」

「やつぱつ、無謀すまほしたかね」

無謀だ。やつぱつとやつぱつと叫つた。

「あつ・・・」

「とにかく、俺は助けないからな」

「はい・・・」

飼い主に叱られた子犬のよつこじゅんとなる。その様に胸打たれるものがあつたが、ぐつと堪えた。もしや誰かのよつこ、片瀬もぺろりと完食するかもしれない。そうなつたら、片瀬というか弱い少女に対する見方を再検討しなければならぬ。

「トライレ行つてぐる」

俺はそつと席を立つ。

そして座った。

「どうしたんですか？」

片瀬が不思議そつに小首を傾げる。

「別に？」

自分でも分かるほどのせいかしない笑みを浮かべた。

「だつて霧宮君、今トイレつて」

「いや、なんでもないんだ。忘れて」

「そうですか・・・。あの、すこし汗ですよ。どかが具合でも悪いんじや」

片瀬の台詞の後半のほうは、ほとんど耳に届かなかつた。いや、右から左へ脳を通らずに突き抜けていったのかも知れない。とにかく、今の俺はそれほどまでに動搖していた。

席を立つた際、見てはならないものを見てしまったのだ。思わず目を疑つた。

それは、妻の浮氣現場でも幼児誘拐現場でもない。いく普通の、他人から見たらなんの変哲もない日常風景の一部。

そんな風景に混じつて“あいつ”がいた。

22日目『バッティング』（後書き）

祝 50万アクセス突破！！

これが書きたいために夜中の2時までかかって仕上げました。なんとわかりやすい性格なんでしょう。自分でも溜息をつきたくなります。

はい、そんなこんなで私の小説も大台に乗りました。ありがとうございます。

今後もなにとぞ、なにとぞ、ご贔屓に。

少し茶色がかつた長い髪が時折揺らめく。その都度、俺の心臓も跳ね上がつた。

振り向くな。

そう願うことしかでず、焦燥だけが募つた。

俺をこんなにも動搖させるあいつ、つまり瑞穂は、彼女の親友の有紗先輩とここからかなり離れた席に座つてゐる。幸いにも瑞穂はこちらに背を向けていて、俺と片瀬の存在に気付いていない。俺も立つて初めて一人の存在に気付いたのだから、そうそう見つかるものでもない。有紗先輩もおそらく気付いていないだろう。

なぜいつも運悪くバッティングしてしまつたのか、そんなことはどうでもよかつた。ただ、この危機的状況を開拓する一手を考えなければならない。

もし見つかってしまったらいどうなるのだろう。

・・・・・少なくとも気まずくなる。

あの夜から何だかんだいって顔を合わせていない。俺は先般の教訓を活かし綾崎家で夕食をとつてゐるが、示し合わせたかのように決まって瑞穂の姿はなかつた。明日香さんは「困った子たちね」と笑つて流してくれたが、この状況が続くのはいさか芳しくない。

俺は頭を抱えた。

今、瑞穂には会いたくない。

喧嘩しているからとか、気まずいからとか、そういうのではない。ただ純粋に、片瀬と一緒にいるところを見られたくなかった。

そんな感情がなぜ生まれるのか自分でもよくわからない。

しかし、瑞穂を邪魔者扱いしていると思われたくないのだと、勝手に結論付けた。

ふと、頭の先からからいぶかしむ声がかけられた。

「霧笛君やつぱつおかしいです」

抱えている頭を上げ、難しい顔をした片瀬を上目遣いで見やる。

「そう?」

片瀬は力強く頷く。

「はい。だつてさつきは物憂げな顔で考え方をしていましたし、今だつて頭を抱えていますし。本当はなにか、大切な用事があつたんじゃないですか?」

俺は慌てて首を横に振った。

「ないよ、ないない。今日は帰つてからも暇だつて。それに私用があつたらちゃんと会つから」

「嘘は言つていない。事実、帰宅すれば暇を持て余すだけなのだが

「本当にですか？」

「本当本当。日本人ウソつかない」

片瀬はまだ俺の言葉を信じ切れていないといふような表情で見つめている。

片瀬が俺の身の上を案じてくれるのは嬉しいが、少々憂慮に過ぎるよつだ。そのことに彼女は気付いていないし、心配性が悪いことでもないので、もちろん指摘するつもりはない。

それに可愛い子に心配されることが男冥利に尽きるのはどうしたつて否めないだろう。自分だけを心配してくれるわけではないだろうが、それでも嬉しいものは嬉しい。

自然と口元がほころぶ。

しかし、喜悦が先行していた感情に暗雲が垂れ込め、やがて陰鬱な雨が心に水溜りを作るのは大して時間がかからなかつた。

片瀬が肩を落とし、口を開く。

「それになんだか、今日の霧宮君全然楽しそうじゃないです」

「えつ」

思わず言葉に詰まってしまった。

まさか片瀬からそんなことを言われるとは思つていなかつたからだ。いや、それが図星だつたからかもしれない。しかし、この切羽詰つた状況を愈しめる者などいるのだろうか。いふとしたらそれは肝つ玉の据わつた大物で、俺は大物ではない。

「」のよつて自分に対し言ひ訳してみるが、全く意味の無いことだつた。

図らはずとも閉口してしまつた口を何度か開くが、いかんせん言葉が出てこない。

片瀬も俯いたまま口を噤んでいる。

すぐにでも否定したかつたが、果たしてその言葉を信じてもらえるかどうかは疑わしい。かといって本音を言つわけにもいなかつた。

そもそも片瀬は、俺と瑞穂が喧嘩していることを知らない。もしかしたら不仲であることにも気付いていないかもしね。そんな人に瑞穂がいるから楽しめるものも楽しめないと言つたら混乱してしまうだろう。

まさしく八方塞がりだつた。

そんなとき、

「やーやー君たち、奇遇だねえ」

聞いたことがある軽い調子の声が沈黙を破つた。

振り向くとそこには片手を上げて一ヤつゝ有紗先輩と、その後ろに顔を背けて立っている瑞穂がいた。

軽く泣きたくなつた。

「ほんと奇遇ですね。ところで先輩たちはなんでここに？」

上手く苦笑を隠せたかは甚だ疑問である。  
〔はなは〕

「いや～、健全な女子高生だもん。寄り道は当然じゃない？秋人つちたちもその例に漏れないでしょ」

正面からの白々しい台詞。

「まあそうですが……。でもわざわざ席を移動することもないでしょ？」

「あれ？秋人つちは私たちがあつちの席に座つてたこと知つてたんだ？」

しまつたと思うが後の祭りだ。有紗先輩は一ヤ一ヤと意地の悪い笑みを浮かべている。

俺はより猜疑心を募らせ、顔をしかめた。  
〔あく〕

一人の登場により席順が変わり、俺は窓際、俺の隣に片瀬が移り、俺の正面に有紗先輩、その隣に瑞穂が座っている。片瀬は見知らぬ先輩の介入で戸惑いの表情を露にし、瑞穂はさつきから俯いて彼女らしからぬ行動をとっている。

異様に喉が渴いて、先ほど届いたコーラに口をつけた。

「で、そつちで縮こまってる彼女さんの紹介はまだ?」

軽く咽る。鼻に少し入り炭酸がつんと沁みた。

「げほっ、えほっ・・・・・・と、友達の片瀬さんです。先輩わかつてて言つてるでしょ」

軽くねめつけるが、全く意に介する様子もない。

有紗先輩は片瀬に向き直り自己紹介をした。終わりに「よろしくね」と言われたところで片瀬も慌てて、「片瀬紹那です。よろしくお願いします」とやや堅めに返事をした。

俺は有紗先輩の真意を確かめるためさつきの質問の答えを促した。

「で、俺たちに何か用事でもあるんですか?」

「用事がなくちゃダメ? それとも」

ちらりと片瀬に視線を移す。

「お邪魔だつたかな?」

「そんなことはないですか？」

「いいよ！」もてあわ「弄なばれていのはざう見たても明あらかだ。何なんだこの先輩は。瑞穂以上に扱あいに困こる。

俺が腕を組んであからさまに仏頂ぼつとう面めんをすると、さすがの有紗先輩も悪びれたのか、はたまた揶揄やゆすることに飽きたのか笑いながらこう話しだした。

「あつはつはつは、『めん』『めん』。実はね、恋愛相談に乗つてもらおうかと思つてね」

「れんあい、そだん・・・・・・・？」

「そつ、恋愛相談」

「誰が誰に」

「私が秋人あきひとつちに。瑞穂みずほじや頼りにならなくて」

瑞穂に視線を移すと、お冷ひやをぽんやりと傾けていた。片瀬も所在無げにしている。

この妙な空氣を機敏に汲み取った俺は片瀬に話を振った。

「でも、じつは女子同士のほうが・・・・・。片瀬さんだつてそうだろ？」

「えつ！？あ、あああの、えと、どうなんでしょう・・・・・・・・・・・・

まさか自分に話が振られるとは思っていなかつたらしく、あやふやな答えを返された。

「まあまあ、ちょっとだけ聞いてやってよ。きっと秋人っつのためにもなるからさあ」

俺は有紗先輩の言葉に頷くしかなかつた。

「じゃあ、注文が揃つたら真剣に聞いてね」

有紗先輩はしたり顔でうんうんと頷いていた。

やがてウエイトレスが注文の品を運んできた。手には異彩際立つ様相を呈しているスイーツが二つ。

「ふたつ?」

思わず呟いた後、机に置かれたそれを見て妙に納得した。

「なによ」

余程顔に顯著に現れていたのだろうか、目が合つた瑞穂が頬を膨らませて俺を睨んできた。

「別に」

実際に久しく聞いていなかつた彼女の声は驚くほどニヒルで、でもいつものあいつの声で、なんとなくそれがおかしくて笑つてしまつた。

その顔が瑞穂の目にどう映つたのかはわからないが、彼女はふんと顔を逸らした。

23日㈮『企みと笑み』（後編）

意気揚々と雪山に出かけていたはいがボードのやつ過ぎで全身筋肉痛の昨今。

遊びにかまけ、揚句の果て布団の中で腰痛と戦つ私との間にならな  
い日々精進しましょ'。

打ち明けるんじゃなかつた。

肘を突き、その上に顎を乗せている上機嫌の友人を見てそう思つた。

正面に座る彼女とは対照的に、陰鬱な面持ちで嘆息する。

そもそも後を付けるとのたまつた時点で断るべきだつたのだ。否、断つたのだが「大丈夫よ。それに瑞穂だつてライバルの動向は気になるんじやないの？あの娘、かわいい顔して秋人っちの貞操食べちゃうかもよ」なんて有紗の煽り文句にまんまと乗せられてしまつたのだつた。

自分でも馬鹿だと思つ。嘆かわし過ぎて救えない阿呆だ。しかしこればかりはどいつしたつて抗える衝動ではない。

有紗の視線の先にはどんな表情で向かい合つ二人がいるのだろう。

困つた顔をしているのか。笑いあつてているのか。それとも照れているのだろうか。

振り向きたい欲求を抑え、机の下で拳をぎゅっと握つた。

数日前の教室で有紗の口車にうまいこと乗せられた自分の愚かさを、今になつて痛感する。こんなことになるなら打ち明けず、一人で悶々と過ごしていたほうがマシだつた。

「ねえ、いつまでこんなストーカーまがいのことしなくちゃいけないのよ」

私はこの厭然としない気持ちを声音に乗せて有紗をきつと睨みつける。

「んー？ 知らなーい」

私の憤りを知つてか知らずか、有紗は無責任な態度でアイスコーヒーをすすつた。

私はどんと机を叩く。

「ちよつとーふざけてるんなら帰るわよー！」

有紗はストローから口を離し、にこりと笑う。

「まあ待ちなさいって。これから合流するんだから」

「合流つて・・・まさか、秋人と！？」

「そうに決まつてんじやない。なに当たり前のこと言つてんのよ」

それを聞いた私は顔面蒼白になり、有紗がくすくすと笑う。

「瑞穂は何も心配しなくていいの。ただ黙々とパフェを食べててね」

有紗に言われてさつき特大のパフェを頼んだことを思い出す。あちらに移るということはそれも一人の前に運ばれると同義だ。秋人の前だけならともかく、緋那ちゃんの前で食い意地を張るのは羞恥

心が許さなかつた。

「『せつひとつたい、いやーー私』から動かないからね」

腕を組み、ふんつとせつぽを向いて不動の構えを見せる。

「」で引いたら今度こそ有紗にレッテルを貼られてしまつ。 「扱いやすい女」と書かれたレッテルを。 そのような不名誉極まりない授与式は何としても避けねばならない。

動かざれり」と云の如し、当面の間私は見ざる聞かざる思はざるを貫く心意氣である。

「あ、すみません。これからあつちの席に移つても・・・・・・はい・・・・・・はい」

『せつひとつとして田を開くと、有紗は店員と交渉し終えたといつだつた。

店員が去つていく。

その後姿が遠ざかるにつれて景色も灰色に変わつていく。

私は母親に置いていかれた赤子の気持ちがわかつたような気がした。

たぶんこんな気持ちだ。

「あ・・・・ああ・・・・・・」

「ほりつ、なに呆けてんの。早く行くわよ」

有紗は飲みかけのアイスコーヒーを片手に立ち上がる。無情にも告げられたその言葉には幾ばくの譲歩も含まれていない。

軽く泣きたくなつた。

十数分後。

私は上機嫌の一歩手前くらいには機嫌が良くなつていた。

「別に」

そう言つた彼の顔は笑つていた。私はついいつもの癖で顔を背けてしまう。惚れた弱みなのかもしれないが、秋人の笑顔にきゅつと胸が締め付けられるのだ。

それと同時にほつとしてともいた。

秋人は怒つてない。

こんなことなら変に逃げ隠れせずに夕食を共にしていればよかつたと思つ。

いつの間にか有紗への怒りは感謝の念に変わつてゐるのだが、彼

女には黙つていよつ。また着け込まれること必至だ。

「あの、綾崎先輩？」

緋那ちゃんが控えめに声をかけてきた。せつにえは挨拶もまだつた気がする。

「なに？」

「先輩も同じものを頼んでいたんですね」

緋那ちゃんは口元に手を当てて笑っている。

私は机の上に並んだ二つのパフュームを一瞥してから、

「ほんと偶然ね。それにしても、緋那ちゃんは食べられるの？」

緋那ちゃんも頼んでいたとは……。心底意外だ。

「それ、霧宮君にも言わされました。実物見て失敗したなって思つてます」

「へへと恥ずかしそうに笑う緋那ちゃんは思わず抱きしめたくな  
るほど可愛い。女の私でさえそう思うのだから、秋人がどう思つて  
いるのかなんて声に出さずとも明らかだ。

さつ氣なく息をつく。

「ま、残しても問題ないから」

横合いから秋人が口を挟んだ。

「あれ？でもさっき俺は助けないって……」

「事情が変わった。というか」

秋人はちらりと私を一瞥し、

「早く食べないとなくなるよ、それ」

秋人の言わんとしていることがわからない緋那ちゃんは首を傾げている。

私は秋人を睨みつけた。が、当の本人はそ知らぬ顔でグラスを煽つている。

緋那ちゃんはますます首を傾げる。

「まあまあ。緋那ちゃん、この子たちなりの「ミミコニケーション」なのよ。あんまり気にしないで流していいから。瑞穂も秋人つちも仲がいいのはわかつたから、とりあえず私の話を聞いて」

呆れた表情で有紗が仲裁に入った。さり気なく話を掏り替える辺りは流石だ。当然いたずら心も忘れない。

私は反抗しようとして敷蛇になることを悟り、寸でのところで口を閉ざした。秋人も言い返そうとしないあたり、有紗に対する接し方を学んだらしい。

「有紗先輩、相談のほうは？」

秋人が話を促し、有紗は多少高揚した口調で話し始めた。

「うん。相手はね、すつごい鈍感な奴でさあ、いつまで経っても私の気持ちに気付いてくれないの。ねえ、どうしたらいい？」

「どうしたらって……。えっと、さっぱりわかりませんけど、もつとアピールすればいいんじゃ」

「これでもかってくらいしてるって。それに、私ってうぶでしょ？ 思い切った行動とかできないし」

「うぶ……」

「何か言つた？」

「いえ、何も」

有紗の笑顔に秋人も引きつった笑顔を返す。

「とにかく、男子の気を引くためにはどうしたらいいか、男の子である秋人つちにご教授願いたいのよ」

「気を引くって言つても、どんな人だか知らないし」

「あはは、確かにそうね。趣味は……」

秋人は有紗の話を相も変わらず眞面目に聞いているが、聞けば聞くほど怪しく思えてきた。同時に、段々と嫌な汗が吹き出でくるのを感じた。正直気が気でない。

私はパフェをつつきながら有紗を横目で観察する。

いつもの憎たらしい顔だ。

「俺ですか？俺はまあ、構ってくれないよりは構ってくれるほうが多いんですけど」

これは有紗の「男子つてほつといてほしいのかな？秋人つちはどう？」という質問に対する秋人の答えただ。

「でしょでしょ！やつぱり積極的なほつがいいわよね！」

有紗は興奮したように身を乗り出す。

まず口調からしておかしかった。普段通りなのだが、所々妙に演技がかつた聲音で秋人の反応を見ながら話している。

それに話の内容に何か陰謀めたものを感じるのだ。どことなく私と秋人の関係と、私に対する秋人の気持ちを探っているように聞こえてしまい、有紗が何か言うたびにひやつとする。このろくでもない友人はいつたい何を考えているのだろう。

有紗の胡散臭い話に対し、秋人は要領を得ないながらも真剣に受け答えしている。緋那ちゃんも時々「そういうのすゞく分かります」などと追従を交えて話題に加わっていた。

三人が微妙に盛り上がっているようにも見えなくもない。

自分がそわそわしているのが、なんだかおもしろくなかつ

た。

そのまま半時ほど男子の思考パターンや、それに順ずる行動、秋人が友人とどんな恋愛話をするかななど、とりとめもない雑話を繰り広げた。

不意に会話が止み、話を振られた秋人が腕を組みしばらく沈思默考する。

「そうだな・・・・・・、やっぱり気持ちはちゃんと言葉にしないと、相手には伝わりません。だから、遠回りするよりも・・・えつと、なんだろう・・・・・・」

上手く言いたいことが言えないでいる秋人が、困ったようにボリボリと頭をかく。

有紗の肩がわずかに震えている。

「ずばつとー・・・・ずばつと?つまり、ええと・・・・・・俺の言いたい事、解ります?」

有紗はとうとう堪え切れなくなつて吹き出した。

「あつははははは、はあー・・・もうダメえ、秋人つちかわいすぎい・・・・・・・・」

ひいひいと息を漏らしながら苦しそうにお腹を押さえている。

当然、私を含めた一同が何事かと豆鉄砲をくらう。

狂つた？

私は狂氣の友人に恐る恐る手を伸ばした。

「ちょっと有紗、あんた大丈夫？」

「大丈夫よお。もう訊きたいことも聞けたし、帰りましょ」

私の手を払い除けると、有紗は秋人に向き直つた。

「秋人っちの言いたいことはちゃんと伝わったから。今日はありがと。そろそろ出よ」

「はあ、まあ先輩がいいならそれで。片瀬さん、帰ろつか」

未だに秋人は怪訝な顔つきをしているが、あえて有紗を問いただす気はないらしい。気持ちは言葉にしないと伝わらないと言つた秋人を有紗はさり気なく皮肉つていいのだが、本人は有紗の質問攻めから抜け出せた開放感で気付いていない。知らぬが仮、という言葉が頭に浮かんだ。

緋那ちゃんも秋人と同じく首を傾げてはいるが、素直に秋人に頷いた。

私たちはそれぞれ違つた感情を抱きながら席を離れる。

もちろん、一つのパフェは私が空にした。

緋那ちゃんを送り届ける秋人と別れたあと、私は隣で鼻歌を歌っている有紗に詰め寄つた。

「ねえ、恋愛相談つて嘘でしょ」

「まあねー」

しつと答える有紗からは「うわづして」というよつな、そんな普段とは違う印象を受けた。いぶかしみつつも、それよりも先に言っておかなければならないことがある。

「秋人の気持ち探つてた」

私はこれ見よがしに不満を呟く。

あれは大きなお世話だった。いくら有紗とはいっていいことと悪いことの分別は守つてもらいたい。そういうのは心の準備を整えてから知るべきなのだ。

「は？ あんた何か勘違いしてない？ 確かに恋愛相談は嘘だけど、私は純粋に男の子のもうもの事情について訊いてたのよ。だから瑞穂は黙つてパフェ食べてなさいって言つたんじゃない」

有紗は鞄を後ろ手に持ち替えると、ややはにかみながら続けた。

「愚弟とのスキンシップのためにね」

「ああ・・・そうか」

私は彼女のその言葉で完全に毒氣を抜かれてしまった。また、これまでの全てのことについて合点がいった。

私に相談しない理由も、相談相手が秋人だということも、

「有紗、楽しそうね・・・」

彼女のテンションが高い訳も。

今日は有紗に付き合わされただけだったのか。彼女にいやらしい作為がなかったことに安心しつつも、秋人と私の仲直りなど二の次だつたことに不満を感じる。

しかし、この友人のことだ。きっと私たちのこともちゃんと視野に入れてくれていたに違いない。違つてはいけない。

結果として色々と好転してくれたのだから、これまでの有紗の私に対する酷い仕打ちは不問にしようと思つたのだつた。

「ふふつ、わかる?」

身体だけが大きくなつてしまつた小学生の瞳を爛々と輝かせて微笑む有紗。

これから弄ばれるだろう弟君に私は大いに同情して、強く生きると心の中で呟いた。

まず、一ヶ月もまつたらかしこじたことを御詫びすると共に、これからも更新が滞るだらうことも御詫びをせんください。本格的に勉強をしないと留ね：考えたくありません。

はい！話は変わりますが、毎回出だしの文句に悩みます。すぐ。

瑞穂は激怒した。

妙に合ひのはなぜでしょう。

変わらない世界などあるはずもなく、俺を取り巻く状況も日々刻々と変化していく。

それは空を漂う雲よりも、道を行きかう雜踏よりも早く、目まぐるしい変化に自分が追いつかなくてほどだ。

そんな中ふと足を止めてみると、何氣ない所作の中にも大切な意味が込められること元気付くことがある。

けれども、たいていの人間は足早に通り過ぎ、そのまま自らが歩んできた道程を振り返るときにはっと気付くことがある。

まさしく今がその時だと思った。

後悔しているかと訊かれたら、たぶんそうではない。

蒸し暑い体育館に詰め込まれて校長のありがたいお話を聞いたのが数日前。ありがたすぎて欠伸が止まらなかつたことだけは覚えている。

それよりもこれから始まる夏の長期休暇で頭がいっぱい、俺はどうすればいかに邪魔されず夏休みを怠惰に楽しめるだろうかと構

想を練つていた。

終業式の帰り道、片瀬はそんな俺にある提案をした。

「あの、夏休みなんですけど、みんなで旅行にいきませんか？」

なんでもそれは片瀬の執事である狩谷の企画で、普段お世話になつておるお礼にとぜひとも招待したいらしい。

招待してくれるのは片瀬家の私有する無人島。詳しくは知らないが暖かい海に浮かぶ島で、それでも一応国内であるらしい。期間は三泊四日。費用は全てあちらが負担するようで、身の回りのものを持参するだけだとか。プラン及びレクリエーションについては、有意義な旅行にするため狩谷に任せてほしいといつことだつた。

俺は二つ返事で了承した。

多少申し訳ない気持ちはあるもののせつかくの夏休み、楽しまなければ損だという自分の欲望にも勝る断らなければならない理由はこれといって見つからなかつたからだ。

「みんな」というからには当然瑞穂や有紗先輩も招待するらしく、それだけでなく誘いたい人がいれば気軽に誘つてくれていいくそだ。

俺はその夜、さつそく司に電話した。

「もしもし同か？あのさ

「嫌だ」

一言目に来るべきではない単語が電話口から聞こえた。まるで俺がこれから何を言つて知つてているような対応で多少面食らつたものの、根気強く誘つとしぶしぶながらも一緒に行くことになった。

なんだかんだといつて結局他人に流される友人は、どことなく俺と同じ匂いがする。決していい意味でないことだけは確かだ。

旅行当日の早朝、俺たちは片瀬邸宅に集合した。

集まつたメンバーは代わり映えのないメンツで、俺と司と有紗先輩と瑞穂。それに片瀬と狩谷を加えた5人での旅路となる。

俺を含めた3人は浮き足立つのを隠せず、ボストンバックを持つ手にも力が入つてゐる。

しかし、司だけは険のある瞳を隠さず機嫌が悪いようだ。

「やつぱり無理に誘つたか？」

俺がさり気なく尋ねると、「ああ」と婉曲もない言葉が返つてきた。強引に誘つてしまつたと思つてはいたが、ここまで不機嫌だとさすがに罪悪感を覚える。

片瀬と狩谷が邸から出てきて俺たちは一人に挨拶すると、さつそく片瀬家の愛用するリムジンへと乗り込んだ。運転手はもちろん狩谷である。

片瀬は終始にこにことしていて口数も多く、本当にこの旅行を楽しみにしていたようだ。

狩谷はといふと、いつもの執事服に身を包み、柔和でいて食えない笑みを湛えていた。

しばらく車に揺られ片瀬家専用の滑走路に辿り着くと、今度はそこにある自家用セスナに搭乗して無人島のある県まで向つた。

そこからクルーザーに乗り継ぎ、半時ほど海原の中を一路進んで行く。

そんなこんなでVIP待遇な旅路をはしゃぎまくつて終えた俺たちは、昼もだいぶ過ぎてから片瀬家の所有する無人島 緋砂島へと辿り着いた。

緋砂島。そこはまさにマーサー王の物語に出てくる幸福和楽の島アバロンのような場所だった。

だからといって林檎の木が辺り一面に生えているわけではないが、学業という日々の疲れ、また人付き合いの辛さによつてできた傷を癒すという意味ではそんな形容も大仰ではないかもしない。

なんといっても無人島だ。ほとんど手の加えられていない自然を満喫できる、そんな機会など一生に何度あるかわからない。

俺はとりあえず、大きく深呼吸をした。

「すうううう……はあああぶつ……」

背中に衝撃が走り、前につんのめった。

「秋人！なにしてんのよつ、無人島よ無人島つー・キャー」

「瑞穂……お前もつ少しテンションさげぶつ……」

立ち直りかけたところにまた衝撃が走り、今度は完全に倒れ込んだ。

「秋人つち！なんて顔してんのつ、陰氣よ陰氣つ！」

「有紗先輩、明らかにワザとでしょ……」

「あ、ばれた？」

有紗先輩は舌をチロリと出すと瑞穂を追いかけていった。

ふざけんな……。

俺は砂浜を走り回っている瑞穂といつもより暴力的な有紗先輩を見て嘆息した。

「あのー、霧宮君大丈夫ですか？」

「うん。ああ、ありがと。……大丈夫じゃないのはあの一人だ。少し注意してくれないか」

上から覗き込んでいる片瀬の手を借りて立ち上ると、俺は一人

を指差した。

「あははは、でも」「うつときは楽しまなきゃダメです。霧宮君もあのくらい元気のほうが多いと思しますよ」

俺は笑つて茶を濁すと心の中で呟いた。

それは同じに呟つてくれ。

クルーザーを振り返り、狩谷と一緒に荷物を下ろしている友人を見て苦笑いした。

司は道中話を振つてもおざなりに答えるだけで、ずっと窓の外を見ていた。何がそんなに面白くないのだらう。つまらないにしても、いつもは他人に合わせるくらいには気を使つていたはずだ。それがまるで子供みたいに不機嫌まるだし。片瀬や狩谷も心配していた。

「よし」

俺はクルーザーが横付けされている桟橋に向つて歩き出した。

「どう行くんですかー？」

だいぶ進んでから俺がいないことに気付いた片瀬が訊いてきた。

「ちょっとあつあつ手伝つてくるー。片瀬さんは休んでー」

後ろから声に歩きながら応える。

そのままではせつかくの旅行が台無しだ。せめて司が不機嫌な理

由だけでも聞こつ。

そう思い、荷物を運んでいた司に声をかけた。

「司、ちょっといいか？」

「ん？ ああ

司は肩に下げていた二つのボストンバッグを砂浜に置くと、俺に向き直った。

「あのせ、お前ずっと不機嫌だろ？」

その言葉に司は顔を蒼くする。

「そんなに俺たちとの旅行が嫌なのか？ せめて訳だけでも教えほしいんだけど」

司は視線を逸らししばらく逡巡した後、

「旅行が嫌なんじゃない。むしろこうこうこうに来るのは好きだ。ただ……」

べつ

司の頭に何かが直撃した。横からの衝撃に頭を傾げたようになる。

よく見るとそれは星型をしており、だけど星とは似ても似つかない海洋生物のヒトテだった。

司は張り付いたそれを摘むと後ろに放り投げた。

「あやはやはやははー今の見たー?べらつ、だつて

嬌声の上がつたほうを見ると有紗先輩が腹を抱えて笑っていた。  
その隣で瑞穂は失笑している。

一方司は握りこぶしを作りわなわなと震えている。

俯いていた顔を上げると彼は叫んだ。

「つざつけんな姉貴!!今まで静かだつたと思えば……。毎回毎回  
ガキみたいなことして恥ずかしくねーのかよー」

「恥ずかしくないもーん。恥ずかしいのは毎回毎回こじんなことでキ  
レの司のまつじやないのー?」

「つーノヤロ……」

司はずんずんと歩いていくと有紗先輩に向つてゲンコツを落とした。

「あいたつ……女の子に向つて向すんのよー」

「女の子?誰が?こんなテケエ女いるか!」

「ひつじ……瑞穂もなんか言つてやつて!」

俺は何がなんだかわからなくて呆然と立ち尽くしていた。瑞穂は  
顔を手で覆つている。

司の台詞を反芻する。

つざつけんな姉貴！！

「…………」

瞬きを数回。

「姉貴い  
！？」

俺の叫び声が一番でかかった。

25回『バケーションは夏の話』（後書き）

今回は特に感想を頂けると嬉しいです。

有紗先輩と司が姉弟であることは当初からの設定で、伏線は今まで色々な所に散りばめきました。名字を出したのはまずかったかなと今では思っています（汗）

「はつ、そんなの気付いてたよ馬鹿作者」でもなんでもいいので、コメントしてくださるとありがたいです。

どのくらい驚いたかといつたら、「驚きのあまり絶句するそれの遙か上空を上回り、軽く近所迷惑な大声を出してしまつくらい」には驚いた。

まさか無愛想な同といだすら好きの有紗先輩が姉弟だつたとは……

幸いここは無人島で、苦情を言いに来るおばさんはいないものの、この島にいる5人全員は俺に怪訝な眼差しをよこした。

「どうしたいつたい」

姉弟喧嘩をやめ、傍に来た司がやや心配混じりの声音で言つ。

「お、お前と有紗先輩が姉弟つて……」

俺がやつとのことでその言葉だけ紡ぎだすと、

なんだ、知らなかつたのか？」

司はほんとした表情を浮かべた。

- 1 -

俺は今度こそ絶句する。

知らなかつたさ。知るわけがない。

第一司に姉がいたことすら知らない。今まで有紗先輩の話題を司の前で何度も出しているのだから、さすがにこれはないと思つていた。司のスルースキルも、まさかここまでとは……。

それに俺は有紗先輩の名字を知らなかつた。これは単純に俺の失礼さと怠惰が招いた失態だが、例え知つていたとしても、名字が同じという理由だけでこの両極端な一人に血の繋がりを感じることは、まずなかつただろう。

俺はこの言い知れぬ妙な驚きと、無愛想すぎる友人に対する憤りをどこにぶつけたらいいかわからず、駆け寄つてきた片瀬に勢いのままに訊いた。

「片瀬さん、司と有紗先輩が姉弟だつたつて知つてた？」

片瀬はぱちぱちと数回瞬きしたあと、首を傾げた。

「どうか、片瀬も知らなかつたか。いくらか救われた気持ちでそう思つたとき、

「ええつと、はい。瑞穂先輩と有紗先輩から聞いていたので知つてましたけど」

「あ……ああ、そう。そつだよな、はは」

「どうやら俺だけが仲間はずれらしい。」

緋砂島はリング「口」をかじつて芯だけが残つたような、ちよび島の東側と西側が窪んだ形をしている。全長としては南北に約1キロ、東西に約0・6キロくらいなので、それほど大きくはない縦長の島だ。

俺たちが上陸したのはその東側にあたる海岸で、純白の石灰岩でできた緋砂島の砂浜が特徴的である。

船着場である木造の桟橋から南に50メートルほど行った所に、今回泊まることになっている片瀬家の別荘<sup>じんせう</sup>が建立されており、それよりもっと南側には岩礁<sup>いわせ</sup>がいくつか突き出て見える。

反対に北側を覗いてみると、何もない真っ白な砂地が島の最北端まで続いている。

ホワイトパールの砂浜が終わる内陸部には南国の森林が鬱蒼と茂つており、時折聞き慣れない鳥類の鳴き声が聞こえてくる。

俺たちはまず荷物を整理するため、片瀬家の別荘に荷物を運ぶことにした。

ボストンバッグを片手に振り返ると、桟橋に今乗ってきたばかりのクルーザーが横付けされて、波に合わせて揺らいでいた。

「俺たちだけか」

「Jの島にいるのが5人だけだと思つと少し心細くなつて、ついそ

んなことを呟いてしまった。

「なあに秋人？もうホームシック？」

地獄耳なのか、同じく重そうなカバンをひとつさげて歩いている瑞穂がにやつと笑う。

「ばつ、違う！」

「何が違うのよ。急に一人で、俺たちだけか、なんて呟いたくせに」「俺は別にそういうことを考えてたわけじゃないってーいざつてときに5人だと心配だる。ほら、台風とか来たら島から出られないわけだし」

我が家が恋しいとは思つていないが、心細いと感じたことは事実なので上手く反論できない。思わず声を荒げてしまったことで、瑞穂の猜疑心をより募らせてしまった。

「台風？ないない。こんなに晴れてるのに来ると思つ？」

瑞穂は馬鹿にしたよつに笑つてから雲ひとつない空を仰ぐ。

「それに天気予報だつて一週間晴れマークだつたじゃない。秋人つてやつぱり心配性つていつか、小心者」

「だまれ……」

「ま、何かあつたらこの私が守つてあげるわよつ。」

瑞穂は肩で俺の二の腕辺りにタックルすると、にひひと無邪気に笑う。

俺は舌打ちをして顔を背けた。

男が女に守つてもらつなんて言語道断。屈辱以外の何者でもない。これではまるで俺が女子に守つてもらわなければ何もできないチキン野郎ではないか。か弱い男子を宣言したわけではないし、人並みの勇気は持ち合わせているつもりなので、正直これはムカツときた。

だから、

「誰が誰を守るって？」この前私を守つて言って言ったのはどிのどーつだ？」

「うう……」

瑞穂がわざかに仰け反る。俺はにやりと口角を上げ、一気に畳み掛ける。

「守つてつてことは心細かつたんだよな？おまえだつたら通り魔なんてのしちゃいやうなのに。チキンハートはどつちだ、おこ小心者」

「う、うるさいわね！いちいち揚げ足とんないでよー。私だつて女子なんだから怖いの当たり前じやない」

「女の子？誰が？こんな傍若無人が女の子つて言えるか！」

「ひつど……私だつて列記とした女なんだからね！もうー。有紗もなんか言つてやつてー！」

瑞穂は振り向くと、後ろを歩いていた有紗先輩に援軍を求めた。

「おまつ、卑怯だぞ！」

俺も釣られて振り向くと、有紗先輩の横で司が顔を覆っている。

「ん？ どうした司？」

司は俺と目を合わせないでぼそぼそと呟く。

「いや、俺たちついつい風に見えてたんだなって……ショックだ」

「は？」

司の言つている意味が解らない。俺も瑞穂も毒氣を抜かれて顔を見合せた。

有紗先輩が満面の笑顔で一言。

「私たちついついだね」

しばらくの間を空けてから、俺と瑞穂は豆鉄砲を食ひつたようハトのよじこ馬鹿面をげてハモる。

「あ」

少し前の姉弟喧嘩を今更ながら思い出した。あれほど幼稚な言い争いだと思っていたのに自分たちも同レベルのことをしていたのか

と愚つと、なんだかすゞく居た堪れない。

俺たちはとたんに恥ずかしくなり、黙つて砂浜を歩き出した。

実際に2ヶ月ぶりの更新。小説ほつたらかしにするのもいい加減にしろよと言いたくなりますが、忙しかったんですね。考查、修学旅行、部活動、etc. . .

とにかく小説に回す時間がありませんでした。読者の方々にはすごく申し訳なくて、このサイトも開くのが怖かったです。はい言い訳終了。

これだけ書いてないと、久しぶりに書いたときに違和感ありまくりです。この話、なんだかどことなく変かもしだせんがその寛大な心で許してやってください。

あ、応援してくれる方々、いつもいつもありがとうございます。次の更新……頑張ります。

## 27日田田『キス』

さて、片瀬家の別荘であるが、いささか別荘にしては大きかった。日本の平均的な一軒家と比べると敷地面積だけでも数倍はある。

外観の大部分は清々しい白で統一されてあるが、張り出たウッドデッキはニス塗りだけにどどめてある。それによつて、木目が温かい風合いを醸し出していた。そこには田形のテーブルとそれに付属する椅子が数脚置かれている。オープンカフェさながらだ。

それだけではない。内装もやはりすごかつた。

玄関から入ると、まず吹き抜けの高い天井が目に留まる。埋め込み式の出窓から差し込む光が、健康的な明るさで屋内全体を包み込んでいる。

階段を上るとロフトにつながつていて、そこから奥に行くと、いくつか来客用の部屋があるそうだ。また、ふとした所にアンティークや調度品がぽつぽつと置かれているのも楽しい。

2階建ての地下付きコテージは新築さながらの外観を保つており、海辺特有の塩害の影響も見受けられない。屋内も塵一つなく、窓ガラスもよく磨き上げられていた。

さしづめ俺たちの旅行のために、狩谷が予めハウスクリーニングにかけていたのだろう。年に一度訪れるかどうかの別荘を所有する金持ちの気持ちはわからないが、このような癒しの空間を提供してくれた片瀬には大いに感謝したい。

俺たちはそれぞれ2階の個室を割り当てられたので、各自自分の部屋で荷物整理することにした。

別れ際、有紗先輩が高らかと宣言する。

「荷物整理終わったら泳ぐよー・30分後に水着で玄関集合ー。」

バニューダのポケットに手をつっこんで、背の高い彼女の横顔を片手で見やる。

モノキーという、前から見るとワンピース、後ろから見るとビキニである一見変わった水着をビシッと着こなした有紗先輩。緑と白のボーダー柄は快活な彼女らしい、のだが。

「遅いわね」

階段からつながったロフトを見上げながら、有紗先輩が呟く。腕組をした指先は忙しく振れている。彼女の機嫌は下降気味だ。

予定時刻よりも10分ほど時は進んだが、いつにいづに瑞穂は現れない。

「準備に手間取つてるんじゃないでしょうか?」

水着の上に羽織ったパークの裾をしきりに気にしながら、片瀬は

微笑む。

裾を引っ張るという行為が、逆に男子の視線を集めることに彼女が気付いているかは置いといて、俺は緩んだ顔を無理やり強張らせた。

傍らに突っ立っている同士も、同じような表情をしてくることなくらかほつとする。

「秋人っち！」

「な、なんすかっ！？」

「瑞穂呼んで来て。今すぐに！」

「あ……はい」

有紗先輩が俺のマヌケな顔を指摘しなかつたことに胸を撫で下ろしつつ、そそくさと階段を上った。

ノックを2回。

「瑞穂ー？まだかー？」

部屋からは何の返事もない。

「瑞穂ー？」

今度は少し強めにドアを叩いた。

やはり反応はなかつた。

不審に思いつつドアノブを捻ると、予想に反してドアはすんなりと俺を招き入れた。

部屋の構造は概ね同じなようだ。あらかじ 予め部屋に組み込まれているクローゼット。品のある化粧台。背の低いテーブルと木で編まれた椅子が2脚。

ベランダに通じる両開きのガラス張りの扉は開け放たれ、吹き込んでくる潮風が白いカーテンをはためかせていた。

壁際にはセミダブルのベッド。その上には……。

散らかつた床にある瑞穂の旅行セットを踏みつけなによ、そのベッドに近寄る。

「すうー、すうー……」

規則正しい寝息が耳に届いた。

ベッドに身を投げ出している瑞穂のあどけない寝顔を見て、苦笑いと溜息が同時にこみ上げる。

「子供がお前は」

あれやこれやと前日からはしゃいでいたので、本人のわからない間に疲れが溜まっていたんだろう。

むにゅむにゅと気持ちよさをつゝ口を動かす瑞穂を見て、なんだか怒る気にはならなかつた。

じつを向いて、けみつと猫が丸まるようにならへて寝てゐる彼女。

その画だけを見れば、映画のワンシーンのようだ。眞に取めておきたいほどだ。

「寝てゐるだけは、お前もか……」

言葉を続けようとして、さすがにそれは憚られた。

代わりに、唇に張り付いた茶色がかつた髪の毛をすべり。するとそれは逃げるよつてひきちらりと指の間から滑り落した。

鬱陶しきつに瑞穂が寝返りをつ。彼女の左手がベッドからずつ落ちる。

じばし逡巡した後、「つたぐ」と自分で言つて呟するよつてひきちらり落つていちないう位置まで運ぶ。

咳いた。

俺は瑞穂を起さないよつてひきちらりと抱きかかると、彼女がベッドから落つていちないう位置まで運ぶ。

「うへ、ちゅうと重いな」

「イツ最近太ったか?」と思い彼女の身体に目を走らせて、やめた。さつくりと開いた胸元から覗く豊満な胸が、その存在を誇張してやまないからだ。

俺が変な気を起こさないいうか、瑞穂を起こさないようこゆつくりと寝かせる。あとは瑞穂の下敷きになつて、腕を引き抜けば終わりだ。

「秋人……」

むにゅむにゅと意味のわからない寝言に混じり、瑞穂の口から自分の名前が出てきたような気がした。

「悪い、起にしたか?」

そう言って瑞穂の顔を覗き込む。

その時、瑞穂が腕を伸ばして、がつちりと下から俺を抱きしめた。

「んなつー…お、おい、瑞穂さん……?」

俺が呼びかけても、瑞穂はつゝとつと夢を見るよつた表情を浮かべている。

といふか、夢を見ているのだろう。

覚醒した様子ではないし、ざつやう寝ぼけてこらしかった。

「瑞穂つーちよ、離せつてば」

さすがに焦つた。必至にもがくが、自分の腕は瑞穂の下敷きで、それに予想外に強い力で首を押さえつけられている状況ではどうにもならなかつた。

瑞穂の顔が近づく。

完全にパニックに陥つた俺がどうこうする暇もなく……。

二人の唇は重なつていた。

「……っ！？」

目を見開く。真っ白になつてフリーズした頭は、何も考えられない。

甘い香りが鼻孔をくすぐり、唇の柔らかい感触が、まるで媚薬のようにとろけた。

27 日田『キス』（後書き）

この話もよつやくだいぶ、いや少し、微妙に……ほんのちょっとだけ恋愛小説っぽくなつた気がします。では进展はあるのかと訊かれたら、そつではないです。まだぐだぐだと続きます。

「やつと起きてきたわね。」の寝ぼすけ

私が1階の大広間に顔を出したときには、すでに晝食卓についていた。

「「めん、私寝ちゃつたみたいで……」

田を覚ましたときには、すでに部屋は赤く染まっていた。窓が開け放しになつていて、身体に掛けてある薄手のブランケット一枚では、潮風は少し肌寒く感じたのを覚えている。

「そんなことはいいから早く席に着きなさい。もつお腹が減つて死にそうなんだから」

「さつまみ食いしてたくせに……」

「なんか言つた?」

「別に」

仲がいい?姉弟を傍田に空いた席に腰を下ろす。

大きなテーブルを女性陣と男性陣が挟むようにして皆が席についていた。こちら側は私、有紗、緋那ちゃんの順に、あちら側は狩谷さん、司君、秋人の順に並んでいる。

「さあ、せつかくの料理が冷めてしまします。腕によりを掛けて作

つたわたくし特製の海鮮フルコースです。どうぞお召し上がりください

狩谷さんが少し得意げに言った。なるほど皿の前にある料理はどれもこれもおいしそうなものばかりだ。彼は料理には少なからず自信があるのだろう。

「いっただきまーす」

フォークとナイフを握り締め、真っ先に食べ始めたのは有紗。

「うーん、おいしーー」

本当においしそうに食べる有紗を見ていると、いつまで幸せな気分になるのは、たぶん彼女が無邪気だからだらう。

「いっぱい泳いだみたいね

だからそんなことを言つてみたら、予期せぬ返事が返ってきた。

「今日は海には行かなかつたわよ。代わりにこの家の中を探検したりして遊んでた。あ、そうそう、お風呂すこかつたー夕食が終わつたらやつそく入りに行こー！」

「そつか……ありがと」

有紗はにいっと笑つて私に食べ物を勧めてきた。

笛氣をつかつて海には行かないでくれたのは、ちょっと心苦しいけどとても嬉しい。

私はシーフードパスタを口に運んで「あ、おいしい」と呟いた。

「そういえば私の部屋に来たのって有紗？」

女の子3人で大理石の広いお風呂に入りながら、ふと尋ねた。

「違うよ、秋人っち。なんで？」

「え？ 別にただ誰か気になつただけ」

じゃあ毛布を掛けてくれたのは秋人なのか……。

その嬉しい事実に頬を緩める。でもなんだか少し照れくさい。

寝顔、変じやなかつたかな……。

今更だが、気になるものは気になる。後でそれとなく秋人に探し入れところ。

「綾崎先輩のぼせました？ 大丈夫ですか？」

緋那ちゃんに言われてはつとする。慌てて大丈夫よと言い繕つと、彼女は笑顔を見せた。

「あの、先輩は今日どんな夢を見てたんですか？」

「え？」

「霧宮君が幸せそうな顔で寝てたって言っていたので」

すると横から「バカ面つて言つてた」と有紗が小さく訂正した。

「や、やつ。ええつとね……」

「言えない。どんな夢だったかなんて。だって……。」

「忘れちゃつた」

「そうですか、残念です」

緋那ちゃんは少しこいたずらな笑みを覗かせる。私は空笑いをして  
「まかした。

「私もう上がるね」

夢の内容を思い出したら本当にのぼせてきた。

先にお風呂を出てきた私はウッドデッキに佇む人影を見つけ、外  
に出た。

「あーきど」

後ろから声をかけると、手すりに体重をかけて夜空を見上げていた秋人が振り向いた。

「ん? どうした?」

「何してるのかなって思って」

「いや、星が綺麗だつたからつい外に出てきただけ」

そう言つて秋人はまた夜空を見上げる。私も釣られて見上げると、そこには幾憶もの星たちが瞬いていた。

「す、うう……」

「俺たちの住んでるとこじや、こんなに星見えないもんな」

「うん。でも秋人つて夜空見上げて感動するようなロマンチックな人だったつけ?」

にたつとおどけて笑つて見せると、秋人は眉をひそめて嫌そつな顔をする。

「はいはい似合わなくて悪かったな。でも、この星空見たら誰でも感動するんじゃないのか?」

「そうかも」

素直にそこには賛成しておぐ。

遠くから漣の音が繰り返し聞こえてくる以外は、何の音もしなくて、辺りは息苦しいくらいに静かだ。

風がまだ乾ききっていない私の髪を揺らす。

後ろに組んだ手を何度もじもじさせた後、思い切って口を開いた。

「私が寝ている間に部屋に入つたでしょ

思つたよりもぶつきりほつた言葉が出てしまつた。

「ああ。こやけ面で寝てたな

「え、つ……ほんとこつ?

「夢でも見てたのか?」

秋人は卑屈な笑みを浮かべる。

「し、知らなーい

訊かれたくないところをつかれて、思わずどもる。秋人は「ふうーん」と意地悪そうに相槌を打つた。

「もしかして誰かとキスする夢だつたりして

「なー?ち、違う!」

「違うってことは夢みてたんだな」

「つーーー」

動搖した。なんで夢の内容を秋人が知っているのか。

その夢の中では、私と秋人が恋人同士になっていた。それだけじゃなくてキスシーンも含まれているという、自分の願望をそのままにした夢だった。

寝言でまざい」と言ったのかな?

どうしようもなく不安になり、震える唇を開く。

「わ、私、寝言でなんか…言つた?」

秋人が私に向つて歩いてくる。さっきまでの静けさは嘘のようだ。心臓の音で何も聞こえない。もしかしたら私が秋人のことを好きなのが図らずともばれてしまつたかも知れないのだ。しかも寝言で。それだけは絶対に嫌だ。

そして、

「何も言つてなかつたけど?俺そろそろ風呂入つてくるわ。皆もつ上がつた頃だろ」

そう言つて秋人はそのまますれ違つた。

「そうね」

力が抜ける。とりあえずばれてはないのかな？

秋人がいなくなつてからも、私はここを動けずにいたのだった。

やつつけ感が否めない今回の話。  
27日㈰とただ一緒に投稿したかつただけだとこいつ」とも付記。  
更新遅いのひまなカメですが、いつも読んでくれてありがとうございます。  
『やれ』です。

更新頑張ります！（注：更新スピードに変化を期待しないでください）

天候は晴れ。カラッとした空気は日本の夏と「つよい」むしむし、もつと地球の両極に近い地域の夏を彷彿させる。

波打ち際には女子の嬌声が、後ろの鬱蒼と茂る林からは鳥のさえずりが、島全体を包む漣に運ばれてくる。

宝くじにでも当たらないかぎり一生「」縁のない「」ような贅沢極まりないバカンスを楽しんでいるのに、それにもかかわらず、俺の心は<sup>もや</sup>露<sup>ゆき</sup>がかかつたよう<sup>に</sup>じめじめとしていた。

ビーチパラソルの下で太陽がわずかに透けた部分を何とはなしに眺める。

ぼやけた光が自分の心のようだと思つた。

なに悩んでんだる。

何が自分の心につつかえているかなんてわかつてゐる。でも何でつつかえているのかわからなかつた。

自分でもよくわからないが、昨日のことが頭を離れない。

昨日のことについては瑞穂との事故のことだ。そう、事故。事故でたまたま唇が触れ合つただけなのに、妙に意識してしまつ。

当然といえば当然だが。

自分がああいうことに不慣れなのは隠しようがない事実なのだから。

結局あの後瑞穂は糸が切れたように動かなくなり、俺は動転した頭で、でも変に冷静になつて瑞穂は起こさないようすぐに部屋を出た。それこそ寝込みを襲つた不届き者のように。

ドアを閉めて本当の意味で我に返つたとき、自分の身体も息を吹き返したように心拍数が急に上がりだした。瑞穂の腕にからめとられた首の裏にはべつとりと汗をかいていた。その時の俺はドアにどのくらいの間もたれかかつていただろうか。

それからは何もなかつたように皆に事情を説明して、談笑して、家の中を見せてもらつて、瑞穂が起きてきて飯を食つて、普段通りに時間は過ぎていった。

実際何もなかつたのだ。

そう思えばいい。瑞穂は何も知らない。俺が口を割らないかぎり、瑞穂とはいつもと変わらずに接することができる。

あとは俺自身の問題なのだが、生憎とすぐに気持ちの整理がつけるほど大人ではない。

それでも昨夜は瑞穂と普通に違和感を与えることなく話すことができたと思う。事の直後に普段どおりに振舞えたのだからこれからも大丈夫だとは思つが、でも……。

ぼやけた太陽を掴もつと手を伸ばす。

秋人……。

瑞穂は確かに俺の名前を呼んだ。彼女がどんな夢を見ていたのか、想像がつかないわけではない。

しばらく空中を彷徨つた手は掘むところがなくて、代わりに太陽の光を遮つた。

田を閉じた暗闇の中では望んでもいなのにあのシーンがスクリーンに映し出される。

時々何かの曲が頭でリピート再生されて離れないよつて、あのシーンもぐるぐると頭によぎつて止まなかつた。

しかたなく腕をだけ田を開ける。と、

「秋人、泳がないの？」

「うおつー？」

突然赤、黄色、青とパラソルの単調な色合いで割つて入つてきた悩みの種に驚いて、身体をびくつと震わせてしまつた。

「……なんだ瑞穂か

「なんだとはなによ」

海水で濡れた髪を片方の手で押さえ、もう片方の手を膝につきながら、瑞穂はむつとする。

「うるせー。前屈みになるな」

フロントをリボン結びにして留めるタイプの白いビキニを着た彼女は、幼児体形とは程遠い体躯をしている。濡れた肢体が眩しすぎて、俺は視線を逸らしながら早口で言った。

「なんで？」

なんでもくそもあるかー見えるつーの。思つだけで口に出さないが。

「いや、いい。なんでもない」

ややあつてから諦めたよついに口にした。

瑞穂は訝しげな表情をするが、機嫌がいいのかすぐに笑顔になる。

「ふーん……。それよりも皆待ってるよ」

「ああ、うん、行く」

波打ち際に田をやると、ビーチボールが楽しげに上がったり下がったりを繰り返している。

やつているほうは楽しいだろつが、ビーチボールからすれば毎度毎度叩かれては空中に舞つて翻弄され続けるのだから迷惑な話だ。本当に。

迷惑かもう一度頭の中で考えてから、確かめるように小さく頷いた。

いきなり腕を抱えられる。

「ほーらっ、すたんだつぶ！」

ぐん、と身体が上がる。

「いくつー引つ張んなくとも立つって」

本当はそんなに痛くはなかつたが、なんとなくハつ当たりの意味も込めて言つた。

「うそつき。秋人一人じや立てないくせに」

無理やり俺を立たせると、意地の悪い笑顔で気に触ることを言つ。その言葉はまるで誰かがはつぱをかけないと何もできないと言つているようで、それが実際当たつているから悔しくて鼻を鳴らした。

「皆待つてんんだつてば」

なかなか動かない俺に焦れたのか、瑞穂は俺の背中をぐいぐい押して日陰から追い出した。

日向に追いやられてわかつた。アレほど弱々しかつた太陽は、実はこんなにも煌々としていたのかと。

「あちい……」

日陰がどれほどに涼しいかを改めて実感する。

「親父くせり」

「暑いものは暑いんですね」

「はいはー」

後ろ田で見やると、瑞穂は本当に機嫌がいいようで、天真爛漫な小学生みたいな満面の笑顔を湛えている。

「俺は今、知らぬが仮つてことわざの意味をしみじみと実感している」

「はあ? ……うふつ、わけわからんこと」と言つてないでやつたと走れ!

「だから押すなつて!」

一人で悩んでいるのが馬鹿らしくなるほど瑞穂は楽しそうなのがむかつく。

「言つたくても言えないジレンマを抱えたまま俺は走り出した。

「みんなーー、スイカ連れて来たからスイカ割りしよーー!」

「は? おまつ、スイカつて」

本当に一人で悩んでるのが馬鹿らしくなつた。

29日㈬『ヒーチパラソルの下で』（後書き）

また一月おいての更新……。

今頃になつて忙殺される日々を送つています。それが楽しいときた  
もんだからまったく手に負えないもので。  
でも忙しいのはいいことですね（更新については……＾＾・）

「ん、ん〜〜……はあああ」

大きく伸びをしてから、溜息を盛大について脱力する。

「今日は、少し疲れたな……」

隣で司が心底疲れた表情で眉根を寄せると、熱いお湯を両手でくつて顔を濡らした。

「お前はまだいい。俺の身にもなつてみる。危うく頭力チ割れるとこだつたんだぞ。顔面に有紗先輩のボールは食いつし、砂には埋められる。揚句の果てには後片付けを一人で……」

「ちょっと待て。片付けは俺もやつた

「そうだっけか

「そうだ」

「なんでもいいや……」

もう一度オヤジのように溜息をつくと、綺麗に司とハモった。

広い大浴場で男二人、温泉常連客のゲートボーラーばかりに長湯をする。弱冠16歳にして早くも晩年の雰囲気さえ醸し出しているのは、決して俺たちの体力不足のせいではない。

酷かつたのだ。誰とは言わないが。

俺は静かに今日あつた出来事を思い出していった。

サンクチュアリことビーチパラソルの下から、瑞穂に無理やり炎天下の砂浜に駆りだされたかと思うと、有紗先輩に横になるように指示された。訳を訊く間もないまま砂浜に寝かされると、有紗先輩、瑞穂、なんと片瀬まで束になつて俺の身体を大量の砂で埋めにかかってきたのだ。

逃げることは容易かつたが、普段あまりはしゃがない片瀬の笑顔にやられた。

「あれがいけなかつたなあ……」

思わず口に出す。

「ん？」

司が片目を開けてこちらを見た。

「いや、なんでもない」

再び頭の中に思い浮かべる。

完璧に手も足も動かないように埋めると、有紗先輩は横にスイカを並べてこう言つた。

「さあ緋那ちゃん！スイカでも秋人っちの頭でも、好きなほうを割つてちょうだい！」

そこからはじめ、本気で焦った。片瀬がぼやぼやしているのに、渾れを切らした瑞穂が木刀をひったくつて更に焦った。

まあ、結果的には無事だったわけだが。

「なあ、お前なんでスイカ割りとめてくれなかつたんだよ」

非難交じりに唇を突き出す。

「とめたら、俺にとばっちりがくる」

「親友の危機より自己保身か、この薄情者」

「親友? そんなのどこにいるんだ?」

「チツ……死んでしまえ」

突き出していた唇を更に突き出した。

司は風呂から上がると早々に自分の部屋に引っ込んでしまったが、俺は部屋に戻る気にはなれずロビーで一人窓いでいた。

ソファーの背もたれに両腕を掛けて首の力を抜く。天井のファンをぼうと眺めながら涼んでいると、後ろから声をかけられた。

「霧宮様」

首をそのまま反って声の主を探すと、執事服に身を包んだ初老の紳士が逆さに映つて見えた。

起き上がつて振り返る。狩谷は無表情に立っていた。

「狩谷さん、なにかよつですか？」

「ええ、緋那お嬢様のことで少しお話がござります。お時間よろしいでしょうか？」

片瀬の？

「はい。大丈夫ですけど……」

狩谷の真剣な聲音によりついつい神妙な顔つきになり、答えた。

「では、いかがく」

そういふと、狩谷は俺に背中を向けて歩き出した。

なんとなく、嫌な予感がした。

通されたのは1階の廊下の最奥にある部屋だった。

俺たちの部屋より大きく、ビートなく片瀬邸に似ていた。

ロビーの天井にあるシャンデリアの縮小版みたいな、煌びやかなシャンデリアがあり、そびえ立つ本棚には分厚い本がぎっしり詰まっている。校長室にあるような大きな机の上には書類が散乱していた。

「書斎、ですか……？」

「わたくしの部屋でござります」

部屋の中央にある2脚のソファーの一つに掛けのつに促しながら、狩谷は答えた。

腰を下ろして辺りを見回す。

執事といつても片瀬家中では相当偉い立場にいるに違いない。

「へー、なんか立派ですね」

狩谷はそれには答えず、ソファーの前にあるテーブルに予め用意していたのだろうティーポットから、紅色の液体をガラスの丸いコップに入れて差し出した。

「どうも。……ん、うまい」

口をつけるとそれは紅茶だつたらしく、冷たい液体が喉を潤した。

狩谷は俺の感想を聞いて少し嬉しそうに目尻を下げる。

「で、話つてなんですか？」

あまり狩谷の部屋に長居したくないので俺の方から訊くことにした。

「はい。霧富様には明日のことを少々お話しなくてはなりません」

あれ？さつきは緋那お嬢様のことについて言つてたじやねーか。

「緋那お嬢様についても、そのことでお頼みしたいのです」

俺の考えを読んで、先に狩谷が付け足した。

「はあ、なんでしょう」

もつといじめでくると既視感を覚えずにはいられなかつた。

狩谷からの頼みごと。

それは俺にとつての厄介ごとだしかない。

たぶん今回もまた俺に片瀬のことを探し付けるんだろう。

俺は悟りを開いた気分で狩谷の次の言葉を待つた。

「明日わたくしは、あなた方をここにおいて帰りつと存じておつます」

「……はい？」

悟りを開いた俺でも意味がわからなかつた。

30日㈰『狩谷の頼み』（後書き）

ついに2ヶ月ほつたらかしにしてしまいました。酷いですね。誰とは言いませんが。

読者様からのコメントが胸に痛いです。それでも続きを上げない自分にはきっと「小説家になれない」ってサイトがあつているんだと 思います。はい。すみませんほんとダメな子なんです。

さあーいよいよもつて高校卒業までにこの物語を終わらせることが できるのか不安になつてきました。  
そんな初冬の18時9分。

緋砂島に来て早々、あの一見クールで近づきがたい、一応俺の親友である司と、その姉で、天真爛漫と傍若無人を足して一で割ったような人である有紗先輩。その一人が姉弟であるという事実を知られた。

またその日のうちに、寝ぼけた瑞穂と団らぎして唇を重ねるというアクシデントに見舞われることになる。

俺はなんだか一気に年老いた気がしないでもない、一言で言つと濃い一日を過ごしたのだった。

そして昨日、俺はとんでもないことを狩谷から聞かされた。

それはよく言えば、人に頼りきつた生活を余儀なくされていて、またそれを甘んじて享受している俺たち現代っ子への経験の場の提供であり、狩谷なりのサプライズで優しさである。が、アンチテーゼは恐ろしいものだ。実際には、育児放棄をした母親ライオンが我が子を崖から突き落として「あとはどうぞ勝手にやつてね」と言わんばかりの不条理なことなのだ。

職務怠慢、と言つ言葉が正しいかはわからないが、ご主人様の身の安全を仰せ付かった狩谷としては、過失を問われても文句は言えないのではないかと思う。

要するに狩谷は昨日何を言つたのかといつと、私はこの島からいなくなりますから後は残った皆様でどうにか生活してください、ということだった。

その話を聞いた俺は一瞬耳を疑つたが取り乱しはしなかつた。

よくよく考えてみればこの旅行行程から考えて、一晩を保護者なしで過ごせばいいだけだし、仮に一週間くらい放置されたとしても、この別荘には十分すぎるほどの食料と、生きていく上では必要不可欠な水もあるのだ。

何も心配することはない。ただのちょっとしたレクリエーションだ。

と、内心安心しながらも一応、狩谷の話をぶすくれた風を装つて聞いていた俺だが、果たして狩谷という迷惑さでは有紗先輩に引けをとらない老人は、そこまで優しくはなかつた。

それを今になつて如実に実感し、己の浅はかさを呪つた。

旅行二日目。異変は突如起きた。

太陽も真上に差し掛かった頃に、昼食を取るために片瀬の別荘に戻つたときのことだ。

その日は朝からマリンブルーの海へと駆り出し、足元が透けて見えるほど透き通つた海水の中ではしゃぎ回つていた。昨日も日が暮れるまで遊んでいたのに、まだそんな体力があるのかと感心するほ

もちろん、朝早くから文字通り叩き起された男子連中は不満たらたらだった。しかし、そこら辺で拾つた貝殻を笑顔で突き出してくる瑞穂を見たら、どうしても憎む気にはなれず、だから俺も司も、お互いの緩んだ顔を馬鹿にし合つては、無意味に競泳して汗を流した。俺もなんだかんだ言つて浮かれているのかもしれない。

女子も女子でサンゴ礁の欠片を拾つては喜び、足元を縫うようにして泳ぐ小魚を見てはきやつきやとはしゃいでいた。

そんなことをやつていたもんだから、正午には皆はびっくりして戻つてきたのだ。

水着のままの俺たちは髪の毛も身体も湿つたまま。バルコニーの床は滴つた雫で濡れている。その水滴の跡が急激に乾いてくのが見てわかるくらい、太陽の熱で熱せられた床は熱くて、皆足踏みしている。裸足で立つには砂浜も床も辛くて、早くも海の中に足を浸けたい衝動に駆られた。

有紗先輩が「今日のご飯はなつにかな~」とハミングを交えて上機嫌で玄関のノブを回して、怪訝な顔に変わった。

「ねえー、このドア開かないよー?」

先輩が振り向くと、瑞穂が「私に貸してみなさい」とノブを回してはガチャガチャと引っ張つた。

「……ほんとだ開かない。狩谷さんが閉めたのかしら? ねえ緋那ちゃん。ここの鍵持つてない?」

「いめんなさい。鍵は全て狩谷が管理していて、私は持つてないんです」

片瀬は申し訳なさそうに胸の前で手を組んでいる。

「わ、……。じゃあ狩谷さんは何か言ってなかつた？」

「いいえ、何も言ってなかつたと思います」

「そうよねえ……」

瑞穂が思案顔で腕を組む。

「じゃあめんどうさいけど、鍵が開いてる窓探して入るか狩谷さん呼んでくるしかないね」

有紗先輩が腰に手を当てて溜息混じりに言つて、俺、司と視線を巡らした。

俺は次に先輩が何を言つかだいたい予想がついて、司に恨めしい一瞥をくれてやる。司も然り、だつたが。

「ほら秋人つちに司。何してるの！秋人つちは家の周り一周！司は狩谷さん見つけてくる！ほさぼさしてると、こいついるか弱い少女三名が飢え死にしちゃうんだから」

有紗先輩は胸の前に手首の力を抜いたまま両手を持つてくる。日本の幽靈のマネだ。そして目を細めておじりおじりしつつ、

だ。

「やしたら化けて出でやるや。」

俺がなんて反応したらいいのかわからなくて、しばり固まつて  
いふと、

「少なくともお前は少女じゃなくて大女おおおんなだろ」

司がバニユーダのポケットに手をつりこんだまま、そっぽを向いてぼそぼそと呟いた。

「あ、?なんか言つた?」

「いいえなんにも

有紗先輩の凄みを尻目に、司は片手を上げ億劫そつこい三回振つて、今来た浜辺のほうへと引き返していった。

「秋人つちも早く行く!」

「えー……」

無言で睨まれた。有紗先輩はそれなりに端正な顔つきをしているので、それはそれは怖い顔になつていてる。

「へ・ん・じ・は?」

「マッハで」

「よひじー

そう言つてこいつと笑つた。

むちゅや言つなよ……

思つても口に出わなこのが上手な生き方。昔瑞穂のお父さんが  
言つてたことを思つて出す。うん、無理だ。

「じゃあ先輩方は……ああ、男子より体格がよくてか弱い先輩方は  
どうぞ日陰でお休みになつていてください」

たつぱりと嫌みつたらしく言つて、後ろに罵声を浴びながら俺は  
その場を離れた。

それにしても、甘く見ていた。別荘があるから大丈夫とか、そん  
なもんじゃなかつたんだ。

してやられた歯がゆさで唇を噛む。

俺だけは、今のこの状況が何を意味しているかわからないわけ  
はない。狩谷が“戸締りを忘れる”なんてミスを犯してることに  
期待しながら、最初の窓に手をかけた。

いよいよセンター試験まで一年を切ってしまった…。まことにまずいます。

最近は学校行ってバイトしてその金で塾行って家帰って寝る、みたいな生活が習慣化してきました。

はい、どうでもいいですね。それよりも小説です。3ヶ月ちょっとです。休載期間。ハター×ハター並です。読者の皆様にはもう申し開きの言葉もありません。

次の話できますが、もうちょっと直してから上げたいと思います。

今しげがた戻ってきた司の言葉を聞いて一同は啞然とした。有紗先輩は司にどういうことよと詰め寄り、片瀬は露台に力をなくしたようへたり込んでいる。瑞穂でさえも頭痛が酷いときのように頭に手をやつている。

司はやはり「ひづ」言つた。

クルーザーがない

それは狩谷の計画の始まりであり、俺が端から聞かされていたことだった。

しかし予期せぬこともあつた。

俺たち五人が片瀬の別荘から締め出されてしまつたらしいということだ。

あれは鍵の開いている窓はないかと一つ一つ確認し、ちょうど玄関から反対側に来たときのことだった。几帳面に、まるでわざとセツトしたかのように置かれているある物を、俺は発見した。

そこに申し訳程度に置いてあつたのは、俺たち五人分の寝袋と、釣竿一本、鍋、ナイフ、ガスバーナー。

しばらく辺りを探したが、食料や水はどうしても見つけられなかつた。

食べるものは自分で確保しりつてことなのか、または別のビームに置いてあるのか……。

それでも一応何とかなりそうな感じではある。特に火をおこせるのが大きい。ただし飲み水を見つけられなければ、どうしようもない。

俺の考えが甘かった。この別荘があればなんどこうことはないと言を括っていたが、裏を返せば、別荘がないとどうにもできないといふことではないか。

狩谷は最初からただいなくなるだけではなく、俺たちを野ざらしにする気だったのだ。

「あ

そこではたと閃いた。

窓ガラスを割つて家の中に侵入できるんじや？

今手をかけている窓を見つめる。中はどこかの密間である。俺たちの寝泊りしている部屋とはまた違つたモダンな雰囲気の部屋で、いかにも高級そうな調度品が部屋の端々に見受けられる。

外で寝るより確実に安全で快適だ。

思い立つたら速行動。転がっていた手にひな石をつかんで、思いつきり窓めがけて投げつけた。

しかし鈍い音がただでガラスが割れる気配はない。

もう一度投げたが結果は同じだった。

防弾ガラス。

「ひなるともひ狩谷の思惑通りに動くしかない。俺は辟易する他なかつた。

今後どうするか、ひなることを狩谷が予め俺に話していたといふことを眞に打ち明けようが、そんなことを考えながら玄関前に戻つたのが、司が戻つてくる数分前。

結局、か弱い女の子三人には窓はどうとも開いていなかつたとだけ説明した。

「おこ、これはどうひいことだ？」

司が俺に耳打ちする。沈思黙考する俺の姿に、司は何か不自然な様子を感じ取つたのか、やや詰め寄るような口調だつた。

俺はそれに答へずに、ただ首を横に振つた。

「……あのや、」

ぽつりと、口を衝いて出た。

しばりへりのを躊躇つたが、黙つてもしょうがないと踏ん切りをつけて、俺は裏で見つけた物のことを皆に打ち開けた。

瑞穂がすいと顔を近づける。

「はあ！？ それって 」

「俺たちはこの無人島に取り残されて、かつこの別荘からも締め出されたってことだな。寝袋が人数分きつかり置いてあるということは、狩谷さんは少なくとも今日には戻らないし、しかも外で寝ろってことなんだと思つ」

「つーーー！」

瑞穂は俺に詰め寄つた状態で固まつた。たぶん頭の中は混乱してぐるぐると回つているに違ひない。

「さすがの私もこいつや意味わからんないや……」

あの有紗先輩も眉間に押さえている。

足元からずずと涙をすする音が聞こえた。

「つーきつーくんつーわたしつーどうすれば……」

座り込んでいる片瀬がこれまで俯いていた顔を上げると、いつのまにか彼女の顔は涙と鼻水でグチャグチャになつていた。

「わわつ、片瀬さんなに泣いてんのつ」

慌てて俺は片瀬の肩に手をかける。手をかけてからどうすればいいかわからず、とりあえず背中をさすつた。

「だつて、狩谷がつーどこかつーこつーちやつて……」

「落ち着いて片瀬さん。大丈夫だから」

狩谷が俺にだけ自分がいなくなることを話していた訳がわかる気がする。

自分が消えたことに残された俺たちが気付いたとき、当然パニッシュになる。でも、そうならないように誰かが心を支えてあげなければならぬ。言つなれば、皆の「まとめ役」に俺が抜擢されたということだ。

なぜ俺なのかは、普段俺が一番片瀬のそばにいるからなのだろう。もつと言えば、片瀬の警護役として俺にいろんな経験を積ませるため。もしくは……。

片瀬はさつきから子供のよつて嗚咽を漏らしながら泣いている。

もしかしたら片瀬に一人前になつてほしいから、わざと俺だけに言つたのかもしれない。短い付き合いだが、これまでを思い返してみると、片瀬は全幅の信頼を狩谷に置いている。それは言い換えれば、まだまだ狩谷に頼りつきりということだ。

それではこの先、片瀬にとつてよくないと狩谷は思つたんだろう。なんとなくだが、親心にも似た狩谷の気持ちが読み取れるような気がする。

そんなふつに俺は狩谷の思惑を捉えた。

どうも俺は狩谷になにかと買われているようだ。じゃあ俺はそれに応えられるよう頑張るしかない。

俺は一つ咳払いをして、眸を見回す。そしてもう一度片瀬を見た。

「とにかく、狩谷さんが俺たちを見捨てるわけないし、殺す気もないことは確かだろ？釣竿とかその他諸々のアウトドア用品を置いていったのが証拠だ」

「じゃあなんで狩谷さんは私たちを置いてどこかに行つたの？」

瑞穂がいまいち納得していない顔で尋ねてくる。

「それはわからない。けど、狩谷さんは俺たちを陥れようとしているわけじゃない。なにか理由があるはずだ。もしかしたら、というかたぶんこれも狩谷さんの旅行プランの内なんじゃないのかな」

皆黙つて俺の拙い演説に耳を傾けてくれている。

「だったら俺たちはこれをただのキャンプだと思えばいい。な？ポジティブに考えよう。楽しちゃう。何の心配もいらない。……あ、食料と水の心配以外に。と、とりあえずどうにかなるつて」

俺は眸を、特に片瀬を妄心させるように囁いて聞かせた。

司は初めからたいして動搖してなかつたからどうでもいいが、有紗先輩曰くか弱い少女の三人には効果があつたようだつた。瑞穂も有紗先輩もようやく落ち着きを取り戻したらしく。「確かに狩谷さんだもんね。それにしてもキャンプか……それはそれで……と、瑞穂もしきりに頷いてはブツブツと呟いている。

俺は不安そうに顔を歪めている片瀬の顔を覗き込む。それきまで

飼い主に見捨てられた子犬のように生氣を無くしていった片瀬の瞳には、涙の代わりに強い意志の籠つた瞳があつた。

「よくよく考えてみれば、狩谷さんが片瀬さんを見捨てるわけないよ。それに、ここにいる人たちは頼れる人たちはかりだ。俺は……まあ少し頼りないけど、でもたよつてくれて全然構わないので。だから片瀬さんももう泣かないで」

小さい子をあやすよつて頭を撫でる。安心させるよつてできるだけ優しい笑顔を作つて微笑むと、片瀬は思いきつたように俺の名前を呼んで抱きついてきた。肩膝立ちだった俺は、耐え切れずに尻餅をつく。

「うわつ！か、片瀬さん！？」

条件反射で離れよつとすると片瀬は逆に強い力で抱きしめてくる。

有紗先輩が「ひゅうー」と口笛を吹く。口笛じゃないのがワザといしい。

「霧宮君、私頑張ります。頑張つて生き延びてみせます！」

「う、うん、そうだね」

なんか違う気がする……。

でも、片瀬が氣を取り直してくれたので、ほつと胸を撫で下ろした。俺はなんとなくそのまま片瀬の頭を撫でていた。

そうしていりつに氣が氣でなくなつてきたのは、色々と当たる

感触だった。

俺は水着で片瀬も水着で、つまり俺は上半身裸で片瀬もほとんど裸で。いかんせん肌の触れ合ひ部分が多くなるといつも、胸の柔らかい感触が直ぐくるといつも。

不潔だと頭ではわかっていても、どうしても思考はさっちに流れされ、下半身が反応するのもこれ以上抑えられない。

気が緩んだ瞬間これか……。

今も渾身の力で抱きすぐめられたままの俺は、情けないやら恥ずかしいやらで、自分に對して笑った。

「あきとお……なにニヤけてんのよ」

しまった、ここにがいたんだと思つたときにはすでに遅く、口からせりつけとは明らかに種類の違う乾いた笑いが漏れる。

「片瀬さん、とつあえず離れたほうがここよ」

「えと、もう少し……」

「はあー?」

極寒の地の湖面が割れる音を聞いた気がする。そればかりではなく寒気までしてきた。

男としてぐつとくるこの状況に瑞穂がいなかつたら、と何度も思つたかわからぬ。

「……少し男らじいと思つたら抱きつかれてニヤけて、あまつさえ離さうともしないなんて……あ、秋人なんか今すぐ死んじゃええええ！」

「お前それぜんぜん意味わかんな、痛つーちょつーやつーやめてつーマフ、マジつ、あ、舌噛んだ……」

後頭部を何度もゲシゲシと蹴られ続ける。

「ははーん、嫉妬だな」

「嫉妬だな」

傍観を決め込んだ倉本姉弟が離れたところで腕を組んでいる。司め……。

「ちよつと、緋那ちゃんの」といいかげん離しなさいよつー。」

「いい、かげん、蹴るの、やめうつー。」

今度は俺が片瀬を抱きすくめる形になつていて。瑞穂の蹴りが次々と飛んでくるので離すにも離せない。といつも、ぶつちやけ離すには少々惜しい気もある。

ふと、俺の腕の中からくすくすと笑い声が聞こえてきた。

残念ながら片瀬の表情を覗き見ることは叶わないが、それでもどんな表情をしているかは容易に想像できた。

俺も蹴られながら一ツシッシと笑った。嬉しかったのだ。

泣いたカラスがもう笑っていたから。

### 32日目『泣いたカラス』（後書き）

書き始めてみると一話書くだけでもかなり時間がかかってしまうのは俺だけなんでしょうか。

ということで、連続投稿<sup>にならねばずだつた</sup>32日目です。ここからやつとバカنس編のサビ（？）の部分です。長かった…。

なんせ企画したのは一昨年の夏なんですから。

いつも（私が全然更新していない間も）感想くださつてありがとうございます。応援されるスポーツ選手の気持ちがわかるようになります。更新は、たぶん3月中にできると…いやします。

## 第三回『水、水、みず』

「ねえ——秋人ビ——？」

鬱蒼と茂る亞熱帶雨林の中に瑞穂の声が響く。

「ひつひつひつ」

俺は立ち止まり、やや後ろからついてくる瑞穂にわかるように大きく手を振った。

椎や樟と見られる背の高い木々に混じって、シダ植物やコケがあらわに群生しているのが見て取れる。

「ちよつとおいてかないでよ——ケータイもないのこぼれたらどうすんのよ」

「悪かつたつて。急ぎ足になつてたな。気をつける」

現代の子の必需品である携帯電話は別荘の中。今の一の連絡手段は大声で叫ぶことぐらくなものである。なんとも原始的であるが仕方がない。

「それにしても案外ないものですね」

隣にいる瀬が残念そうに咳く。

「うーん、確かに。映画では「ひつひつときたくさんのがそこらじゅうに生つてんのにな」

俺は今、瑞穂と片瀬と三人で森林の中を散策している。ただの散策ではない。これが、海で遊ぶのに飽きて暇だからちょっと森の中でもお散歩しようぜ、的ななんとも若者らしく健全な暇つぶしなら良かつたのだが、違う。

あえてもう一度言おう。これがただの散策ではないと。

これは、命を懸けた散策なのだ。

俺たち五人のうち若き学生諸君は、狩谷の陰謀により無人島に置き去りにされ、家から追い出されてしまった。さながら無人島に漂着した難破船の乗客のようだ。

ゆえに食料調達をせねばならず、かつ、こちらはもつと迅速に、水の確保をしなければならない。

倉本姉弟は釣竿一本を携えての別行動だ。一人には今夜の主食となる魚を釣つてもらっている。この暑い中大変だと思うが仕方がない。

なぜこの組み合わせになつたのかというと、たいした理由もないのだが、まず釣り経験者が倉本姉弟のみであつて、万一に備えて男女は別々に行動したほうが良いとなると、選択肢はかなり絞られてくる。

さらに俺は昨夜、狩谷に片瀬のことを頼まれていた。一方的に。私がいない間、緋那お嬢様の身の安全は霧宮様にお託し申上げます、と。

そんな理由からこの一組に分かれての別行動と相成ったわけだ。

別れ際、有紗先輩が妙にニタニタしていたのが気に食わないが。

俺はナップサックからペットボトルを取り出し、清涼飲料水で少しだけ口内を濡らした。

このスポーツドリンクは、今朝海に出たときに各自一つずつ持つていったものだ。また、この水は狩谷から与えられたまつこと貴重な聖水であり、ペットボトルは俺の活動限界を知らせるガソリンタンクである。だから大切に飲まなくては簡単に行き倒れてしまう。

幸いなことに、ボトルの中にはまだ半分以上残っている。しかしこれもいつまでもつか……。一刻も早く水源を見つけなくては。

ペットボトルをしまおうとナップザックを開ける。中にはもう二つペットボトルが入っていた。瑞穂と片瀬の分だ。しかし中身はとうに無くなっている。つまりは俺の持っているこのペットボトル分しか俺たちに残された水はない。なかなかに危機的な状況である。

「あの、霧宮君。申し訳ないですが、私にも、ほんの少しもらえませんか?すごく喉が渇いちゃつて……」

そう頼み込んでいる片瀬は見るからに辛そうだ。額には大粒の汗がびっしり並んでいる。

全然気づかなかつた。彼女が人より身体が弱いということはもう十分知っていたのに。そのことを差し引いても、彼女はお嬢様でこういうロードワークには慣れていないのは明らかだ。次からは片瀬の様子をもつと気にかけて行動しなくては。

「「じめん」と瀬せん。辛せつなのに『氣』びかなくて。はい、いへりで  
も飲んでいいから」

セツナがペットボトルを渡す。

「あつがとわ。……「じめんなせこ、霧宮君のなの」」

本題に申し訳なさへつて受け取つてから、瀬せんはキャップを開けた。

と、セツナが彼女は開けたペットボトルの口を見つめたまま固まつた。

「ん? どうしたの? 遠慮しなくていいよ」

「あ、はー……。えっと……じゃあ、い、いただきます」

セツナが答えるものの、一向に飲む氣配がない。

セツナはたと氣がついた。間接キスになることを瀬せんは先ほどの  
『氣』にしてこるので。

「あー、「じめん。毒ではないから。その、我慢していただけねと…  
…」

すると瀬せんは慌てたように手を振り、

「こ、いえつー違つんです。嫌とか、そういうんじゃないですから  
…はつ……、」

「は？」

「恥ずかしいだけで……」

彼女はこれ以上ないくらいに顔を沸騰させたかと思つと、ペットボトルを抱えたまま俯いてしまつた。

もうこいつとを気にされると、しかも恥ずかしくなるんですが……。

苦笑いで困つたと瑞穂に同意を求めようと瑞穂を見ると、なんだか慌てたようでいて苦虫を噛み潰してしまつたようで、とにかく変な顔をしていた。

なんだアイツ？

と、瑞穂は片瀬にそろつと一歩近づいて、

「緋那ちゃんが飲まないんだったら私が先に」

「霧宮君いただきますー。」

急に顔を上げると、片瀬は思い切つたように勢いよく飲みだした。

「あつ……」

瑞穂がペットボトルを奪おうと出した手を田に浮かせたまま固まる。

「Jバ、Jバ、Jバ

片瀬はなおもすゞい勢いで飲み干していく。俺は呆氣ことられたままその光景を見つめるしかなかつた。

「…………ん、んく、ふはあ。はあ、はあ……あーき、霧面相<sup>ハシマツマツ</sup>いめんなれこー全部飲んでしまこおました…………」

なんと片瀬は息もつかずにペットボトルの水を全て飲み干してしまつた。そのJとJに片瀬自身が一番驚いていて、あたふたと困惑している。

「み、水……。俺の、みず……」

俺は逆に全身の力が抜けてしまつて、空になつた俺のエネルギータンクを見つめていた。

瑞穂はなぜだか悔しそうな顔をしていたのだった。

### 33回『水、水、みず』（後書き）

センター終わりました。前期終わりました。後期は…知りません。一年ぶりの更新です。長らくお待たせしてしまつことになり申しありませんでした。

これから大学まで少し暇ができるのでぼちぼち再開できたらいいなと思っています。

### 34日田『滝発見!』

葉と葉のざざめく音に混じり微かに聞こえる。さわさわと、言葉では表現できない、聞いているだけで涼しくなるようなあの音。

「あ、秋人！？」

瑞穂の声を背に俺は走り出した。

無数に林立する熱帯樹を搔き分け、不安定な足場に転びそうになりながらも走った。

間違いない。土の感触。冷ややかな空気。期待は着実に確信へと変わっていく。

不意に視界が開けた。と同時に、確信は喜びに変わった。

あつた。

人一人分くらいの高さから絶え間なく落ちる水。それが直径十メートルほどの滝つぼに次々と吸い込まれていた。

「滝だ……水だ……いよしあああ……おーい、瑞穂！片瀬さん

！」

「ちょっと秋人つたらビームで行く……え？」

「き、霧宮君置いてかないでくだ……あ」

俺はくるりと一人に向き直つて、両腕を腰にかけ胸高々に、

「どーだスゴイだろう偉いだろつ。微かに聞こえる滝の音を頼りに  
ここを見つけた俺様の、なんたる偉功。功勞。あが 勲勞！これを機に瑞  
穂は俺を見直し、いや違うな……敬い！崇め奉るべし！片瀬さんは  
……褒めてくれると嬉しいかな」

キまつた。この気持ちはなんだろう。この気持ちはなんだろう。  
ああ、久しぶりに俺カツコいい。

俺がわずかばかりの功績に一人酔いしれていると、腰にかけてい  
る両腕が急に圧迫され、重くなつた。

「秋人偉い！今回ばかりは素直に見直すつ」

「霧宮君スゴイです！やつぱり頼りになりますつ」

予想外の事態が起きた。二人に両側から抱きつかれている。片瀬  
さんだけでなく瑞穂さえもがデレた。ここまで反応が素直だと逆に  
怖い。

「え、え？あの、ここはなんかしらツツ「むとじうじや……」

「私もうヘトヘトだつたの。喉はカラカラだし。だから秋人には感  
謝感謝

「はい。私も実は限界で…。もつちょっとで弱音はいぢやうとこで  
した」

一人はなおも猫のようすに擦り寄つたままだ。上にパークーを羽織

つているとはいえ、その下は水着一枚。もう何も言つま。

「ああ、両腕が幸せでいっぱい」

漏れた。口から漏れた。

全身からをあつと血の氣が引く音がしたかと思つと、一人がバッと身を引いて胸を押さえる。

「「えっち」「

一人はきれいこはるると、じと目で俺を睨んできたのだった。

秋人は水分補給を終えると、それくさといなくなつた。有紗たちにこの場所を知らせるためだと言つていたが、実際はどうなんだか。どうせいたまれなくなつて逃げ出しただけだらう。

残された私と緋那ちゃんはこの周辺の探索と食料調達を任せられた。

「不思議ですね」

「え?」

食べられそうな果物がなつていなか木を見上げてみると、隣で

同じく見上げていた緋那ちゃんが口を開いた。

「あの滝です」

「滝？」

緋那ちゃんは見上げるのをやめ、それほど高くはない滝を見つめていた。

「滝がどうかしたの？」

「はい。こんな小さな島のどこから水が流れてくるんでしょうか」

「ううん……、私にもわからないなあ。いつも自然の摂理に詳しいわけじゃないし」

それほど高くはない滝のてっぺんは背後にある空の薄い青と混ざり合つて、まるで空から水が流れ落ちてきているかのように見えた。

陽光が射す滝つぼも幻想的で、ここだけぽつかりと開いた空間は、木々が光を遮つている周りの空間のせいもあるが、眩しいくらいの光に満ち満ちていた。

水面に光が反射し、時折水鳥が水面みなもを揺らす。

見ているだけで心が安らぐような、なんとも心地よい空間だった。

「でも、そういうのはわかるけど、自然ついてじいなあってのは見てるだけでわかるかな」

少しばにかみながら緋那ちゃんに視線を向けると、彼女は欲しかったおもちゃを買ってもらつた少女のような横顔をしていた。

「私、あの街から出たことってあまり無くつて。ましてやこんな風に友達と旅行するなんて経験は今までありませんでした。潮騒も、砂浜も、滝も、いつも病室のテレビの中でしたから。だから」

緋那ちゃんがこちらを向いた。

「今すぐ楽しいんです。みんなと、綾崎先輩といいで週いで」  
そう言つ緋那ちゃんの顔はすぐ晴れやかで、この子はなぜこんなにも人を幸せにできるのか。

素直で、けなげ健氣で、優しくて。

自分とは正反対の女の子がそこにいた。

秋人もきっといろいろ子が好きなんだろうな

田の前の彼女が羨ましくて、素直じゃない自分が妬ましかつた。

「先輩？」

不思議そうな顔で緋那ちゃんが見つめていた。

「あ、「めん。なんでもないの。私も緋那ちゃんと来れてとっても楽しい」

自分は今、素直に笑えただろうか。

緋那ちゃんは少し照れたような顔で笑い返してくれた。

「あつ、やうだ。せつかくだから水浴びしない？やつから汗で体中べとべとだし」

「えつ？でも霧宮君たちに悪いんじや……」

「いいのいいの。秋人もちょいどいないんだし今のうつむく、ね？」

緋那ちゃんは少し迷っていたようだが決断は早かった。

「はーーー。」

満面の笑みを乗せた元気のよい返事が返ってきた。

「よーし、じゃあせきのでジャンプねー。」

「えつ？ちよつと待つて心の準備が」

「せーーーのー。」

「あつ……」

じゃほん。

一人分の水音が森の中にじだます。

水に浸かった足首から、きーんと頭のてっぺんまで冷氣が走った。

「 うめたい 」

図「うめたい」とも同時に出了たその言葉に、一人で笑い合つた。

小川が流れる方向とは逆に歩みを進めていく。それもずいぶんと早足で。額から流れ落ちる汗が目に染みる。ビーチサンダルの鼻緒が痛い。

俺は焦っていた。早く。速く。

有紗先輩への憤りをぶつけるように地を踏みしめながらも懸命に歩く。

そう。有紗先輩のせいだ俺は焦っているのだ。

遡ること十数分前。

瑞穂たちを残し、俺は炎天下の中釣りに勤しむ倉本姉弟に命の水を届けるべく、一人浜辺に向かった。一人分の胸の感触に鼻を伸ばしていたのがばれて、いたたまれなかつたことも一因であることも付記したい。

それはともかくとして、滝つぼから流れ出る一本の小川を辿ったわけだが、これが見事、俺たちが昨日遊んでいた浜辺と、片瀬の別荘を挟んだ反対側に通じていた。倉本姉弟はそこからそう遠くない岩場にビーチパラソルを設営して釣りをしていた。

案の定二人のスポーツドリンクは空になつていて、二人とも暑さのためか口数も少なかつた。あの元気の塊みたいな有紗先輩のダレた姿など想像だにしていなかつたので、珍獣を見に来た動物園の客のような視線を送つたら睨まれた。その顔すらも怖くなかったが。

そんな状態でも、どこからか持つてきた青いバケツの中にはすでに魚が大量に入つていて、これでも少ないほうだというのだからすごいものだ。あの姉弟は何をやらせても人並み以上なのだろう。

俺は小川を辿つた先に滝があることを告げ、持つてきた三本のペットボトルを渡すと、司が一本、有紗先輩が一本、瞬く間に飲み干してしまつた。俺の手からボトルを奪うときの目なんかは血に飢えた猛獸のようで、一瞬たじろいでしまつた。

そして有紗先輩は空のペットボトル五本を俺につきつけっこつに言つた。

マッハで汲んできなさい。じゃないと秋人つちの分の魚は無し、と。

俺はため息をつきながらナップサックを背負いなおした。空のペットボトルが中で軽い音を立てる。普段なら軽い荷物のほうが嬉しいのだろうが、今はペットボトルの中身が満タンであつてほしかつた。

「俺だつて疲れてるのに。のど渇いてるのに」

有紗先輩の人使いはあんまりにもあんまりだつた。司の哀れみの籠つた、しかし決して手を差し伸べよつとはしない瞳が憎らしい。

「…………つと…………めてください…………」

水場までもう少しとこづりで、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「いいでしょお？ほおら、早くしないと秋人戻つてきりやうよ  
「うひ

「だ、だからじゃないですかつー綾崎先輩もはやく来てください

瑞穂のヤツ、片瀬と何してんだ？

来てとかどうとか、あの一人は俺に黙つて何をしているのだろう。  
まあ何にせよ、こつちは下男よろしくこき使われてるつていうの  
に、一人仲良く遊んでいるとは許しがたし。

俺は疲れもあつてか、一人が遊んでいると思つと無性に腹が立つ  
て仕方なかつた。

俺は眉間にしわを寄せながらさうに足早にずんずんと進んでいく。

「もー、往生際が悪いんだから。えいつー！」

「あつーちょつ……」

「お前らーなに遊んでんだ……よ」

林を抜けでちょうど木の陰から顔を出すと、一人は水の上で組ん  
ずほぐれずの攻防戦を繰り広げていた。瑞穂が片瀬を後ろから羽交  
い絞めにし、片瀬がそこから抜け出そうと必死にもがいている格好  
だ。

「なつ！秋人！」

「さやー！」

「……は？」

ただし二人とも裸で。

時が止まつた。

実際に止まるはずなどないが、確かにここにいる二人の時は止まつたのだ。

動かない。動けない。いや、正確に言つなら動きたくない、か。

瑞穂は文字通り素っ裸で布切れ一つ身に着けておらず、片瀬は胸と腰をわずかに覆つだけのセパレーツ型の女性用海水着 つまりビキニの胸の部分を瑞穂に驚掴みにされた状態で固まつていた。

「キテ」つて着衣のほうかよ……

なんにせよ俺は目の前の光景から目を逸らせなかつたし、この後の展開を考えると、恐ろしくて身動きひとつできなかつた。

ああ、できるならこのまま時よ永遠に

「いっ、いっ、いやああああああああああああああああつ……」

「あ、秋人は後ろ向いてつてばー！」

「はいいいい！」

片瀬の悲鳴が森にこだまし、瑞穂の怒号が俺を射抜き、俺の狼狽がこの後の結末を静かに暗示していた。

緋砂島編も11話目とずいぶん長くなつてしましました。もう少し短くしたかったのですが…。これも筆力の問題ですね（汗）それなのにクライマックスまでもうすこしあります。気長にお付き合いいただければ幸いです。

現在外は大雪。季節感まるでなし！

### 36日目『身体的ダメージ心的ダメージ』

俺はパークーの襟元を掴み上げられながら必死に救援を求めた。眼前には鬼神のごとき眼光を放つ常勝のヒューマン兵器が、そのわななく拳を振り上げている。

この場で唯一彼女を止められる人物を探す。もはや俺は同じく被害者であろう少女に助けを請うしか他に道はなかつた。

視界の右端に膝を抱えてうずくまる人影を捕らえた。一縷の望みを賭けて呼びかける。

「片瀬さん！頼むから助けて……！」

「……みやくんに見られた……霧宮君に見られた……霧宮君に見られた……霧宮君に……」

駄目だ。終わった。

片瀬はぶつぶつと何かを呟きながら、人差し指で地面に円を描くことに夢中だつた。

万事休す。

「ねえ秋人、どこから殴られたい？頭？顔？おなか？それとも」

鬼婆のような形相が、一転して聖母のように柔軟な顔つきに変わつた。その後光さえ射して見える彼女の口からは、子供を諭す母親を髪<sup>ほつ</sup>とさせる声で、その雰囲気と真逆の恐ろしい呪詛が紡がれる。

「ビリもむづ殴られてるわー・やめろ瑞穂ー・この暴力マシーンー。」

「あれ? 何でそんな口の利き方するの? 秋人つてMだつけ?」

「これだ。本気で怒った瑞穂は優しい口調で猫なで声なのだ。俺の中で往年から積み重ねられてきたこの恐怖は、何物にも代え難いトラウマとして肺腑に植えつけられた。

綾崎瑞穂という秀麗な外見に籠絡されている輩は、この声を聞いただけで腰碎けになるだろうが、俺の場合は違つた意味で卒倒もんだった。

世界一恐ろしい微笑みを湛えた彼女はなおも攻撃の手を休めない。

「やつー・やめつー、痛い! 股間は、はんそ…………ツ!」

瑞穂の膝が俺の脚の付け根にクリーンヒットする。その天を突こうかという一撃に、俺の心と同じくらい纖細である器官が耐えようはずもなかつた。

俺は男の大事なところを押さえてその場につづくまつた。内臓が無理やり上方に押しやられるような激痛が、脈動とともにどくんどくんと襲い掛かってくる。あまりの痛みに額からは脂汗が滲み、口からはよだれが垂れ流しになつてゐる。

ジャンプ、ジャンプしなきや……

悶絶する中で、本能があるいは身体に刷り込まれた苦汁がそう告げていた。

しかし全身タコ殴りにされ満身創痍の俺は、立ち上がるこ<sup>と</sup>とはもうろか、顔を上げ俺の身体を蹂躪した歴戦の古強者を睨むことすら叶わず、地にひれ伏すのであった。

「「めんつてわつかから謝つてるじやない」

「「めんで済むかあああー危うく俺のが使い物にならなくなるとこだつたんだぞー！」

「それは困る、けど……」

「困るのは俺だああー何で元凶のお前が困るー。」

「それは……」

俺と片瀬の前に立たされた瑞穂は、やや拗ねた感じで居心地悪そ<sup>う</sup>うに羽織っているパーカーの裾をもじもじと弄つている。

散々理不尽な暴力を振るわれた俺の虫の居所は悪い。こ<sup>と</sup>どばかりに瑞穂を怒鳴りつける。

「だいたいなんだ？俺がせかせか働いてるつてのに遊んでやがつて。それも全裸で」

「うう

「あまつさえ嫌がる片瀬さんを脱がせようとして。それも全裸で」

「うう

「それを偶然目撃した俺はノゾキか？水着をわざわざ脱いで全裸で遊んでる裸族を見た俺は！」

「そんなに全裸全裸言わないでよお……」

瑞穂は羞恥と罪悪感のためか少し涙目になりつつも、反抗の色を隠さない。

「裸を見た俺も悪かつたけど、今回ばかりはお前が悪い。ちゃんと反省して」

「まあまあ霧宮君もこのくらいにしましよう。私は……うん、怒ってはいませんし、綾崎先輩も反省しているし。普通裸見られたら女の子は恥ずかしいものですから、瑞穂先輩の気持ちもわかつてあげてください」

「紺那ちゃん……」

片瀬が瑞穂のフォローに入つてこの話は終わりにしましようと調停役を買って出る。しかし瑞穂はこれ幸いと片瀬の言に便乗してきた。

「そうよそうよ。秋人はノゾキの常習犯なんだから、前みたいにノゾかれたって思つても仕方ないじゃない

「えー…まさか霧宮君、以前にノゾキを働いたことあるんですか…？」

片瀬の軽蔑のこもった冷たい眼差しが俺を貫く。

「違ひつー断じて違うつーノゾいたことなんて一度もない！前回も今回も悪気は全くない」

確かに過去に瑞穂の入っている風呂にそいつとは知らずお邪魔したことはあるが、俺の過失は問われるにしてもワザとではない。死地に自ら率先して飛び込むなど、草食動物のすることではないからだ。

「あらびーかしら。あのときお風呂場に、秋人裸で突貫してきたじゃない」

「さ、霧宮君がそんな人だつたなんて……」

「待つてくれ片瀬さん！誤解だ！誤解なんだー瑞穂もテタラメ言つなよつー！」

「データラメ…？」の前のことも忘れやつたの？

「つ…。この前…」

「だあああああああ…瑞穂ーお願いだから勘弁してくれー！」

「かんべん？つてことはノゾキだつたつて認めるの？」

「霧宮秋人君…」

「ちつがあああああうー片瀬さんもフルネームで呼ばないで」

瑞穂の反撃により、片瀬の中での俺の株は急激な下落に陥った。この後片瀬の誤解を解くのに大変な労力と時間を割いたことは想像に難くないだろう。

瑞穂に切れるカードを握らせすぎたことは自分にとつて最大の損失であり、ここにきて再度、彼女を不俱戴天の、しかし極力歯向かつてはならない敵と認識せざるを得なかつた。

### 36回目『身体的ダメージ心的ダメージ』（後書き）

33話からこのお話をまで一話のよつです。  
よつでよつて書いたのは私なのですが（汗

次話から進展します

「遅いぞおー秋人つち。一時間の遅刻だ」

小川を下り片瀬家別荘付近の海岸線に戻った俺たちに、バケツを持った有紗先輩が憤然と話しかけてきた。無論、バケツの中では大漁と言つても差し支えないほどの魚が窮屈そうに泳いでいる。

俺が無言でナップサックから水の入ったペットボトルを差し出すと、有紗先輩は引っ手繰るようにそれを奪つて喉を鳴らしながら飲み始めた。

「…つぶはあ、とにかく秋人つち。君の夕飯は抜きということで異論はないな……つて、どうしたのそのほっぺ。また綺麗な手形だと」

「別になんでもありません。遅れすみませんでした」

頬を隠すように押さえながら、俺は仏頂面で答える。

有紗先輩は俺と俺の後方にいる一人を交互に何度か見比べた後に、俺の大嫌いなニヤついた笑みを浮かべた。

「ははあ〜ん、さては秋人つち、また何か面白いことやらかしたな? ほり、なにがあつたの? お姉さんに話してみなさい」

「遠慮します」

俺はにべもなく返し、さつきから姉の後ろで釣竿一本抱えて水を

飲みたいと視線で訴えかけてくる弟にペットボトルを渡そうとする  
と、有紗先輩がガツチリと肩を組んでそれを阻止した。司の耳がし  
ゅんと垂れたような気がした。

有紗先輩は俺の耳元で囁く。

「もし何があつたか話してくれたら夕飯の件はチャラにしてあげよう。それにさつきからシンシンしてる御一方のフォローにも回つてあげれるよ? ほら、ビーセ後から吐くんだしさ。今吐いたほうが楽だよ?」

「」の先輩はただ面白がっているだけだ。その証拠に、新しい玩具を見つけた時の子供の、とびっきり獰猛な瞳をしている。しかし新しい玩具をねだる子供の粘着力がすごいものであるように、有紗先輩はそれにもた拍車をかけて凄い。きっとあの手この手で吐かされるであろう「」とは田に見えていた。

俺はやがて観念したように大きくため息をつくと、事の顛末を搖い揃んで説明した。

話を聞き終わった有紗先輩は笑顔で一言。

「ふむふむ。それは役得だつたね」

ふざけるな災難だ。しかし彼女の言つている通りに思つてゐる自分もいて、それが悔しかつた。

俺は今日何度目かわからない水汲みへと出かけていた。俺以外の四人は、探索班が今日半日かけて収穫した“食べられそう”な果物と、フィッシング班が獲った大量の魚で夕飯の仕度をしている。できれば俺もそちらに混ざりたかったが、そうは問屋が卸さなかつた。

まず何をするにも水は必要不可欠で、水汲みをする係りが一人は必要だし、俺には有紗先輩との約束を破つた落ち度がある。瑞穂は裸を見られたこともあってかご機嫌斜めだし、片瀬に至つては目が合うとすぐに逸らされて、常に一メートル以上の間隔を取られる始末だ。司はとくに疲れた顔をしていて、この炎天下の中の釣りが堪えたことも一因だろうが……。

いや違う。

俺は手を合わせ一人で呟く。

きっと有紗先輩に体力を根こそぎ持つていかれたのだ。有紗先輩はなにかと司にちょっかいを出したがるので、姉のそういうところが苦手な彼としては、あの一人つきりの釣りが想像以上に辛かつたものと推察される。

俺は再度手を合わせせめてもと、頑張った戦友に念仏を唱えた。

そんなしがらみ渦巻くこの状況では、どうしたって俺が水汲み人間に駆り出されなければならないのであつた。

ため息をつき、空を仰ぐ。

時は夕刻。背の高い木々の間から見える西の空は、微かに白み始めていた。あと半時もしないで空は茜色に輝きだすことだらう。きっと島の西側から見る水平線は絶景なのだろうなと、幻想的な世界になんとなく想いを馳せた。

そうしていつに滝っぽに辿り着くと、<sup>しゃ</sup>背負っていたナップサックから六本のペットボトルを取り出し両手に一本ずつ持つて、滝に向かって手を差し伸べた。冷えた水が両腕の体温を奪っていく。

「あー気持ちいいー……」

「霧宮様」

すぐ耳の裏側から名前を囁かれ、俺は文字通り飛び退いた。思わず水の中に尻餅を搗き、全身を水浸しにしながらも後ろを振り向いた。さつさまで手に持っていたペットボトルはゆらゆらと水面を漂つていて。

「はつとある。なぜ、どうして、お前が。

「な、なんで……」

「なんで、と言われましても質問の意味が正確には取れませぬえ、推測でお答えすることになるのですが……きっと“なんでここにいる”と仰りたいのでしょうか」

対顔する様相だけはいつちょ前の老紳士は、きれいに整えられた口髭を撫で付けながら、したり顔で片手を瞑つた。

そいつは俺からの反応がないと判断すると、続けてこう言つた。

「わたくしは片時も、緋那お嬢様の御側を離れてはおりません。お嬢様に万が一のことがあれば、旦那様に申し訳が立ちませんし、なにより」

半ば沈みかけていたペットボトルを拾い上げる。それを何度か横に回転させるように振つて中に入つている水を捨てる。また水を汲み始めた。

「なにより、彼女は私にとつても宝物でござります」

白髪の初老は少し恥ずかしそうに笑つてゐるよつて見えた。

俺はもう一つのペットボトルを拾い上げると、彼に並んで水を汲みおし始める。

「で、狩谷さんは俺にそんな恥ずかしい台詞を言つたために会いに来たんですか？大事な大事な片瀬さんから離れてまで」

驚かされたのが少し気に障つたので、嫌味を込めて返してやつた。

狩谷は満杯になつたボトルにキャップを閉めると、空の容器に手を伸ばした。

「いいえ違います。大事な大事なことを霧宮様にお伝えするために」

彼はゆつくりと、言い聞かせるよつて言葉を紡いだ。

「わたくしが皆様のため、いえ、緋那お嬢様のためにご用意したこの旅行の最大の目的が、このすぐあとに控えております。霧宮様に

せりの計画に一役買つていただきたいのです

「また頼み」とですか？正直もつひざつなんですかね？」

俺はこれ見よがしに顔を突き出した。

「……でも、片瀬さんのため、なんですよね？」

「やの通りにいります」

狩谷は真剣な顔で頷く。

突き出した唇を横に弓を伸ばし、にひとつ笑つた。

「ならじょうがないですね。計画つて何ですか？」

狩谷は少し迷つとしたよつと頷くと、

「霧宮様の、協力、心から感謝いたします。……おお、やつでした  
そうでした」

急に何かを思い出したよつと手をポンと打つた。

「片時も離れなかつたと申し上げましたが、お一方の裸身を見たのは  
霧宮様だけで、ありますゆえ、じつは、安心なさつてください」

狩谷はやせつぱいまでも食えなこやつだった。

377 日田『逢つ魔が時』（後書き）

大学に入つてからというもの予想以上にパソコンを開けません！そもそも自宅に帰つてこれません（汗）

能書きはさておき、実は話がもう2～3話ずいぶん前からあるのですが、使いどころがわかりません。秋人と瑞穂の出会いとか夢の話とか…。

今後の進展次第で使うかどうか決めたいと思います。できるだけ早いうちに次話上げたいなあ・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4931c/>

---

彼女と陽だまりの中で

2010年10月9日12時36分発行